

靈界物語 第三八卷 舍身活躍 丑の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三八卷』愛善世界社

2001(平成13)年04月08日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序歌 じよか
總説 そうせつ

第一篇 せんまんむりやう
千萬無量

第一章 みち 道すがら （一〇三八）
第二章 よしぎきせんにん 吉崎仙人 （一〇三九）

第三章 歸郷ききやう 〔一〇四〇〕

第四章 誤親切ごしんせつ 〔一〇四一〕

第五章 三人組さんにんぐみ 〔一〇四二〕

第六章 曲の猛まが たけび 〔一〇四三〕

第七章 火事蚊くわじか 〔一〇四四〕

第二篇 光風霽月くわふうせいげつ

第八章 三ツ巴みどもゑ 〔一〇四五〕

第九章 稍安定ややあんてい 〔一〇四六〕

第一〇章 思おもひ出で 〔一〇四七〕

第一一章 思おもひ出で 〔一〇四八〕

第一二章 思おもひ出で 〔一〇四九〕

第三篇 冒険神験ぼうけんしんけん

第一章 冠島をしま（一〇五〇）

第二章 沓島めしま（一〇五一）

第三章 怒濤どたう（一〇五二）

第四章 禁獵區きんりょうく（一〇五三）

第五章 旅裝りよさう（一〇五四）

第四篇 靈火山妖れいくわさんえう

第一章 鞍馬山くらまやま（一一〇五五）

第二章 鞍馬山くらまやま（一一〇五六）

第三章 元伊勢もといせ（一一〇五七）

第五篇 正信妄信

第二一章 淒い權幕すこ けんまく（一〇五八）

第二二章 難症なんしやう（一〇五九）

第二三章 狐狸々々こりこり（一〇六〇）

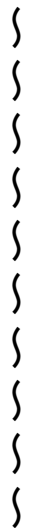
第二四章 呪の釘のろひ くぎ（一〇六一）

第二五章 雜草ざつさう（一〇六二）

第二六章 日の出ひで（一〇六三）

第二七章 仇筭あだばしき（一〇六四）

第二八章 金明水きんめいすゐ（一〇六五）



序歌 じよか

洪大無邊の宇宙 こうだいむへん だいうちう

元つ御祖と現れませる もと みおや あ

大國常立大神の おほくにとこたちおほかみ

別の御靈と瑞穂國 わけ みたま みづほくに

天降りましませし海原を あも うなばら

修理固成し大御祖 つくりかため おほみおや

國常立の大神の くにとこたちおほかみ

嚴の御命を畏みて いづ みこと かしこ

神の眞道を開きたる かみ まみち ひら

教御祖の筆に成る をしへみおや ふで な

教の光り幸ひて をしへ ひか さちは

荒ぶる神や醜御靈 すさ かみ しこみたま

一柱も残らず村肝の ひとつ のこ むらきも

心を直し和めつつ こころ なほ なご

善美き心を振り興し うまし こころ おこ

中津御代より入り來たる なかつみよ いき

醜の教に惑はされ しこ をしへ まど

體主靈從の行動を たいしゆれいじう おこなひ

續け來りし曲の罪 つづ きた まが つみ

宥したまひてこのさきは ゆる

體主靈從の御教の たいしゆれいじう みをしへ

天地の神の御心に てんち かみ みこころ

甚く違へる事の由
この物語讀み習ひ

おぼろげ乍らも天地の
神の經綸を悟らしめ

救はせ玉へ惟神
神代の儘の大稜威

發揮し玉ひて各自が
掌分け玉ふ功德の

隨に隨に宇豆那比玉ひつつ
交こり口會ひ今迄に

神の大道を知らずして
吾大本を辨へず

過ち犯せる雑々の
罪や怠り穢をば

被ひ退ぞけ神の子と
生れ出でたる人草を

導き玉へ神の道
教の道を踏み外し

經と緯との御教を
色々雑多と批難しつ

知らず知らずに日に夜に
過失犯せし事あるも

この世を造りし神直日
心も廣き大直日

直日に見直し聞直し
宥め赦して身魂をば

清め救はせ玉へかし
神の御典は言ふも更

おほもとけう 大本教の御神諭は 漏れなく遺なく過またず
まこと 眞語を眞教と悟らせつ 教司の宣り傳ふ
ことば 言葉の疵も次々に 思ひ出でては自づから
あらた 改め直し正道を 歩ませ玉へ惟神
かみ 神の御前に願ぎ奉る ア、惟神々々
みたま 御靈幸はへましてよ。

大正十一年十月十六日

於龍宮館

本卷は子の巻に續き瑞月王仁が斯道に入信したる經路の大略を口述したもので、實際の百分の一をも盡しては有りませぬ。只子の巻に倣つて巻頭に少しく靈界的活動の經緯を表明しておきました。いよいよ寅の巻より又もや神素盞鳴尊が八岐の大蛇を退治し玉ひたる神界の物語を口述する事に致します。先づ印度方面の神々の御活動より口述する考へであります。この『舍身活躍』の子の巻、丑の巻は何れも斷片的物語で、年次を逐ふては述べてありませぬから、其おつもりで讀んで頂き度いものであります。

大正十一年十月十五日

第一篇 千萬無量

第一章 道すがら（一〇三八）

「天帝一物を創造す。悉く力徳による。故に善惡相混じ醜互に相交はる」
これ道の大原の初發に示されたる聖句である。つらつら考ふるに、蒼空を仰望しても海原を見ても、山川蟲魚を見ても、悉く善惡美醜の區別が様々あつて、此世界は至善至美の神様がお造りになつた以上は、惡といふ事は微塵もなく、至善至美の物ばかりであらねばならぬ」と云ふ人がありますが、決してさうはゆきませぬ。或人が、喜樂に向つて詰問して曰く、
「天帝果して全智全能にして、萬物を造りかつ眞善美を好むものならば、何故其全智全能の神徳によつて、美なるもの善なるもののみを拵へて、醜惡なるものを拵へぬ筈である。神の意志果して眞善美を愛するならば、元より善ばかりを拵へ

て置けば、別に悪を造つておいて悪を改めしめむとて宣傳に努力するの必要は無
いではないか。要するに天帝は自分から醜悪なるものを造り、其醜悪を嫌ふと云
ふのは自家撞着も甚だしい矛盾である。吾等はここに至つて全智全能の神を疑は
ざるを得ず」

と云つた人が澤山にあつた。然し乍ら何人と雖も今日迄の諸々の宗教、倫理、道
徳説が貧弱なる頭惱に浸み込んで居る人の考へから見れば、實に尤も至極の疑問
である。喜樂等も少年の頃から此問題には大變に心を碎いて來たものである。時
の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、凡ての哲學者、宗教家も此問題については
頻りに研究をして居た様である。世界皆善論を唱へるものもあれば、世界皆惡論
を唱へるものも現はれて居る。又「此世は夢の浮世ぢや」と云つて厭離穢土と稱
し、「未來の天國淨土を樂しむのが人生の大目的だ」などと區々の説を立て、所
説紛々として落着く所を知らず、宙に迷ふて居る姿である。古今の學者が一人と
して今日に至る迄、大宇宙の本體を捉え、人生の眞目的を諒解したる者は無い様
である。佛教にしても儒教にしても、現代我國の十三派の神道宗教にしても、其

他種々雑多の宗教にしても、決して宇宙の真相を解決し得た者は無い。然し乍ら尊い事には、我國には皇祖皇宗の御遺訓なる古事記、日本書紀其他の古書が傳はり、言靈の明鏡が歴然として輝き、宇宙の眞理を解決すべき寶典に乏しくはなけれども、闇黒なる今日の思想界に於ては、此眞理を諒解する丈けの偉人も賢哲も學者も現はれて居ないと云ふ事は、國家社會の爲めに實に慨嘆の至りである。喜樂は幼時より我國體の淵源を極めむとし、且明治卅一年以後今日に至る迄、殆ど廿五年間、艱難辛苦を積み神界の眞相の一端を極めた結果、宇宙眞理の一部を『靈界物語』として發表する事となつたのである。道の大原の聖句にも、天地間の萬物に善惡美醜の混交せるは、全く力徳の鹽梅によるものと斷定を下してゐるのは、實に萬古不易の眞理である。

偕此力徳と云ふ事は、一朝一夕に説き明す譯には行かぬ。約言すれば、動、靜、解、凝、引、弛、合、分の八力の活動の如何によつて、善惡美醜大小強弱が分れるのである。『人は天地の花、萬物の靈長』と稱へられて居るが、大本では一歩進んで、

☐ 神は萬物普遍の靈にして人は天地經綸の司宰者なり☐
と斷定を下して居るのである。これも出口教祖の廿七年間の筆先の大精神を通觀して得た所の斷案である。斯くの如く尊き天地經綸の司宰者たる人間にも、亦善惡美醜大小強弱の區別があつて、中には天地經綸の司宰者どころか、却て天地經綸の妨害をなす人間が澤山に出來て居る。斯くの如き人間が現はれて來るのは、要するに一つは教育の如何にもよるのは無論だが、眞の原因は決してさうでは無い。肝賢の大原因は天賦の力徳の過不及による處の結果で、お筆先の所謂身魂の因縁性來によるものである。概して人間の肉體の善惡強弱は、凡て力徳の過不及により生ずる所の結果である。人の心の善惡智愚は元より教育によつて其一部分は左右せらるるものである。然し人は神様に次での尊きもので、世界を善に進め美に開くべき天職を天賦的に持つて居るものである。人間は小なる神として又神の生宮として此世に生れ出でたる以上は、終生神の御旨を奉戴し天地の御用を助け奉らねば、人と生れ出でたる本分が盡せないのである。人間は裸體で生れて來たのであるから、又裸體で死ねば宜いと云ふ様な棄鉢根性では、人生天賦の職責

が遂げられぬのみならず、折角神界より選まれて神の生宮として世に生れさして頂いた、大神の御聖旨に背く罪人となるのである。

人生の本分としては、第一に天地神明の大業に奉仕し、政治をすすめ、産業を拓き、且眞の宗教を宣傳し、道義心の發達を助けて世界の醜惡を驅追し、眞善美の天地に進めて行かねばならぬのである。他人は如何でも構はぬ、自分のみ清く正しければ宜いのだと云つて、聖人氣どりで濟まして居る様な事では、人間としての天職を全くしたものと云ふ事は出来ないのである。喜樂は常に政教慣造の進歩發達を祈願し、且完成せしむるを以て人たるものの天職だと考へて居る。皇祖天照大神様が建國の御趣旨は、政教慣造の四大主義の實行であつて、

一、政は萬世一系也

一、教は天授の眞理也

一、慣は天人道の常也

一、造は適宜の事務也

即ち此四大主義を實踐躬行するのが人生の本分であつて、特に我神國に生れたも

のは、一層責任の重且つ大なるものである事を忘れてはならぬ。吾人は何れも此主義に向つて、最も忠實に勤め奉らねばならぬのである。吾人は人生の重大なる責任を感じ、如何しても肉體の安樂のみを貪る事は出来ない。人生の本分を幾分なりとも遂行し得ざる内は、如何なる榮華も歡樂も自分の心を満たす事は出来ない。美衣美食財寶なども到底天授の心魂を喜ばすに足らぬ。只天下公共の爲めに自分としての天職を盡し得る事が肝腎である。一寸先の見えない様な不完全なる、罪に穢れたる吾人の身を以て、到底重大なる天職を完ふする事は出来ずとも、其幾分にも奉仕し得たならば、これに過ぎたる人生の幸はないのである。

今日の瑞月としては、淺薄なる肉體上の觀察から見れば、實に安樂なものの様であるが自分としては實に一日も安んじては居ないのである。數多の役員や信者は親の様に崇め「先生々々」と云つて厚く遇して呉れて居る様であるが、自分の爲めには、却てそれが苦痛の種となるのである。何故なれば役員信者の親切や好意は大に有難迷惑を感じずる事があるからである。自分の眞の使命を諒解するのでもなく、只單に出口教祖のお筆先によつて、色々と私に對する空想を描いて

居る人が多いからである。又如何なる立派な事を話しても説いてもそれは教祖の筆先に出てゐないから用ゐられないとか云つて、如何なる眞理も無造作に葬つて了ふので、何程筆先の精神を縦横無盡に説いても、十分に感得せしむる事が出来ぬのが實に遺憾である。又自分の肉體に對し、役員信者が非常に氣をつけて好意を表して呉れられるが、肝賢要の眞實の精神を汲みとつて呉れるものが少いのは最大の苦痛である。今迄の役員信者は自分を妙な事に過信して、堅實な教理等は頭から耳に入れぬのみか、今に世界の救ひ主にでもなる様に、身魂も研かずに騒ぎ廻つて居るのは實に残念であります。自分に少しにても權謀術數的精神があるならば、十年以前の大本は、役員信者等とも折合がうまくついて、極めて平和であつたでせう。役員や信者の迷信を利用して猫を被つて居やうものなら、物質的方面の事などは如何な事でも出来たであります。然し乍ら自分の天授の良心が如何しても、そんな事を許さない。今の世の中の様に神の道は方便や手段では行かぬ。方便や手段を以てした事は何時しか化の皮が剥げるものである。況んや至誠至直の神に仕ふる身分としては、夢にだにも良心の許さぬ事は出来ない。自

分は天地と共に亡びざる大眞理即ち神の大道より外の道を歩む事は出来ぬ。眞理の爲めには一身を獻げて悔いないのである。今日の場合は如何にしても社會一般の誤解を正し、大本を正解させることが必要であると感じたから、茲に天下修齋のため眞理の旗幟を翻し、神様に一身を獻げて口を藉し、茲に愈此物語を發表する事となつたのである。混濁せる社會のため一身を捧げて五六七の御世に奉仕せむと云ふ誠の人は、一日も早く此物語の精神に目を醒まし天下萬民の爲めに誠を盡して頂き度いものである。

選ばれし神の使の甲斐もなし
人を導く力なき身は

(大正一一・一〇・一四 舊八・二四 北村隆光録)

第二章 吉崎仙人（一〇三九）

丹波何鹿郡東八田村字淤與岐といふ、大本に因縁深き木花咲耶姫命を齋られたる彌仙山のある小さき村に、吉崎兼吉といふ不思議な人があつて、自ら九十九仙人と稱してゐる。

彼は七才の時、白髪異様の老人に山中に出會ひ種々の神祕を傳へられてから、其言行は俄然一變し、日夜木片や竹の端等にて、金釘流の筆先を書きあらはし、天のお宮の一の馬場の大神様の命令を受けて、天地の神々に大神の神勅を宣傳するのを以て一生の天職となし、親族、兄弟、村人よりは發狂者と見做され、一人も相手にする者が無い、それにも屈せず、仙人は自分の書く筆先は、現代の譯の分らぬ人間に宣教するのではない、宇宙の神々様に大神の御心を取次ぐのであるから、到底人間の分際として、自分の書いたことが紙一枚だつて、分るべき道理がないのだと云つてゐる。二十五六才の頃から郷里の淤與岐を立出で、口上林村の山奥に忍び入り、平素は樵夫を職業となし、自分一人の食ふ丈のものを働いて

拵へ、チツとでも米鹽の貯へが出来ると、それが大方なくなるまで、山中の小屋に立こもつて、板の引わたたのに竹の先を叩き潰して拵へた筆で神勅を書きあらはし、日當りのよい場所を選んで、大空を向けて斜に立てて日にさらしておくのである。其仙人の書いた筆先は、大本の教祖のお筆先と對照して見ると、餘程面白連絡がある。其筆先の大要は先づザツと左の通りである。

「今日迄の世界は、吾々邪神等の自由自在、跳梁する世界であつたが、愈天運循環して、吾々大自在天派の世界はもう濟んで了つたから、これからは綾部の大へ世を流して、神界の一切の權利を、良の金神に手渡しせなくてはならぬ」といふ意味の事が澤山に書いてある。又出口教祖の古き神代からの因縁などもあらまし書き現はしてある。

此九十九仙人の精靈が、上谷の幽齋修行場へ現はれて来て、當年十八才の四方春三に神懸し筆を取らして、

「此世一切の神界の事を、綾部の大本へ引つがねばならぬから、今度みえた靈學の先生と、足立先生、四方春三と三人至急に來て呉れ」

とスラスラと四方の手を通じて依頼文を書いた。そこで喜樂は靈學上の参考の爲、
一つ研究して見ようと思ひ、其翌日直様、口上林の山奥の仙人の許へ出張する筈
であつたのが、折ふし綾部に急用が出来たので、歸らねばならなくなつた。さう
してゐると三日目の正午過ぎに、上谷の修行場から四方祐助といふ老翁サンが慌だ
しく大本へ飛んで来て、
祐助「上田先生、大變なことが出来ました。今の先足立サンと春三サンが謀し合
せ、上田先生にかくれて、九十九仙人に會見に行き、一切の神界の秘術を授けて
貰ひ、歸つて来て、上田をアフンとさせてやらう、兔も角十分の神力を受けて居
らねば、上田を放り出すことが出来ぬ。これは大秘密だから、決して上田には知
らしてはならぬぞ……と云つて、二人があわてて出て行かれました。あの人達
二人が、先生に隠れて勝手に行くといふのは、何れ碌な事ぢやありますまい。又
一つ何かよからぬことを企むのでせう。先生、グツグツして居つては大變です
から、サアこれから私が口上林の山の口まで御案内致しますから、今から二人の後
を追つかけて行つて下さい、サア早よ早よ！」

と急せき立たてて居ゐる。そこで喜き樂らくは早さつ速そく教けう祖そに面めん會くわいして、其その報ほう告こく通どほりの事ことを申ま上しげると、教けう祖そは、

「そんなら一時いつときも早はやう、御ご苦く勞らう乍ながら仙せん人にんに會あうて來きて下ください」

と云いはれた。祐いうすけ助ぢい爺さんの案あん内ないで、口くち上かん林ばやしの仙せん人にんの居をるといふ杉すぎ山やまの一いち里り程ほど手て前まへまで送おくられ、そここから祐いうすけ助ぢい爺さんに地ち理りを詳くはしく教をしへられ、袂たもとを分わかち、雜ざつ草さうの生おひ茂しげる羊やう腸ちやうの小こ路みちを只ただ一ひとり人のほ登のぼつていつた。

案あん内ないも知しらぬ草くさ深ぶかい峻しゅん坂ばんを、一いち枚まいの紙かみに書かいた、そそかしい地ち圖づを力ちからに辿たどり辿たどりつ、心こころを先さきに進すすんで行いつた。半はん里りばかり登のぼつたと思おもふ時ときに路みちの傍かたはらの林はやしの中なかに矮わい小せうな小こ屋やがあつて、其その中なかには何なにか二に三さん人にんの話はなし聲こゑが聞きこえて居ゐる。喜きらく樂くは聞きくともなしに、小こ屋やの傍かたはらに佇ちよりつ立たして息いきを休やすめてゐると、六ろく十じふ餘あまりの年としよりの聲こゑで、

「一體いつたいお前まへ達たちは神かみ様さまの御ご用ようを致いたす者ものであるならば、なぜに世せ間けんの義ぎ務むや人にん情じやうを知しらぬのか、そんなことことで如ど何うして衆しう生じやう濟さい度どが出來できる、口くち先さき計ばかりの誠まことで、心こころと行おこなひが正せい反はん對たいだ。衆しう生じやう濟さい度ど所ところか、自じ分ぶん一ひとり人の濟さい度ども出でき來きまいぞ。僅わづかに一いっ錢せんや二に錢せんの金かねが惜をしいか、口くち先さきで甘うまいことことをいって、信しん者じやから金かねを取とること許ばかり毎まい日にち日にち日にち考かんが

へてゐる神商賣人だらう。此老人の勞苦に酬ゆることを知らぬか。俺も一旦それ程惜しい金なら要らぬと云うた以上は、假令此山奥でかつえて死んでもお前達の金は汚らはしい！」

とだんだん聲高になつて罵つてゐる。一方の小さい聲はよく聞いて見れば、聞覚えのある足立正信氏の聲であつた。

足立「オイ爺サン、餘り劫託をつくものでない。山路の修繕料をくれと云つたつて、どうしてそれがやれるものか。どこに修繕が出来て居る。道草一本刈つた形跡もなし、土一所動かした氣配もないぢやないか。今先も道端の芒で足を此通り切り、高い石に躓いて生爪を起したり、これ丈難儀をして居る旅人に、山路の修繕費をよこせもないものだ。金の有餘つた氣違ひならいざ知らず、こんな山子のイカサマ爺イの山賊みたいな奴には、淵川へすてる金があつても、勿體なうてやれぬワイ。世間の人間をバカにするにも程があるぞ。お前もよい年しとつて、よい加減に改心をしたら如何だ。乞食のやうな眞似をして、何の事だ」と鼻先でからかつて居る。喜樂はつと其矮屋の入口を見ると、

「私は妻子眷族も親類もない憐な孤獨者であります。年は六十七才、此奥山へ通ふ人々の爲に、一年中ここに住居して山路を直し、往來のお方の便利をはかつて居る者であります。どうぞ御同情のあるお方は、乞食にやると思つて、一錢でも半錢でも宜しいから、お心持を投げてやつて下さい……世界の慈善者さま……年月日……矮屋主人」

と記してある。右の張札を見て、先程からの小屋の中の爭論の理由も略推定することが出来た。喜樂はよい所で足立、四方の兩人に出會うたと打喜び、直に其小屋へ、

喜樂「御免下さい」

と聲をかけて這入り、爺イサンに、

喜樂「御苦勞さまで御座います」

と云つて十錢銀貨一枚を與へた。老人は別に喜んだ顔もせず、喜樂を見て、

老人「ウンよし、大きな顔して通れ」

と只一言を放つたきり、穴のあく程喜樂の顔を見つめて居たが、やがて吾膝をう

つて、

「ウンウン」

と何度となく諾いて居た。此老人こそ實に不思議なものである。虚構も修飾もない實際話であるから、此處に讀者は注意して貰ひたい。要するに九十九仙人の守護神が、此老人に臨時憑依して、三人の心を試したのであつたと云ふことが後に分つて來たのである。

足立、四方の兩人は、ヨモヤ後追つかけて來まいと思つて居た喜樂の姿が、眼前に現はれたのに一寸面くらつて、

足立「オ、上田サンですか、只一人で此山路をどこへお越しですか。私は一寸急用で上林の某の宅へ行つて來ますから、マア御ゆるりとして休まして貰うて結構な御話でも爺イサンから聞かして貰ひなさい。老人の云ふことは身の爲になりませぬ」

と捨科白を残し、あわただしく矮屋を立て、四方と共に山路を登つて行く。

喜樂はすぐ様後追つかけて行かうとしてゐる時、其老人は袖を引いて、

老人「一寸お待ちなさい、愚老が近路を案内して上げませう」

ときせる煙草を一二服グツと喫み、

老人「サアサアこうお出で」

と先に立ち、老人にも似ず、足も軽々しく仙人の隠れてゐる、杉山の麓の谷川の

傍まで送り、

「サア此川を向うへ渡り、右に取つて一二丁進めば、そこが仙人の隠れ場所だ。

左様なら……」

と云つたきり、早々歸つて行く。

喜樂はよく迂る谷川の急流を渡り、樵夫小屋をさして急いだ。五六丁も登つた

と思ふ頃、九十九仙人は坂路の中央に立つて待つてゐる。そして喜樂に向ひ、顔

色を和げ、さも愉快げに、

仙人「ア、先生、此山路をはるばるとよく訪ねて来てくれましたなア。マアマア

こちらへ来て一服なさい」

と自分の小さい小屋へ案内し、白湯を黒い土瓶から汲んですすめ、いろいろと神

界の祕事を一夜間かかつて、諄々と説き諭した。喜樂は高熊山の第一次の修行や、第二回目の修行の時に、神界から見せられてみた事實を思ひ出し、符節を合すが如きに益々感じ、自分の信念はいよいよ強くなつて來た。

喜樂は矮屋の老人の親切なる案内に依つて、恙なく九十九仙人の小屋に到着し、いろいろと有益な神界の經綸を聞かされ、非常に満足したが、足立、四方兩人の一日たつてもここへ出て來ぬのに心配し始め、仙人に向つて、
喜樂「兩人はキツとここへ訪ねて來る筈なのに、まだ姿を見せぬのは如何なつたのでせう、山奥へでも迷ひ込んで居るのではありますまいか」
と尋ねてみた。仙人は笑つて答へて云ふ。

仙人「アハ、々々、大變な野心を起し、お前さまを出しぬいて、大切な神祕の鍵を握らうとした、腹の黒い人物だから、今日も到底ここへは來ることが出來ぬやうに、神界から垣をされてゐるのだから、明日の朝になつたら、ヤツとの事であるであらう。憂慮するには及ばぬ。天のお宮の一の馬場のお父様も、天のお宮の二の馬場のお父様も、天のお宮の三の馬場の國族武藏吉崎兼吉も、皆お前の體

を守り、此神祕を傳へむ爲に、彼等兩人が居ると邪魔になるから、ワザとに遅れ
さして居るのだ」

といつて微笑して居る。喜樂は仙人の言を一伍一什聞き終り、餘り教祖の筆先に
符合せるに驚き、益々神界に對して一大責任の身にかかれることを覺悟し信念は
ますます堅くなつた。

一方の二人は喜樂の先を越さうとして、却て山路にふみ迷ひ、濃霧の爲に方向
を誤り、深い谷底へ轉落し、身體の各所にすり傷さへも負ひ、迷ひ迷うて漸く又
元の老人の小屋の前に到着し、今度は老人に目が剥けるほど唖鳴りつけられ、ブ
ルブル震ひ乍ら、先の無禮を陳謝し、漸く老人の怒りも解け、老人の好意的案内
に依つて、夜の十一時頃漸く杉山の麓の一軒の宿屋に着いた。其夜はそこで一泊
し、翌日早朝登山して來たのである。二人は、
「餘り心得違を致したから、神界から、お氣付をされたと喜樂サンは思はれるか
知らぬが、これも何か神様のお仕組でせう」
と負惜みの強い性質とて、表面平氣を装うてゐたが、其顔には隠し切れぬやうな

不安な血相が見えてゐた。仙人は足立に向ひ嚴然として、
仙人「お前の面部には殺氣が現はれてゐる。何となく心中不穩だ。一時も早く惟
神の道に立歸つて、及ばぬ企圖を止めなさい。今改心せなくては身の破滅を招き
ますぞよ」

と言強く言ひ放ち、又もや四方春三に向ひ、

仙人「お前は盤古の靈が守護して居る。甚面白くない、お前の大望は、丁度猿猴
が水の月を捉へむとするやうなものだ。今に改めなくてはキツと身を亡ぼすこと
が出て来るぞ。今日只今限り良心に立ち復り、一心に眞心を以て神界に仕へなさ
い。さうすれば昔からの靈の深い罪科を赦された上、天晴れ神界の御用に使つて
貰へるであらう。併し乍ら今の心では駄目だ。早く改めないと、災忽ち其身に至
る凶徴が、お前の顔に現はれて居る。此仙人の云ふことをゆめゆめ疑ふこと勿れ
ときめつける様に言つた。二人は眞青な顔をして一言もよう答へず、體をビリビ
リと震はせて居た。仙人は更めて言ふ。

仙人「いよいよ時節到來して、自分の役目は今日を以て終りをつげた。明日から

は人界へ下つて、人場の勤めに従ひ、餘生を送りませう。神場の用は今日で終結だから、再び訪ねて来て貰つても最早駄目だ。左様なら……」
と云ひすて、大鋸を肩にひっかけ、山奥深く其姿を没した限り、出て来ないので、やむを得ず、三人は歸途に就いた。

これから以後の四方春三は盤古の悪靈に憑依され、邪心日に日に募りて喜樂を排斥し、其後の御用を勤めむと數多の役員信者を籠絡し、いろいろ雑多の計畫を立てて居たが、一年たつた後に、仙人の云ふた如く、大變な神罰を蒙りて悶死するに至つた。實に慎むべきは慢心と取違とである。

惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一〇・一四 舊八・二四 松村眞澄録)

心なき人の誹も何かあらむ
神に任かせし吾身なりせば

上谷の修業場で、二十有餘人の幽齋修業者の審神者に奉仕しつつある處、自分の郷里から「老母危篤すぐ歸れ」との電信が着いた。祖母の急病と聞いた以上は、是非共一度は歸つて見舞うて來ねばならぬ。併しながら一方の修業者の様子を見れば、一日片時も目をはなすことが出來ぬことになつてゐる。ぢやと云つて祖母の病氣を孫として、そ知らぬ顔に打すてておく譯にも行かず、修業者を見放しすれば、又しても以前の如く邪神が襲來して、修行場をかき亂すに違ひない、喜樂が失敗するのを、鵜の目鷹の目で待構へ、缺點を搜して、機會だにあらば放逐せむとして居る某々がある。喜樂は神さまの御道と祖母の危急の場合を思ふと、如何決心したら良いか、進退谷まつて途方に暮れてゐた。兔にも角にも神界へ伺つて見た所、神様のお告に依れば、

「ここ四五日の間に修業場へ歸つて來れば餘り大した邪魔は在るまい……」

との事であつた。そして、

「祖母の病氣は餘程重態ではあるが、生命には別状はない、とは言ふもの祖母のことであるから、近所の人々に對しても、歸らずにはおかれまい、早く行つて來るがよい、一心になつて鎮魂をすれば、八九分通りは平癒する」

とのことであつた。無論出口教祖さまのお口を通してのお示しである。そこで四方藤太郎を不在中の審神者に依頼しおき、喜樂の歸郷中、修行者一同を托して、一先づ穴太へ行くことになつた。喜樂は出立に際し、四方氏に命じたのは、喜樂「不在中に、綾部から教祖さまが迎へに來られても、福島が來ても、又誰が何と云つて來ても此處の修行者は一人も綾部へやつてはならぬ。わけて四方春三、鹽見せい子、黒田きよ子には十分氣をつけて貰ひ度い」

と頼んでおいた。四方藤太郎氏は喜樂の言をよく守つて嚴格に審神者を奉仕してゐた。さうすると二三日たつて、教祖さまから神の御命令だからと云つて、右三人の修行者を綾部の金明會へ連れて歸られた。四方氏も教祖の命令には抗辨しかねて、やむを得ず三人を渡して了うた。三人の修行者は、教祖がワザワザ自分で

お迎いに來られる位だから、自分等三人は大變に神界の思召に叶うてゐるに相違ない、直様慢心をした爲に、又もや妖魅が急激に襲來して、恰も氣違芝居のやうなことを演じ出し、金明會の廣間は、發狂者の巢窟の様になつて了つたのである。

さて喜樂は綾部から只一人で、十四里の山路をボツボツ徒歩で行つて見ると、吾家の軒まで差かかつた時、何とも形容の出來ない一種の悲哀の感じが胸に浮かんで來た。

「あゝ祖母の身の上は如何だらう。まだ玉の緒の命は切れずにあるだらうか。母は如何して居るだらう……」

とくさぐさの思ひに胸は張裂けるやうであつた。急いで吾家に入り見れば、母は縁先の障子を一枚開けて涼しい風を入れつつ、今年八十六歳になつた祖母の看病をしてゐる處であつた。祖母も今日は殊の外氣分が良いつて、庭の若い松の木を眺めて、勢のよい枝振りなどを褒めて居られた。喜樂の妹の君といふ八歳の

幼女が學校から歸つて來て枕許で何だか無理を言つて、母を困らして居る所であつた。

祖母は喜樂の歸つて來たことを知らずに、又何時とはなしにスヤスヤとよく寢入つて居られた。折角寢て居られるのを、目をさましては却て病氣の障りになつてはならぬと、母は自然に目のさめる迄、喜樂の歸つて來たことを知らさぬ様にしてゐた。喜樂は先づ母に不在中の辛勞を謝したり、祖母の病氣の様子などを尋ねて居た。

折しも今迄樂相に眠つて居られた祖母は、何者にか襲はれたやうに、恐ろしい悶絶の聲を出し、稍苦みの心が見えた。母も喜樂もあわてて側へ寄り、よくよく見れば、祖母は今正に何者にかうなされて居る様子である。母と喜樂とが左右の手を取つて、靜かに起し、背をなでさすりなどして居ると、やうやう目をさまし、正氣にかへられた。老の身のやせ衰へた病人の事とて、額も足も手も冷汗にビシヨぬれになつて、見るからにいぢらしく、自然に喜樂の目にも涙が一杯にあふれて來た。稍あつて祖母は力なき目を見ひらき、

祖母「あゝ不思議な夢をみたものだ。お米、そこにゐるか。よう聞いてお呉れ、
吾家の御先祖様が、只今の先、孫の喜三郎を殺して了うと仰有つて、長い刀を引
ぬいて追かけまはして居られる。喜三郎は一生懸命に逃げまはす。見るに見かね
て私が御先祖様に對し、暫くの御猶豫をと、泣いてお頼みしたら、御先祖さまも
少し顔色を和らげて、……：……：……：そんならお前から喜三郎に諭してやるがよい。上田の
家は藤原の鎌足の末である。うつり行く世の慣ひ、家の系圖は幾つにも別れてゐ
るが、中には今に歴然として時めいてゐる子孫もあり、大商人になつてゐる子孫
もあり、百姓になつたのも澤山ある。又中途にして家の斷絶したのもあるが、吾
家こそは百姓になつた人の家筋で、先祖から代々お國の爲になることを勤めて來
たのである。併しモウ斯う百姓に成り下つて了うては、如何することも出來ぬと
幽界から歎いてゐたのである。併しながら有難き御代になつて、百姓でも誠があ
り力さへあれば、どんなことでも出來るやうになつたのだから、どうかして吾子
孫から世の爲になる者を現はしたいと思ひ、神界の御許しを受けて、神様の尊き
お道を明かに世界へ現はし、此世を安樂な神の世にしたい爲に、喜三郎を神様の

お使として、一身を捧げて世の爲に盡さしたいと思ひ、其身邊を晝夜に守護致して居るのである。かかる重き使命を有つてゐる者が、祖母の病氣のために心を紊し、肝賢の神界の御用をすてて、のめのめと吾家に歸り來るとは不届き千萬な奴だ。神界へ對して申譯が立たぬから、一層のこと切り捨てて了ふと仰有つて、大變な御立腹、そこで私がいろいとお詫をして、暫くの御猶豫を願うたと思ふ折、不意に誰にか揺起されたと思ふたら、ヤツパリ夢であつた。ア併し乍ら御先祖さまのお言葉は夢とはいふものの、等閑にすることは出来ぬ。喜三郎も其心得で世の爲に、神さまの御用を一心に勤めて貰へば、先祖さまに對して申譯が立つから、中途に氣をくぢかぬやうに頼むぞ。妾は老木の末短き身の上、お前はまだ血氣盛り、半時の間も無益に日を送ることは出来ぬから、妾に構はずお道の爲に潔く盡して呉れ。併し乍ら人間は老少不定だから、これが別れになるかも知れぬ。ズイ分身體を大切にせよ」

と後は言葉もなく、其目には涙が泛んでゐた。喜樂の目にもいつの間にも涙が漂ひ、腮邊を傳ふのを押かくし、

喜樂「お祖母アさま、そんならこれから綾部へ行つて來ます。どうぞ達者にして
みて下さい」

と門口を出やうとする時、いつの間にか母は株内の次郎松やお政後家サンを伴う
て歸り來り、

母「喜三郎、お前に一寸相談があるから、今歸ることは出來ぬ。どうぞ二三日待
つて貰はねばならぬ」

と引とめられた。……サア了つた。モウ仕方がない。せめて二三分間母の歸宅が
遅かつたならば、甘く此場をぬけて歸られたのに、又もや母や次郎松サンから、
澤山の苦情をかまされることだらう……と思ふたが、最早仕方がない。先づ二人
に時の挨拶や、不在中お世話になつた好意を陳謝し、座につくや否や、次郎松サ
ンがいきなり、目をむいて、

次郎「コレ喜三ヤン、お前は一體全體、何をト呆けて居るのだ。こんな老人や母
親を見すてて、如何に百姓が嫌ぢやとて、勝手氣儘にいなごの様に、朝夕そこら
を飛あるくとは、餘り物が分らぬすぎるぢやないか。それとも如何しても内を出

て極道がしたいと思うなら、毎月金を送つて來なさい。其金でお前の代りに人足を雇うて百姓さすから、如何ぢや、分つたかなア。一體お前が家を出てから、一年餘りになるが、金一文送つて來るでもなし、たより一ぺんするでもなし、生きて居るのか死んで居るのか、但は家を忘れて歸つて來る處が知れなんだのか、譯が分らぬといふても餘りぢやないか。私は上田家の爲に先祖に成り代つて意見しに來たのだから、私の忠告をも聞かずに、綾部へ行くなら行つて見なさい。不在中の此家の御世話は私はお斷り申す。私計りか株内も近所も皆其通りだ。どんなことが出來しても構はぬから、今ここでキツパリと返答をしてくれ。と眞赤な顔して呶鳴つて居る。又一人の別家のお政といふ後家サンが、喧しう泣くやうに綾部へ行くなと口説きたてる。二人共神界のことはテンで頭がない。只肉體上から見て、上田家の前途を案じての親切から云ふてくれるのであるから、二人の心情を察してみると、歸りもならず、それぢやと言ふて穴太に居る譯にも行かず、退引ならぬ仕儀となり閉口をした。

(大正一一・一〇・一四 舊八・二四 松村眞澄録)

第四章 誤親切〔一〇四一〕

次郎松サンやお政後家サンに忠告の矢を射かけられ、暫く閉口してゐたが……
エ、こんな氣のよわい事で、神界の御用が勤まるものか……と、忽ち勇猛心を發
揮し、思ひ切つて、

喜樂「皆さまの上田家を思うて下さる御親切は私も骨身にこたへて有難うムりま
す。併し乍ら今私は神さまの御使となつて、お國の爲に盡さねばならぬ身の上で
ありますから、何と云つて意見をして下さつても、ここ十年ばかりは吾家へ歸つ
て來ることは出来ませぬ。又内へ金を送るといふ様なことは、到底私には出来ま
せぬ。それも私一人より上田家に子がないのならば、何とかしてでも内に居つて
家の爲に働かねばなりませんまいが、五人も弟妹のあることですから、家のことは
私が居らなくても、如何なりと都合をつけて、神さまが守つて下さるでせうから

……□

といふや否や、別家の次郎松サンは、忽ち目をむき口を尖らし、

次じ「ナニお前はそんなバカな事を言ふのだ。二言目には口癖くちぐせのやうに、お道の爲ためぢやの、お國くにの爲ためぢやのと、小癩こしやくにさわること云いふが、お國くにの爲ために内うちを出でるのなら、なぜにお上かみサンから日給につきふを貰もらはぬのぢや。又またお國くにの爲ためになるやうな、へん、いふとすまぬが、エライ人間にんげんなら、仇恥あたはづかしい乞食こじきの眞似まねをして親おやの家いへを飛出とびだし、そこらあたりをウロウロと歩あるかいてもよいぢやないか。口くちに番所ばんしよがないかと思おもうて、法螺ほらを吹ふくにも程ほどがある。極道息子ごくどうむすこといふ者は、丁度三文ちやうどさんもんの獅子舞ししまひのやうに口くちばかり大おほきなもんだ。アハ、ハ、ハ、ハ」とあく迄まで嘲笑てうせうする。そこで喜き樂らくは、喜き「二人ふたりが何なんと仰有おつしやつて下さくだつても、私わたくしは神かみさまのお道みちをすてるやうなことは到底たう出来きませぬ。眞理しんりの爲ためには一歩いっぽもあとへは引ひきませぬ。凡すべて神かみさまのお道みちへ入はいると、いろいろささまの妨害ぼうがいや壓迫あつぱくが來くるといふことは覺悟かくごしてゐますから、どうぞ十年じふねんがいかねば、せめて二三年にさんねんの閒暇あひだひまを下ください。私わたくしは今いま綾部あやべで幽齋いっさいの修行しゆぎや場うばを開ひらいてゐる爲ために、一日いちにちでも手てぬきが出來できませぬ。けれ共ども大切な祖母そぼの病氣びやうきと聞きいて、歸かへらぬ譯わけには行いかぬので、忙いそがしい中なかを繰合くりあはせて歸かへつて來たのですから、ど

うぞそんなことを言はずに、今度は見のがして下さい。一時も早う綾部へ出て行かねばなりませんから……」

とおとなしう頼んでみた。さうすると又次郎松サンが妙な顔をして、蒼天を仰ぎ、鼻の先で「フフン」と笑ひ乍ら、

次「何とマア甘いことを仰有るワイ。かう申すと濟みませぬが、お前等に修行をさして貰ふの、教へて貰ふのといふ者が、此廣い世界にあるものか。遠い所のこつちやから分らぬと思つて、そんなウソツパチを垂れても、此黒い光る目でチャンと睨んだら間違はないぞ。深極道めが、おのれの食ふ丈なら猫でも犬でもするぢやないか。又犬や猫は飼つて貰つた家は能う覚えてゐる。お前は何ぢや、廿八年も飼つて貰つた大切な親の家を忘れてるぢやないか。畜生にも劣つた奴ぢや。よう考へて見い、とぼけ野郎奴。此穴太の在所には、戸数が百三十もあるが、皆先祖から佛法を信心して居るではないか。それにお前は悪魔に魅入れられて、たつた一人偉相に、神さまぢやの神道ぢやのと、何といふ不心得なことをさらすのだ。先祖さまに對して何と言譯をするのか。よう考へて見い。貴様がせうもない

ことをさらすものだから、村の交際も口クにして貰へぬやうになつたぢやないか。妙な神にトボけて、家の名迄悪うして、それで先祖さまに孝行と思ふか。それでもお國の爲になるのか。勿體なくも花山天皇さまが御信心遊ばした、西國廿一番の札所、穴太寺の聖觀世音菩薩の膝元に生れて、有難い結構な觀音さまも拜まずに、流行神にトチ呆けてそれが何になる。お前が神を信心するので、村中からは上田の家をのけ者にして居ることを知らぬか。別家の私までが村で肩身が狭いぢやないか。チツとしつかりして目をさましたら如何だ。親の雪隠でクソをせぬやうな奴に碌な者があるか

と舊思想をふりまはし、口角泡をとばしてきびしく責め立てる。又新別家のお政後家サンがいふには、お政「コレ喜三ヤン、それ丈内に居るのがいやならば仕方がない。たつて綾部へ行くなどは言はぬから、お前は惣領で、此家を守らねばならぬ義務があるよつて、お米サンにお金を渡して行きなされ。なんぼ神さまの道で、金儲けにいて居るのぢやないと云うても、十圓や二十圓位は懷に持つておいでるだろ。それを悉皆渡

して行きなさい。おばアサンも何時死なはるやら分らぬから、其時の用意もしておかねばならぬ」

と二人が右と左からつめかける。又母は母で、

母「頼むから、どうぞ内に居つておくれ。大勢の子にも代へられぬ兄のお前が、内に居らぬのは、何ともなしに心淋しい。去年神さまのことで家を出てからと云ふものは、毎日毎日お前のことが心配になつて、夜も口々に寝たこともない。知らぬとこへ行つて、いろいろと苦勞や難儀をするよりも、一日でも親子が側に居つて、苦勞をしておくれ。お前と一所に苦勞をするなら、どんな辛いことがあつても辛いと思はぬから……」

と泣いて頼まれる。喜樂は進退谷まつて、如何ともすることが出来なくなつた。

別家の二人は頭から火のつくやうに喧しくいふ。ゴテゴテと病人の枕許で談判して居るのを、少し耳の遠い祖母に聞えたとき、少しく頭をあげて、

祖母「ア、妾の病氣も神佛のおかげで、八九分通り快うなりました。松サンやお政ハンや、お米のいふのも無理はないが内には弟の幸吉も居るなり、元吉も近い

内にお雪と一所に手傳ひに来る筈であるから別に百姓に差支へもあるまい。喜三郎は一時も早う内を出て、綾部で神さまの爲に盡しておくれ。老人の差出口と、皆サンに怒られるか知らぬが今度丈は老人の頼みぢや、喜三郎のいふことを聞いてやつておくれ」

と雄々しくも云つてくれた。老人の言葉には三人も反くことは出来ぬと、少し鋒先がにぶり出した。喜樂は其時にまるで百萬の援軍が来たやうな気がして、思はず知らず、手を合はして祖母アさまを拜んだ。

さうかうして居る所へ、弟の幸吉が田圃から鋤を肩にして歸つて来て三人の話を聞き、いろいろと喜樂の爲に辨護の勞を取つてくれ、其夜は皆の人と袂を別つた。喜樂は眞夜の十二時頃、幸吉と共に産土の小幡神社へ参詣し、喜樂「どうぞ此度は無事に納まつて綾部へ歸れますやうに……」と祈願をこらし、歸つて寝についた。

翌朝になると、早々から又株内の人々が出て来り、千言萬語を費やして喜樂の綾部行を引止めようとする。彼此れしてとうとう三日間穴太に引とめられて了つ

たが、漸やっやくにして、弟おとうとの幸吉かうきちを伴つれて、一應いちおう綾部あやべまで歸かへつて行くゆことになり、ホツと一息ひといきつくことが出來できた。併しかし次郎松じろまつサンやお政まさハンや相談さうだんの上うへで、弟おとうとを伴つれて行くゆことにしたのである。それは……喜樂きらくがウソをついてをるのに相違さうあない、大方おほかた綾部あやべの方ほうで乞食こじきでもして居ゐるのだらう、去年きよねん着きて出でたなりの着物きものを着きて歸かへつて來きた以上いじやうは、假令たとへ乞食こじきをせず共とも、ヒドイ難儀なんぎをして居をるのであらうから、お前まへは兄あにに從ついて十分じふぶんに査しらべて來こい……と云いひふくめて同道どうだうさせることになつたのである。幸吉かうきちも神かみさまのお道みちには元もとから熱心ねっしんで、幽齋いうさいの修行しうぎやう迄までした位くひめだから、喜よろこび勇いさんで喜樂きらくについて來くることになつた。

喜樂きらくはヤツと安心あんしんして母ははに別わかれをつけ、急いそぎ綾部あやべへ歸かへらうとする折をりしも、例れいの次郎松じろまつサンが又またもややつて來きて、次じに一寸喜三ちよつとヤンに尋たづねたいことがあるから、暫しばしく待まつておくれ。お前まへは神かみさまの道みちとかで、人ひとの病氣びやうきを治なほすとか、よう治なほさぬとか云いふことだが、現げん在ざい親身しんみのお祖母ばあサンの病氣びやうきはよう治なほさぬのかい、伺うかがひは出來できぬかい。お前まへのお自慢じまんの天眼通てんがんつうがきくなら、凡およそ何時いつ頃ごろに死しなはると云いふこと位くらゐは分わかるだらう。葬式さうしきの用意よういもし

ておかんならぬし、もし神さまに頼んで治るものなら、今私の目の前で治して見せなさい。中々流行神サン位ではこんな大病は治るまい。治らな治らぬでよいから、せめて何時頃に命がなくなると云ふことを知らしてくれ。これ位なことが分らないで、人を助けるの、教へるの、お國の爲だのと大法螺を吹いたとて、世間の人承知いたさぬぞや。サア如何ぢや如何ぢや。見ん事返答が出来ますのかな」

と矢つぎ早にせめかけて来る。そこで喜樂は其場のがれの出放題に、
喜「お祖母サンの病氣は三日先になつたら全快する。そして命は八十八まで大丈夫だ」

と云つてみた。これを聞いた次郎松サンは舌をニユーツと出し、大きな聲でこけて笑ひ、

次「へー、お前サンの神さまは、何とマア、ドエライ御方ぢやな。こんな大病のしかも死病が三日のあとに治りますかい。そらチツと違ひませう。大方佛壇へでも位牌になつてお直りなさると、間違つてゐやしませぬかな。おまけに八十八まで命が大丈夫だと、フフーン丹波の筍醫者が聞いて呆れますワイ」

と飽迄、俄に丁寧な言葉を使うて嘲り笑ふ。併し不思議にも喜樂の言つた通り、三日の後に祖母は床拂をすることになり、八十八歳まで生きて居られたのである。弟の幸吉が見るに見かねて、次郎松サンやお政後家サンに向ひ、幸「ウチの兄イサンは神さまのお道に働かれる代りに、私が二人前働いて百姓を勉強しますから、兄イサンには内のことを心配かけぬやうにしたいものです」と云ふや否や、次郎松サンは大きな目をむき、次「コレ幸ヤン、何としたバカなことを言うのだ。お前までお紋狐につままれたのだなア。飯綱狐を澤山に懐に隠して居るから、グツグツしてると險呑だ」と眉毛に唾をつける眞似して、長い舌をニユーと出し、腮をクイクイと揺つて人を馬鹿にしてゐる。結局幸吉が二人前の仕事をするといふ條件付で、漸く其場をのがれ、綾部へ一時弟と共に同行することとなつた。

這うて出てはねる蚯蚓や雲の峰

(大正一一・一〇・一四 舊八・二四 松村眞澄録)

第五章 三人組〔一〇四二〕

喜樂、幸吉の二人は、道々神話に耽り乍ら、虎口を逃れた様な心持で北へ北へと進み行く。

穴を出て穴に入るまで穴の世話
穴恐ろしい穴の世の中

一休禪師の歌や、

故郷は穴太の少し上小口

只茫茫と生えし叢

等と観音の化身が詠んだと云ふ狂歌を謠ひ乍ら、足に任せて十餘里の道程を、漸くにして上谷の修行場へ安着した。歸つて修行場を調べて見ると、第一懸念して居た黒田きよ、四方春三、鹽見せいの三人の姿が見えぬので、留守中を依頼したる四方氏に尋ねて見ると、四方「一昨日の夕方教祖が態々御出でになつて……神様の御命令だ……と仰有つて、私の留めるのを諾かずに、三人を連れて歸られました」との答である。

「あゝ頼み甲斐のない人ぢやなア……」と思ひ乍ら、四方甚之丞と云ふ修行者を綾部へ遣はして、三人の修行者を今夜の中に是非とも上谷へ歸つて来る様にと厳しく申付たら、側に居た四方平藏氏が口を出し、四方「上田先生が何と云はれても、教祖様の御言葉ですから、御三體の大神様のお憑り遊ばしたお三人様を今夜の中に呼び寄するなんて、そんな途方もない事は

出來ませぬ」

と首を振つてゐる。自分は重ねて、

喜樂「三人の者を明日の朝迄綾部へおく事は出来ぬ。邪神が憑つて又々狂態を演

じ、其筋のお手数に預らねばならぬ様な事が出来るから、是非とも今夜の中に、

三人を此處へ連れて歸つて貰ひ度い」

と厳しく云ひ張つても、四方平藏氏始め一同腹を合して聞き入れぬのみか、

四方「先生に今歸つて貰ふと、神さまの肝賢のお仕組の邪魔になるから、お迎へ

に来る迄綾部へは決して歸つて下さるな。貴方は緯役で、大神様のお仕組の反對

をなさるお役ぢやさうなから……」

と妖魅の言葉を信じきつて居る。

四方平藏氏は自分に隠れて、ソツと綾部の金明會へ馳せ歸り、幸吉と云ふ弟と

共に上谷迄歸つた事を急告した。

サアさうすると、福島寅之助を始め三人が慌出し、

何、上田が上谷迄歸つて来たか。そりや大變ぢや、早う上田の歸らぬ中に、仕

組をせねばならぬぞ」

と四人は襖を閉めきつて、奇妙奇天烈の神憑を續行してゐた。

自分は仕方なしに幸吉と共に、上谷に残つてる修行者を鎮魂して居た。其翌日の

十時頃になると、四方祐助爺サンが顔色を變へて出て来て、震うてゐるので自

分は、

喜樂「祐助サン、碌な事で來たのぢやなからうな」

と問ひかくなれば、爺サンは直に大地へ手をついて、

祐助「ハイハイ恐れ入りました。外の事では御座りませぬが、綾部は大變で御座

います。お三體の大神様がお三人サンへお憑り遊ばして、口々に……三人世の元、

結構々々……と百遍ほども仰有つて、終ひには新宮の安藤金助サン處の庭に、大

地の金神金勝要の神さまが埋もつて居るから、之を掘り出して鄭重にお祀りせん

ならんと云つて、三人がおいでになり金助サンとこの大黒柱の根元を三四尺ばか

り、一生懸命になつて掘り出さなかつたけれども、石一つ碌に出て來ぬので未だ

掘り様が足らぬのだ。もつともつと云つて、三人サンは水をかぶり白衣を着け、

緋の袴を穿いて掘つて居られた處へ、警察の署長サンが前を通つて、此有様を見
つけ、……一體お前等はそんな風をして何をしてゐるのか、尋ね度い事があるか
ら一寸来い……と云つて、三人共警察へ連れて去なはりましたので、私も吃驚し
て早速其由を教祖様に申しましたら、教祖さまは平然として……何事も皆神様の御
都合ぢや、チツとも心配は要りませぬ、又土の中から形のある御神體の出るので
はない、大地の金神様の靈氣が、地の上へおでましになる事ぢや……と仰有つて
居られますが、此爺には根つから合點が参りませぬ。四方春三サンや外二人は、
警察へひかれたきりで未だ歸つて來られず、如何しやうと思案に暮れて、皆サン
に隠れて爺の心で先生にお伺ひに出ました』
とオドオドし乍ら、半泣きになつて居る。然し此事件は何ともなしに治まり、自
分は依然として幸吉と共に上谷で審神をつとめて居た。

二三日経つと、今度は足立正信氏の代理として、新宮の四方源之助、西原の西
村文右衛門の兩氏が、上谷へ態々やつて來てニコニコし乍ら、
上田先生、喜んで下さいませ。今日から教祖様は、出口お直さまと申さずに、

信者一同から出口の神と崇敬致す様になりました。神さまと申す譯は、二三日以前に綾部の警察から、署長サンが二人も巡查をつれて来て、何か怪しいものを祀つて澤山の人を騙し金儲けをして居るのぢやないかと疑ふて、大廣前を隅から隅迄調べて見ましたが、別に胡亂の事がないので、何とも云はれずに歸られました。が、其時教祖さまが署長サンに向ひ、大きな聲で……明治廿五年から出口直は神の因縁ありて、表向き狂人の様に致して、警察の側において、世界の事を言はして氣を付けてありたぞよ。それに此神の誠が分らぬか……と呶鳴られました。が、相手にもならず歸られました。が、これ全く神の御神徳で御座います。萬一私等が警察の署長サンに向つて、そんな事でも云はうものなら、官史侮辱だとか云つてやられて了ひます。何と教祖様の御神徳といふものは偉いもので御座います。も一つ恐れ入つた御神徳は外でもありませんが、出口の神の總領娘のお米サンが、西町の大槻鹿造の嫁になつて居られまして、明治廿五年から今年迄足掛け九年振り、神様の罰が當つて丸狂人になつて居られた所、一昨日其お米サンが、金明會の大廣前へおいでになると、出口の神の仰せには……大槻鹿造は大江山の酒天童

子の靈魂であるぞよ。其女房となつて居るお米は出口直の子であれど、大蛇の靈魂で此世を亂して、世界の人間を苦しめた極悪神であるから、世界の見せしめの爲めに、今日迄狂人に致して懺悔を曝さして、九年振り懲戒致したなれど、今日限り改心したらば許してやらう……と仰有つたら、あら有難や、あら不思議や、其場でお米サンが打倒れ、サツパリ正念がない様になつて了ひ、體がダンダンと冷たくなつて來ました。死人同様に息一つ出ませぬので、私達役員は……サア水ぢや、お神酒ぢや、おひねりさまぢや……と云つて騒ぎ出しましたら、出口の神さまは平氣な者で……何も皆サン、御心配には及びませぬ。神様の御都合ぢやから後で分ります……と仰有つて、奥の間へ這入つて、知らぬ顔でお筆先をお書きになつて居られましたが、教祖様の仰せの通り、一時間ばかり經つとお米サンが息を吹き返し、元の體となり、其れきりさしも猛烈な狂亂も俄に平癒しまして、其言行が普通の人間とチツとも變はらぬ様になつたので、皆の信者が感心して、思はず知らず出口の神様と口で一齊に唱へたので御座ります。九分九厘迄死んで生きかへると云ふ様な事は到底普通の神力では出來ませぬ。人間業では無い。正

しく神様のお力である、誠の良の金神様に間違ひはないと合點して、今迄疑ふて居た無禮を一同がお詫致しました。それだから先生も一時も早う我を折つて、出口の神さまにお詫をして下さる様にお知らせに來ました』

と熱心に現はしての永い物語であつた。自分は、

「はあはあ」

と云ひ乍ら二人の話を聞了り、茶等を進めて一寸一服して居ると、二人は又ソロソロ綾部の話をし出し始めた。

(大正一一・一〇・一四 舊八・二四 北村隆光録)

第六章 曲の猛(一〇四三)

四方源之助、西村文右衛門の兩氏は、喜樂のすすむる茶を飲み乍ら、又話を續けられた。

「金明會の御廣間では、先日から世に落ちて御座つた、澤山の金神様や龍神様が、今度勿體なくも良の金神さまが、此世へおでましなさに就て、今度の際に、今迄おちてゐた神を此世へ上げて、其靈魂を救ふてやらねば、モウ此先萬劫未代あがることが出来ぬから、今上田の審神者が綾部へ歸つて來たら、邪神界の神ぢやといふて封じ込めたり、追つ拂つたり、靈縛をかけたたり、いろいろと神界の邪魔許り致すに依つて、氣の毒乍ら、暫くの間上田を綾部へ歸らぬ様にしてやると仰有つた。教祖様の御言葉の通り、俄に大雨が降つて來て、和知川は一升二合の水が出て、綾部の大橋が流れて了ひました故、上田サンが綾部へ歸れぬやうになつたのも、これも全く出口の神の廣大無邊の御神徳だと思ひます。神さまは大變に先生を嫌うて居られますから、今度綾部へお歸りになつても、今までみたやうに我を出さぬ様にして、何事に依らず、出口の神様と神懸りサンの言に従つて下さらぬと、いつもゴテゴテ致しまして、先生には綾部に居つて貰ふことが出来ぬやうになりますから、私たちは先生を大事に思ふ餘り、ソツと御意見に來たのであります。兔角出る杭は打たれると云ひますから、何神さまにでも敵對なさらぬが

天下泰平ぢや、先生の御身の得ぢや」

と忠告をする。喜樂は相當教育あり、村でも町村會議員まで勤めてゐる様な人が、こんな事を云ふと思へば餘りのことで呆れて答へる言も知らなんだ。二人はいろいろと喜樂に意見をした後歸つて行く。

それと行違に、喜樂が上谷まで歸つたと聞いて、出口澄子が密かに走つて来て、澄子「先生、あなたの御不在中に、四方春三サンやら村上サン、黒田サン、鹽見サン等が御廣間へ歸つて来て、無茶苦茶な神懸をしたり、他愛もないこというたり、飛んだり、跳たり、しまひには裸になつた儘屋外を走つたり、上田は神界の大敵役だから、今度歸つて来ても金明會へ入れることはならぬ、皆の者がよつてたかつて放り出して、三人世の元、これ丈居つたら結構々々、上田は悪神の守護神ぢや、鬼の靈だから、鬼退治をすると云つて、春三サンが先生の顔に角の生えた繪を書いて、釘を打つたり叩いたり、唾を吐きかけたりして、大變に煙たがつて、悪い口許り言ひますので、皆の信者がそれを眞に受け、そんな先生なら歸んで貰へと、口々に言ふので仕方がないので、教祖さまにチツと云うて聞かし

て貰はうと思つて申しあげますと、教祖ハンは平氣な顔で、何事も神界へ任すがよいと云つて黙つて居られますなり、一體何が何やら譯が分りませぬ故、一時も早う歸つて貰つて、皆の人等の目を醒ましたいと思ひ、役員信者に隠れて、知らせに一人で走つて來ました」

と氣色ばんで報告するのであつた。そこで喜樂は、後の修業者を四方藤太郎氏に任しておき、一先づ綾部へ立歸らうとしてゐる所へ、又々例の祐助爺サンが走つて來て、大地へ手をついて泣聲を出し乍ら、

祐助「一寸先生に申上げます。昨日の夕方からお晝までが餘り騒がしいので、町中の人が芝居でも見るやうに面白がつて集まり來り、門口も道も山の如うに、大勢が冷笑に來ますので、大變に困りました共、何にも知らぬ盲人間だと思つて、相手にせず、役員も信者も、一生懸命に幽齋を修行して居ました所、夕方に西八田の小萬といふ俾ひきが、横の細路を空車をひき乍ら……金神々々阿呆金神、氣違金神、夢金神、乞食金神、根つかからましな人間が來ん神ぢや……と大きい聲でいろいろ悪いことを竝べ立て、澤山の見物人を笑はして通りつつ、俾を泥田の

中へ轉覆さしました所が、丁度そこを通りかかった人が、それを見て……お前は
餘り金神さまの悪口を言うたので、神罰が當つたのぢやと言ひましたら、人力曳
の小萬が怒つて、其人を殴りかけましたので、ビツクリして西の方へ一目散に逃
出しました。サアさうすると小萬が……金神の信者たるものが、人が泥まぶれに
なつて困つて居るに罰とは何ぢや、そんなことを吐した奴を、今ここへ引ずり出
せ……と呶鳴つて廣閒へあばれ込み、西原の善太郎サンが參つて居りましたら、
白い浴衣を着てみた餓鬼ぢや、此奴に違ひないと云つて、土足のままで御神前へ
あがり、あばれ狂ひ、神さまの御道具を片つ端からメチャメチャに叩き壊して了
ひ、澤山の町の人が面白がつて、……ヤレ金神征伐ぢや、ヤレヤレ……とケシを
かけたり嘲笑つたりして、一人も仲裁する者はなし、散々に神さまの悪口を言う
た揚句ヤツとのことで其晩の十二時頃に歸つて行きました。皆の信者はチクチク
と怖がつてゐますなり、警察は側にあつても、常から足立サンの行状が悪いとか
云つて、保護もして下さらぬなり、此爺イも誠に残念で残念で堪りませぬ
とソロソロ聲を放つて泣き出した。

凧こがしや犬いぬの吠ほえつく壁かべの藁みの

涙なみだをふいて又また祐助いうすけ爺ぢいサンがソロソロと悔くやみ出だした。

祐助いうすけ「モシ先生せんせいさま、よう聞いて下くださいませ。出口でぐちの神かみさまが、日清戦争にっしんせんそうで臺灣たいわんで亡なくなられた清吉せいきちサンの恩給おんきふとか年金ねんきんとかを、これは生命いのちと釣換つりかへの金かねぢやからと云いうて、一文いちもんも使つかはずに貯ためておかれたお金かねを、銀行ぎんかうからひつぱり出だして、勿體もつたいない白米はくまいを二石にこくも買かうて下くださりしましたが、毎日まいにち日日皆ひにちみなの者ものが出でて來きて食くふので、最早もはや一升いっしょうもないやうになりましたから、又また出口でぐちの神様かみさまが銀行ぎんかうから金かねを出だして來きて、白米はくまいや油あぶらを買かうて下くださいましたが、種油たねあぶらでも五ご六ろく升しょうも一日いちにちに此頃このごろは要いります。それでもまだ邪神界じゃしんかいが暗くらいから、マツと燈明とうみやうをつけてくれと、お三人さんにんサンの神懸かむがりの口くちをかつて仰有おつしやるので、百目蠟燭ひやくめらふそくを二三十本にさんじつぽんづつ立たてますので、大變たいへんな物要ものいりで御座ございます。金かねの一錢いっせんも上あげやうとせず、どれもこれも皆みなよいことにして、出口でぐちの神かみさまの手足許てあしばかりかぢつて、心配こころくばり氣配きくばりする誠まことの信者しんじゃは一人ひとりもなし、誠まことにお氣きの毒どく千萬せんばんで、此爺このぢイも神かみさまに申まをし譯わけがない、四方平藏しかたへいざうサンは天眼通てんがんつうとか

が上手だというて、お三人サンと一つになつて、望遠鏡でも覗くやうに妙な格好して、……平藏どのあれを見やいのう……と三人サンが仰有ると、平藏サンが目をふさいでハイハイ拜めました拜めました、大きな龍神さまが現はれましたとか云つて、一心不亂になつて御座るもんだから、會計のことは一寸も構うて下さらず、中村の竹サンは、お筆先を一心不亂に朝から晩まで、晩から夜中まで、阿呆のやうになつて、節を付けては、浮かれ節の様に、讀んで讀んでよみ倒して、アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、と笑うて許り、何にも役には立たず、出口の神さまはお筆先の御用計りして、こんな大騒ぎをして居るのに、そしらぬ顔をして居られますなり、私もコラ何うなることかと、餘り心配致しますので、元から澤山ない禿頭が一入禿て、其上竈の煙で黒光になつて了ひまして、皆の役員サンが……御苦勞の黒うの祐助とひやかします、アタ阿呆らしい、神さまの事でなかつたら、隠居の身分で安樂に暮せるものを、誰がこんなことを致しませうか」
と涙交りの黒い顔を黒い手で撫で廻し、齒糞の溜つた口から一口々々唾を飛ばして、喜樂の顔へ吹きかけ乍ら、一生懸命になつて喋り立ててゐる。そこで喜樂は

側にあつた半紙に筆を走らせ、

禿頭鳥居もかみもなきままに

クロウクロウと愚癡を祐助

と書いて與へたら、

祐助「アハ、ハ、ハ、此奴ア有難い」

と喜んで押頂き、懐に捻込んで一目散に又もや綾部へ歸つて行く。

それから三日目に又此爺イさんがスタスタとやつて来て、何か大切相に風呂敷

包から手紙の様な物を出し、

祐助「先生、これは畏くも、牛人の金神様から、上田先生に對しお氣付けのお筆

先で御座いますから、叮重にして御覽下さいませ」

と差し出す。喜樂は直に披いて見ると、不規律な亂雑な書方で、

「牛人の金神が上田に一寸氣をつけるぞよ。神の都合があるから、修業者一統引

つれて歸るべし、此神の命令を叛いたら怖いぞよ云々……」

と記してある。喜樂は祐助爺イサンの迷ひを醒ます爲に、其手紙を目の前でバリと引さいて見せた。爺サン吃驚して、

祐助「ア、先生勿體ない、そんな事をなさると神罰が忽ち當りますぞ」

と躍氣となる。喜樂は祐助サンに向つて、

喜樂「ナアに心配が要るものか、お前が牛人の金神に貰うたとかいふ其扇子を一つ引裂いてみるがよい。決して罰など當るものでない」

と勵ましてみると、どつちやへでも人の言ふことにつく、阿呆正直者の祐助サンは、其場でベリベリと破つて了ひ、別に手も足も歪み相にないので、祐助さんは

ソロソロ地團駄を踏み出し、

祐助「此頭の禿げた爺イが、まだ十八やそこらの村上に騙されたか、エ、残念至極口惜しやなア」

と其扇子を大地に投げつけ、踏むやら蹴るやら、其様子の可笑しさ、氣の毒さ、何とも云ひやうがなかつた。

それから祐助サンと同行して、金明會の廣間へ歸つてみると、御廣前には信者が溢れて居り、屋外には見物人が山をなして、邪神の面白い神憑りをひやかして居る。喜樂はすぐに内へ這入ると、村上房之助に何者が憑依して、澤山の信者をたぶらかし、あつちやへ行け、こつちやへ行けと騷り者にし乍ら荒れまはつてゐる。何にも譯を知らぬ信者が、神様だと思つて怖がり、へいへいハイハイと言ふが儘になつてゐた。村上は自分の顔を見るなり、村上「オ、上田か、よく歸つた。此方は小松林命だ。その方は牛人の金神の命令をよく聞いた、偉い奴だ、其褒美として之を其方に使はず間、大切に保存するがよからうぞよ」

と大きな骨の扇に、何かクシヤクシヤと書いて勿體振つて差出すのを、手に取るより早く、數多の役員信者の目をさますにはよい機會だと思つて、其大扇で村上の頭を三つ四つ叩いてみせた。信者は各自不思議な顔をして、喜樂の顔許りながめて居る。奥の間の方から例の三人程の聲として、
「上田殿が今歸りよつた。大神さま早く神罰を當てて下さいよ」

と細い聲で、叫んで居た。

心なき世人の誹何かせむ
神に任かせし吾身なりせば

(大正一一・一〇・一四 舊八・二四 松村眞澄録)

第七章 火事蚊〔一〇四四〕

人盛なれば天に勝ち、天定まつて人を制すとかや、喜樂は一身一家を抛つて、
審神者の奉仕に全力を盡すと雖も、何を云つても廿餘名の、元より常識の缺けた
人物の修行者が發動したことで、どうにも斯うにも鎮定の方法がつかない。正
邪理非の分別もなく、金光教會の舊信者計りで、迷信と盲信との凝結であるから、

到底審神者の云ふ事は聞入れないのである。又神懸といふ者は妙なもので、金光教の信者が修行すれば金光教の神が憑つて来る。どれもこれも皆金神と稱へる。天理教の信者が修行すれば、十柱の神の名を名告つて現はれる。妙靈教會の信者が修行すれば、又妙靈教會の奉齋神の名を名告つて現はれて来る。其外宗旨々々で奉齋主神の神や佛の名を名告つて、いろいろの靈が現はれ来るものである。上谷の修行場では金光教の信者計りであつたから、牛人の金神だとか、巽の金神、天地の金神、土戸の金神、射析の金神などと、何れも金神の名を名告るのであつた。又龍宮の乙姫だとか、其他の龍神の名を以て現はれる副守護神も澤山なものであつた。

今日の大本へ修行に来る人間は、大部分中等や高等の教育を受けた人が多から、此時のやうな餘り脱線的低級な靈は憑つて来ない。が大本の最初、即ち明治卅二年頃の神懸といつたら、實に亂雑極まつたもので、丸で癡狂院其儘の状態であつた。其上邪神の奸計で、審神者たる者は屢危険の地位に陥る事があつて、到底筆や口で盡せるやうな事ではなかつた。幽界の事情を少しも知らない人々が此

ものがたり
物語を讀んでも、到底信じられない様な事許りであるが、それでも事實は事實として現はして置かねば、今後の斯道研究者の参考にならぬから、有りし儘を包ま
ず隠さず、何人にも遠慮會釋なく、口述する事にしました。

頃は明治卅二年、秋色漸く濃やかな時、金明會の廣間では、例の福島、村上、
四方春三、鹽見、黒田を先頭に、日夜間斷なき邪神界の襲來で、教祖のいろ
の御諭しも、喜樂の審神者も少しも聞き入れぬのみか、却て教祖や喜樂を忌避し
て、福島氏の如きは別派となり、廣前の奥の間を占領し、四方、鹽見、黒田三人
の修行者と共に、奇妙な神懸を續行して居る。

「お父サン、久しぶりでお目にかかりました」

「ヤア吾子であつたか、會いたかつた……見たかつた……ヤア其方は吾妻か……」
「吾夫で御座んすか、良の金神さまが世にお落ち遊ばした時に、私も一所に落さ
れて、親子兄弟がチリチリバラバラ、時節参りて、良の金神さまのおかげで、久
し振り夫婦親子兄弟の對面を許して貰ひました。あゝ有難い勿體ない、オーイ
オーイオーイアンアン」

と愁歎場を演出してゐる。餘りの狂態に、平素から忍耐の強い教祖も、已むを得ず箒を以て、福島ふくしまの神懸かむがかりを掃出はきだし、教祖けうそ「お前は金光教こんくわうけうを守護しゆごする靈れいであらう。此この大本おほもとをかき紊みだす爲ために、福島ふくしまの肉體にくたいを借かつて居ゐる事は、初發しよつぱつから能よう知しつて居ゐる。モウ斯かうなつては許ゆるす事は出来できぬから、一時いちじも早はやく退散たいさんせい」
と嚴きびしく叱しかりつけられ、半分はんぶん肉體にくたいの交まじつた神懸かむがかりの福島ふくしまは、大おほいに立腹りつぷくし、福島ふくしま「此誠このまことの良うしとらの大金神だいこんじんさまのお憑うつり遊あそばした福島寅之助ふくしまとらのすけを、能よう見分みわけぬやうな教祖けうそが何なんになる。勿體もつたいなくも良うしとらの金神こんじんの生宮いきみやを、箒はつきで掃出はきだしたぞよ。又上田またうへだも小松林こまつばやしのやうなガラクタ神かみが憑うつつてゐるから、此結構このけつこうな大神おほかみを能よう見分みわけぬとは困こまつたものであるぞよ。何なんの爲ための審神さには者はぢや、分わからぬといふても程ほどがあるぞよ。サアサア皆みなの神懸かむがかり共ども、これから丑うしの年としに生うまれた寅之助とらのすけの、良大金神うしとらだいこんじんが神力しんりきが強いつよか、出口でぐちと上田うへだの神力しんりきが強いつよか、白しろい黒くろいを分わけて見みせてやるぞよ。此方このほうの御伴おとも致いたして上谷うへだにへ來こいよ。もし寅之助とらのすけが負まけたら従したがつてやるが、此方このほうが勝かちたら出口でぐち直なほも上田うへだも、誠まことの良うしとらの金神こんじんに從したがはして、家來けらいに使つかつてやるぞよ。今日けふが天晴あつぱれ勝負しようぶ

の瀬戸際であるぞよ。皆の神懸よ、一時も早く上谷へ行けよ。出口と上田の改心が出来ぬから、今目をさまし改心の爲に、神が出口の家を灰にしてうぞよ。それから町中も其通りぢやぞよ。噫誠に氣の毒なものぢやぞよ。人民が家一軒建てのにも、中々竝大抵の事ではないが、神も氣の毒でたまらぬぞよ。これも出口直が我が強うて、上田の改心が出来ぬからぢやぞよ」

と四邊に響く大音聲にて呶鳴り散らす。喜樂は何程福島に神懸の正邪を説明しても、聞かばこそ……、自分は誠の良の金神ぢや、上田の審神者が何を知るものか……と、肩を怒らし、肘をはり、威丈高になつて、神懸や役員一統を引連れ、韋駄天走りに一里餘りの道を、上谷の修行場さして行つて了つた。

出口教祖と喜樂と澄子の三人を廣前に残して、役員も神懸も悉皆、福島にうつた邪神の妄言を固く信じて、上谷へ行つて了つた。喜樂は教祖の命に依りて、二三時間程経つてから、中村竹藏の妻の中村菊子と只二人で、上谷の四方伊左衛門といふ人の家の修行場へ出張して見ると、役員も神懸も村の人達も、老若男女の分ちなく、悉皆福島について、高い不動山の上へ上つて了ひ、あとには黒田清

子と野崎篤三郎とが修行場の留守をしてゐた。そして黒田には悪狐の靈が憑つて、喜樂の行つたのも知らずに、何事か一人でベラベラと喋り立てつつあつた。野崎は其傍に両手をついて、おとなしく高麗狗然として畏まつてゐた。喜樂の顔を見るなり、野崎は驚いて、黒田清子に耳打をすると、黒田は忽ちに仰向けになつて、黒田「上田來たか、よく聞けよ。此方は勿體なくも素盞鳴尊であるぞよ。お前が改心出來ぬ爲めに、氣の毒乍ら綾部の金明會は灰にしてうぞよ。お前は何しに來たのぢや、一時も早う綾部へ歸つて、火事の消防にかからぬか。グズグズして居る時ではないぞよ、千騎一騎の此場合でないか」

とベラベラと際限もなく喋り立てる。喜樂はいきなり、

喜樂「コラ野狐、何を吐すか。そんな事があつてたまらうか。コリヤ野狐、正體をあらはせ！」

と後から手を組んで「ウン」と靈をかけると、清子は忽ち四つ這になつて、

「コーンコン」

と鳴き乍ら、家の裏山へ一目散に駆け出した。野崎はビツクリして、後追っかけ、

漸く三町許りの谷間で引捉へ連れて歸つて見ると、清子は正氣になつたやうに見せて、

黒田「あゝ上田先生、誠にすまぬ事を致しました。モウこれからは、福島大先生
の事は聞きませぬ。私は餘り慢心をしてゐましたので、不動山の狐がついてゐ
ました。あゝ恥かしい残念な」

と顔を袂で押しかくす。喜樂は、

喜樂「そんな事にたばかられるものか、詐りを云ふな、其場逃れの言ひ譯だ。審
神者の眼で睨んだら間違ひはあるまい。四つ堂の古狐奴！」

とにらみつくれば、又もや、

「コンコン」

と鳴き乍ら、一目散に不動山を指して逃げて行く。暫くすると、例の祐助爺イサ

ンが、喜樂の前に走せ來り、

祐助「上田先生、あなたは又しても神懸サンを叱りなさつたさうだ。今黒田サン

に素盞鳴尊さまがおうつりになつて、山へ登つて來て大變に怒つてゐやはります

で。大廣前が御神罰で焼けるのも、つまり先生の我が強いからで御座います。爺
イも一生懸命になつて、大難を小難にまつり代へて下さいと、お詫を致して、良
の金神さまや神懸さまに御願申して居りますのに、先生とした事が、お三體の大
神さまのお懸り遊ばした結構な神懸サンを、野狐だなんて仰有るから、大神さま
が以ての外の御立腹、どうしても今度は許しは致さぬと仰有ります。先生、爺伊
が一生の頼みで御座りますから、黒田サンの神さまにお詫を、今直にして下さり
ませ。綾部の御廣前や町中の大難になつてはたまりませぬから……」
とブルブル震ひ乍ら、泣き聲で拜んで居る。喜樂は、
喜樂「祐助サン、心配するな、決してそんな馬鹿な事があるものか。誠の神さま
なら、そんな無茶な事はなさる筈がない。皆曲津神が出鱈目を言ふて居るのだ。
萬一綾部にそんな大變事があるものなら、自分が上谷へ来る筈がないぢやないか。
ジツクリと物を考へて見よ」
と諭せば、爺イサンは少しは安心したと見え、始めて笑顔を見せた。喜樂は直に
不動山へ登り、數多の神懸の狂態を演じて居るのを鎮定せむと、修行場を立出で

た。爺ぢイサン驚おどろいて、喜樂きらくの袖そでを控ひかえ、

祐助いっすけ「先生せんせい、どうぞ山やまへ行くのはやめにして、これから直すく綾部あやべへ歸かへつて下ください、案あんじられてなりませぬ。今いま先生せんせいが山やまへ登のぼられたら、又また々また福島ふくしまの神かみさまが、御立腹ごりつぶくなさると大變たいへんでムります」

と無理むりに引止ひきとめようとす。喜樂きらくは懇々こんこんと祐助いっすけをさとし、漸やつやくの事ことで納得なつとくさせ、中村菊子なかむらきくこと同道どうだうにて、綾部あやべへ立歸たちかへらしめ、喜樂きらくは只一人ただひとり雑木ざふき茂しげる叢くさむらをかきわけて不動山ふどうやまに登のぼり、松まつの木蔭こかげに隠かくれて、神憑かむがかり連中れんちゆうの様子やうすを覗うかがつてみた。

福島寅之助ふくしまとらのすけ、四方平藏しかたへいざう、足立正信あだちまさのぶ、其外そのほか一統いっとうの連中れんちゆうは、喜樂きらくの間近まぢかに來きてゐる事ことは夢ゆめにも知らず、一心いっしん不亂ふらんになつて、

「福島大先生ふくしまだいせんせいさま、良うしろの大金神だいこんじんさま、一時いちじも早くはや教祖けうそさまの我がが折おれまして、上うへ田だが往生わうじやう致いたしまして……綾部あやべの戒いましめをお許ゆるし下くださいませ、假令たとへ私わたしの命いのちはなくなりまして、教祖けうそさまが助たすかりなさりますように」

と一同いちどうが涙交なみだまじりに頼たのんでゐる。四方春三しかたはるざうの聲こゑで、春三はるざう「皆みなの者ものよ、よく聞きけ。出口直でぐちなほは金光大神こんくわうだいじんの反はん對たい役やくであるぞよ。上田うへだのやう

な悪い奴を引張り込んで、金光教會を潰したぞよ。あの御廣間は元は金光の廣間ぢやぞよ。それに出口と上田とがワヤに致したぞよ。誠の良の金神が、今度は勲忍袋の緒が切れたから、上田の審神者を放り出さねば、何遍でも大廣間は焼いて了ふぞよ。四方平藏も又同類ぢや、出口直と相談を致して、上田をかくれて迎へに行きよつたぞよ。出口と上田と平藏と三人が心を合して、金光の廣間をつぶしたぞよ。今度は改心して、上田を穴太へ追ひかへせばよし、何時までも其儘に致してをるやうな事なら、此神が許さぬぞよ」

などと、もと金光教の信者計りが集まつて、神憑の口で攻撃をやる。黒田きよ子
が又口を切つて、

黒田「足立正信どの、其方は何と心得て居るのぞえ。金光教會の取次ではないか、
今まで出口の神の側に二三年もついて居り乍ら、上田のやうなガラク夕審神者に、
廣間を占領しられて、金光どのへ何と申譯致すのか。上田の行状を見たかい。彼
奴は、毎日々々朝寢は致す、晝前に起て来て、手水もつかはぬ、猫より劣つた奴
ぢやぞよ。寢所の中から首丈出して飯を食つたり、茶を呑んだり、風呂へ這入つ

ても顔一つ洗ふ事も知らず、あんな道樂な奴を、因縁の身魂ぢやから大切にしてい
やれ、と教祖が申すのは、チツと物が分らぬぞよ。教祖の目をさますのは、一番
に上田を放り出すに限るぞよ。あとは金光教で足立正信殿が御用致せば立派に教
が立つぞよ。あれあれ見やれよ、今綾部の金明會が焼けるぞよ。皆の者よ、あれ
を見やいのう」
と邪神が憑つて妄言を吐いてゐる。一同は目を遠く見はつて、綾部の方を覗く可
笑しさ。折ふし綾部の上野に瓦屋があつて、窯に火を入れて居るのが、夕ぐれの
暗を照して、チヨロチヨロと見え出した。さうすると、
黒田「サア大變ぢや大變ぢや、出口の神さまは誠に以てお氣の毒ぢやぞよ。御心
配をして御座るぞよ。今頃は上田の審神者が一生懸命になつて火傷をし乍ら火を
消しにかかつて居るぞよ。大分にエライ火傷を致して居るから、今度こそは神罰
で命を取られるぞよ。今出口の神が一生懸命に祈つてゐるぞよ、ぢやと申して此
火は中々消えは致さぬぞよ。綾部の大火事となるぞよ。神の申す事は一分一厘違
は致さぬぞよ。これが違つたら神は此世に居らぬぞよ。慢心は大怪我の元だぞよ。

慢心致すと足許へ火がもえて来て……熱うなるまで氣がつかぬぞよ。行けば行く程茨むろ、行きも戻りもならぬよになるぞよ。それそれあの火を見やいのう」
と三人の神懸が口を切る。數多の村人も神憑も泣き聲になり、
「福島大先生様、中村大先生様、四方大先生さま、足立大先生さま、どうぞお詫をして下さいませ」

と手を合して拜んでゐる。時正に一の暗み、瓦屋の火も見えなくなつた。

「火事にしては火が小さ過ぎ。餘り消えるのが早かつた。これは福島大先生さま、どういふ譯で御座いませうか……」

と尋ねて居るのは四方平藏氏であつた。福島は横柄にかまへ乍ら、

福島「ウン、神の御仕組で廣前を一軒丈犠牲に焼いたぞよ。皆の者よ綾部へ歸つて、出口の我を折らして、上田を放り出して了へよ。其後へ誠生粹の良の金神が、福島寅之助大明神と現はれて、三千世界の立替を致すから、天下太平に世が治まりて、大難を小難にまつり代へて許してやるぞよ。何程人民がエライと申しても神には勝てぬぞよ。疑を晴らせよ。誠の丑寅の金神の申す事は、毛筋の横巾程も

間違ひはないぞよ。改心致さぬと足許から鳥が立ちて、ビツクリ致して目まひがくるぞよ。改心するのは今ぢやぞよ」

と唸鳴り散らしてゐる。暗の帳はますます深く下りて來た。鼻をつままれても分らぬやうに暗い。提燈もなければ、上谷まで歸る事も出來ぬ眞の暗になつた。村中の者が家を空にして、残らず此處へ登つて了つて居つたが、山を下りるにも下りられず、途方に暮れて「惟神靈幸倍坐世」と合掌してゐる。其處へ暗がりの中から、喜樂の聲として、

喜樂「汝等一統の者、餘り慢心強き故に邪神にたぶらかされ、上田の審神者の言も用ひず、極力反對せし結果は、今汝等の云ふ如く、足許から鳥が立つても分るまい。喜樂は數時間以前から、此松の木蔭に休息して、汝等の暴言暴動を殘らず目撃してゐた。汝等に憑つた邪神は、現在此處に居る喜樂を見とめる事も出來ない盲神だ。又綾部の廣前は決して焼けてはゐないぞ。最前見えた火の光は、稍大にして火事の卵に似たれども、あれは火事ではない、上野の瓦屋が窯に火を入れただのだ。汝等は今此處で目を醒まし、悔み改めねば、神罰忽ち下るであらう。現

に此山上にさまようて、歸路暗黒、一寸も進む能はざるは神の懲戒である。汝等一同の者、よく冷靜に考へ見よ。萬一廣前が焼けるものと思へば、何故大神の御靈の鎮座ある、廣前につめきつて保護せないのか。なぜ面白さうに火事見物をし、村中が辨當や茶などを携帶して、安閑と見下ろそうとしてゐるその有様は何の事か、これでも誠の神の行ひか、チツとは胸に手を當て考へてみよ」

と唖鳴りつけた。サアさうすると……上田は綾部に居ると固く信じてゐた一同の者は、藪から棒をつき出したやうに、喜樂が現はれたのと、其説諭に面食つて、泣く者、詫びる者、頼む者が出来て來た。暗き山路を下りつつ、躓き倒れてカスリ傷をするやら、茨に引つかかつて泣き叫ぶやら、ヤツとの事で不動山から、命カラガラ上谷の伊左衛門方の修行場へ歸つたのはその夜の十二時前であつた。

何れの人を見ても、顔や手足に茨がきの負傷せぬ者は一人もなかつた。四方平藏は、喜樂に手を引かれて下山したので、目の悪いにも拘はらず、かき傷一つして居なかつた。喜樂は一同の者が邪神の神告の全然虚言であつたので、各自に迷ふてゐた事を悟つたであらうと思ひ、急ぎ綾部へ只一人歸つて來た。其あとで又々

相變らず邪神の神憑を續行し、其結果一同鳩首會議を開き、其全權大使として足立氏と四方春三、中村竹藏の三人が選ばれた譯である。要するに甘く喜樂を追放するといふが大問題であつた。

審神者の役といふものは仲々骨の折れるもので、正神界の神は大變に審神者を愛されるが、之に反して邪神界の神は恐れて非常に忌み嫌ひ、陰に陽に審神者を排斥するものである。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一〇・一五 舊八・二五 松村眞澄録)

第二篇 光風霽月

第八章 三ツ巴〔一〇四五〕

明治三十二年十月十五日の事であつた。足立、四方、中村の三人は、上谷の修行場にて、神憑一統鳩首謀議の結果、喜樂に對し、綾部退却の勸告をなさむと、全權公使格で何喰はぬ顔して、金明會へ歸り來り、言巧みに本宮山上に誘ひ出し、第一番に四方春三は口を開いて云ふ。

四方「上田先生に申上げますが、夜前上谷の私の宅で、金明會の役員一同が集會いたし、相談の結果、先生に一日も早う綾部を立のいて貰ふ事になりました。私等三人に對し、皆の役員サンから、先生に對し談判をしてくれと頼まれ、止むを得ず三人が出て來ましたのですから、どうぞシツカリ聞いて下され。永らく靈學を教へて貰うた先生に對して、すげなう歸つて下さいと云ふ事は、弟子の私としては誠に心苦くて氣の毒でたまりませぬけれど、先生が綾部にムると、第一教祖さまの教の邪魔になり、お仕組が成就しませぬので、役員信者の心がハダハダになつて、如何しても一致しませぬから、どうぞ一年程穴太へ歸つて下され。其上で又御縁がありましたら、皆が相談の上、こちらの方からお迎へに參ります。實際の事を言へば、先生が綾部へお出でるのが一二年許り早すぎました」

と立退き勸告を臆面もなくやつて居る。喜樂は默然として何の答もなく、春三の顔を穴のあく程見つめて少しく笑うてみると、春三は氣味惡相に眞青な顔をして俯むいて首を頻りに振つてゐる。さうすると足立正信が全權委員顔をして曰ふ。足立「足立が今日先生にお話に参加したのは、一個人の考へではありませぬ。先づ第一に艮の金神さまを始め、役員信者一同の代表者として、参つたのですから、あなたも其お考へで聞いて頂かねばなりません。抑も綾部には、天地金の神さまのお道を開く、結構な金光教會所があつたのを、出口お直さまが氣をいらつて、四方平藏サンとひそかに相談して、吾々始め役員信者には一言の相談もなく、派の違ふ靈學の先生を呼よせて、とうとう金光教會を丸潰しにいられたのは、お前サンも御存じの通りですが、金光教は立派な公認の神道本局の直轄教會で、天下に憚らず布教傳道に従事してゐるお道です。かう申すと濟みませぬが、上田サンの立てた金明靈學會は、其筋の認可も受けずに、偉相に布教してゐられても、到底、駄目です。出口お直さまや四方平藏サン、お前サンの三人位が何程骨を折つても、瞬く内に其筋から叩き潰されて了ひますよ。さうなつてはお前サンも皆サ

ンに合はず顔がないから、足許の明かい内に一時も早くお歸りなされ。今こそ教祖だとか、會長だとか云うてみられますが元を糺せば紙屑買の無學の婆アサンや、牛乳屋位が、どれ丈氣張つて見ても、到底お話にならぬから、花のある内にここを引上げなされ。又お直さまの方は金光教會の方で大切に世話をしますから、今の内に決心をきめて確かな御返答を願ひます。お前サン、これ丈皆の者に嫌はれて居つても綾部を歸るのがおいやですか。よくよくお前サンも行く所のない困つた人足と見えますな。腹が立ちますかなア。腹が立つならこれ見たかで、一つこんな田舎ではなく、立派な都會の中央で、一奮發して教會でも立てて御覽。イヤ併し人間と云ふ者は末を見な分らぬから何ぼ譯の分らぬお前サンでも、又犬も歩けや棒に當ると云ふ事があるよつて、どんな偉い者に、此先に於てなれぬとも限りませぬワイ」

と嘲弄的に責かける。喜樂は餘りの侮辱と暴言に何の答もなく、默然として俯いてみた。足立は心地よげに微笑をうかべ、喜樂を尻目にかけて腕をふり乍ら、コツコツと細い坂路を降つて行く。中村竹藏は二タ二タ笑ひ乍ら、

中村「上田サン、お前サンは元を糺せば百姓の蛙切り、少し出世して牛乳屋になつてみたのぢやありませんか。それに何ぞや、靈學だとか審神者ぢやとか云つて、草深い田舎へ人をだましに来て、何時迄も尻尾が見えずには居りませぬぞ。なんぼ綾部が山家だと言つても、中には目のあいた者が居りますでな。百姓の倅が大それた神道家になるなんて、そんな謀反を起してもだめですよ。ヤツパリ蚯蚓切りの蛙飛ばしは、どこともなく土臭い所がある。なんぼ綾部の小都會でも、お前サン位に自由自在にしられて、喜んでゐるやうな馬鹿者はありませんぞや。そんな性に合はぬ事するより、一日も早く穴太へ歸つて元のお百姓をしなさい。蛙の子のお玉杓子は、何程鯨の子によく似て居つても、チツと大きうなりかけると、手が生えたり、足がはえたり、いつのまにやら尻尾が切れて、ヤツパリ先祖譲りの糞蛙によりなれませぬぞや。どうしても鯨になれぬのは天地の道理ぢや。私も今年で九年振、天地金の大神さまのお道を學び、八年の間は良の金神さまのお筆先を朝から晩まで拜讀いて居つても、まだ満足に人に布教することが出来ぬ位むつかしいものなのに、お前サンは去年の春まで、蛙飛ばしや牛乳搾りをして居り

乍ら、今から審神者になるの、神懸りを人に教へるといふのはチツと時節が早すぎます。一日も早うどつかへ行つて、モットモット神さまのお道の勉強をして來なさい。お前サンの修行が出来て、立派な人になりなかつたら、又お世話になるかも知れませぬ。綾部には四方春三サンのやうな日本一の神懸が出来てゐる上に、福島大先生のやうな生神さまが、時節参りて現はれました。お前サンも御存じだらうが、二三日前にも穴太のお母アさまから、一日も早う歸つて百姓の手傳ひをしてくれ、いつまでもウロウロしてをる年ぢやないというて、手紙が來たぢやありませんか。今お前サンが快う歸つて下されば、天地の大神さまへもお詫が叶ひませうし、大勢の役員や神懸りサンも大喜び、第一穴太のお母アさまに孝行ぢや。何程教祖さまが引ぱりなさつても、大勢の者にこれ程厭がられても、ヤツパリ綾部に居りたいのですか。見かけにもよらぬ卑怯未練な御方ぢやなア。よつ程よい腰拔だと皆が蔭で云うて居りますで」

と口を極めて嘲罵をきわめ、立腹させて喜樂を追ひ歸すべく手段をめぐらしてゐる。喜樂の胸はわき返る計りになつた。最早勘忍袋の緒が切れやうとする一刹那、

でぐちすみこ
出口澄子がエチエチと本宮山へ登つて来て、

澄子「先生、最前から教祖さまが、先生のお姿が見えぬと云うて、大變に心配を

して居られますので、平藏サンや祐助サンがそこら中を捜して居られます。私は

本宮山へ上られたに違ないと思つて、お迎へに來ました。サア早う歸つて、教祖

さまがお待兼ですから、一所に御飯をおあがりなされ」

と促すのをよい機會に、喜樂は四方、中村を後に殘して本宮山を下つて行く。二

人は後姿を見送つて、手を切に打叩き、

「ワハイ ワハイ、能う似合ますで、御夫婦萬歳！」

などと冷かしてゐる。まだ澄子とは其時は夫婦でも何でも無い、無關係の仲であ

つた。然るに兩人は妙な所へ氣をまはして笑つて居る。一時間程經つてから、以

前の三人は落つかぬ顔して廣間へ歸つて來た。

喜樂は一室に端坐し、首を傾けて一先づここを退去せむか、と思案にくれてゐ

た。が直日の靈に省みて……イヤイヤ目下の金明會の役員や、神憑の状態を見捨

てて歸る譯にも行かぬ、自分が今歸つたならば、何も彼もメチャメチャになつて

了うだらう、どこ迄も忍耐に忍耐を重ね、今一度無念を恠へて、彼等の精神を鎮定した上、進退を決しやうかと思つてゐる折しも、教祖は平藏氏と共に、靜かに襖を押あけ入り來り、自分の前に座を占めて、教祖は先づ第一に言をかけ、教祖「先生、あなたは穴太へ歸る積で思案をしてゐられるやうだが、それはなりませぬ。神さまの御都合で引よせられたお方ぢやから、どんなことがあつても綾部を立退くことは出來ませぬぞや。御苦勞さまでムいますけれど、神さまの爲にどこまでも辛抱して貰はねば、肝腎の御仕組が成就しませぬから、役員や信者が反對して、一人も寄りつかぬやうになつても、出口直と先生と二人さへ此廣間に居れば、神さまのお仕組は立派に成就すると、艮の金神が仰有いますから、どんな難儀なことが出て來ても、何ほど反對があつても此處を離れてはいけませぬ。平藏サン、チとしつかりして下さい。今先生に申した通り、神さまは如何しても御放しなさらぬから、平藏サン、チとシヤンとして先生の教を聞き、外の神憑や役員の言ふ事に迷うては可けませぬ。金光さまの教が開きたい人は勝手に開いたが宜しい。私等三人はどこまでも動かぬ決心をせねばなりません、其お積で

みて下され。先生くれぐれも頼みますぜ」

と云ひ棄てて自分の居間へ引取られた。それから四方平藏の態度が一變して、陰に陽に上田を庇護する事となり、漸く大本の基礎が固まりかけたのである。

元金光教會の教師であつた土田雄弘は、喜樂の靈學の力に感じ京都に上り、舊友などを集めて金明會の支部を、鹽小路七條下ル谷口房次郎の宅で開設し、一同協議の上に谷口熊吉なる者を、綾部へ修行の爲に差向けた。喜樂の熱心なる教に、二三週間の後は、一通り靈術を覚え、第一に天眼通が利くやうになつて來た。そこで當人は非常に慢心を起し、自分位靈術に到達したものは、四方春三位は物の數でもない、過去現在未來に通ずるやうになつたのは、自分の天賦の靈能が然らしむる所であらうと、得々として教祖の前に出で、厚顔にも、谷口「此谷口が神から選ばれた因縁の身魂で、將來大本の教主になるべきものでせう。然らざれば、僅二三週間の修行でこんな上達する事は出來ずまい。必ず昔からの因縁と神助の然らしむる所に違ひありません。今日以後は及ばず乍ら、私が御用をつとめ、天晴れ良の金神さまを表へあらはし、教主のつとめを致す考

へでありますから、上田サンには今まで御世話になつた御禮に、相當の金を與へて、穴太へ御歸しなさつた方がよろしからう』

と教祖の前で恐氣もなく述べ立てた。教祖は餘りの事に呆れて言もなく、谷口の顔をジツと見つめてゐられた。谷口はモドかし相に、言せわしく、

谷口『教祖様、どちらになされますか。私にも御返答次第で一つ考へがあります。谷口熊吉が金明會をかまへば、良の金神さまの御教は一年たため内に日本國中に擴まり、金光教會の全部はキツと綾部の良の金神さまに歸順いたさせます。かう申すと慢心のやうでムいですが、上田サンの様に、役員信者一般に受けが悪いやうな人が居つては大本が潰れるより外はありません。とかく斯ういふ事は人氣が肝腎であります。役員も信者も神憑も、上田サンが何時までも綾部に居すわつてゐるやうなら一人もよりつかぬと云つて、昨夜も上谷の四方春三サンとここで相談がきまりました。私は大本の大事を思ひ、教祖さまのお身の上を思ふ餘り、何も彼も隠さず申上げます。一體教祖さまは、上田サンを買被つてゐられますと皆の者が云うてゐます』

と野心を包藏する谷口は、教祖がどういはれるかと、其御返答を待かね顔であつた。

教祖は直に答へて、

教祖「谷口サン、それは誠に結構な思召しでムいますな、皆さまの御志は神さまもさぞ御喜びでムいませう。乍併誠といふ者はそんなものぢやありません。お前サンも上田サンに、假令三日でも教へて貰うたら先生に違なからう。其先生を追出して自分が後にすわるといふやうな御精神の御方は私は嫌です。誠といふものはそんな易いものとは違ひますで、私はどこ迄も上田サンと手を曳いて、神さまの御用をする覺悟であります。そんな事を言ふお方は、どうぞ一日も早う歸つて下され」

とあべこべに退却を請求され、目算がガラリと外れた谷口は青い顔して、首尾悪相に教祖の前を下り、すぐさま上谷へかけつけ、第二の作戦計畫について大運動を始め居た。

教祖の筆先に、

「御用繼は末子の澄子と定まりたぞよ」

と繰返し繰返し現はれてゐるので、第一に出口の養子たらむとの野心を起してゐたのは、金光教會の足立正信氏であつた。彼は良の金神さまの教が將來發達するに違ひない、さうすれば第一出口の娘の婿となつておけば、將來の權利を握る事が出来るといふので、陰に陽に教祖に近付きつつあつたのである。此男は元は淀の藩士で、小學校の教員を勤めてゐたが、そこに金光教會所が設けられてあつた、其教會へ暇ある毎に通うて受持教師に理屈をふきかけ、いろいろと妨害をなし、とうとう其教會をメチャメチャに叩きつぶして了うた男である。それを上級教會の、京都島原支所長杉田政次郎が甘く自分の手元へ引入れ、相當の俸給をやつて事務員に使うてゐた。

出口教祖が始めて神懸になられた時、四方平藏氏が妻君と共に、南桑田の土田村といふ所へ行つて居つた。其時龜岡の金光教會の大橋龜次郎といふ教師について、金光教の教を聞いてゐた關係上から、教祖の事を龜岡の大橋に話してみた。さうすると大橋は、良の金神というて信者が澤山によつて來る相だから、何とか

して、其出口お直サンを金光教會の教師となし、龜岡の教會の部下として、綾部に一つ教會を立てたいものだといふのが手蔓となり西原の西村文右衛門といふ男が教祖に難病を助けて貰うた關係上、龜岡の教會へ行つて大橋龜次郎から、金光の劍先を下げて頂き、西村文右衛門氏が背中を負うて、大島景僕といふ人の離れの六疊を借つて、始めて金光サンを祭つたのである。其六疊のはなれは今大本に保存されてある。大橋龜次郎は、自分の弟子の奥村定次郎といふ男を遣はし、教師として道を開かせ、出口直子をお給仕役の様にして道を開いて居つた。乍併出口教祖はそんな事で満足しては居られず、

教祖「自分は金光教をひらくのではない、良の金神さまを世に出さねばならぬ役だから……」

と云つて、奥村定次郎に、幾度となくお筆先を出して警告されたけれど、上級教會を憚つて、如何しても良の金神さまを表にせうとはせず、とうとういろいろと官へ手続きをして、福知山金光教會支所長青木松之助の出張所といふ名で、東四辻の古い家を借つて、そこに道場を開き、奥村定次郎が受持教師となつて、金光

教を聞いて居つた。

出口教祖は神さまの命令によつて、奥村に別れ、裏町の土藏を借つて、そこで神さまを祀つて、筆先をかいてゐられた。金光教會はだんだん淋しくなり、火が消えたやうになつて了ひ奥村氏は止むを得ず夜逃げをしてうた。これも出口教祖が……良の金神の言ふ事をきかねば、夜の間に泣きもつて逃げて歸らねばならぬぞよ……と注意しておかれた通りになつたのである。其後へ島原の杉田氏から、足立正信を受持教師として綾部の教會へよこしたのであつた。

次に中村竹藏といふ男は、本町の播磨屋というて、古物商をやつてゐたが、始めから教祖さまに従ひ、難病を助けて貰ふてから熱心な信者となり、筆先の大熱心者であつた。これも何時の間にか慢心が出て來て、自分の女房を離縁し、出口の娘を嫁に貰はうと考へてゐたのである。

次に四方春三は、上谷で相當な財産家の總領息子で、邪神が憑つた結果、弟に後をゆづり、相當の財産を持つて出口家へ養子に入り込まうと、幾度となく申込んで居たのである。斯くの如く三人の養子候補者が、手をかへ品を替へ暗中飛躍

を試みて居た有様は、恰も古事記にある八十神が八上姫を娶らむとして争奪に餘日なきと同じことであつた。足立正信は鹽見、四方の二女を參謀として、教祖に取入り、それとはなしに二ヶ年間に根氣よく運動してゐたといふ事である。又中村氏は四方源之助、村上清次郎を參謀として、これも二三年間不斷の活動をつづけてゐた。四方春三は自ら少々の財富力を楯に單獨運動をやつて、自分は十中の九まで最早成功したものと信じ、互に三人が三巴となつて隙を伺うてゐる。そこへ突然喜樂を神さまから、大本の御用つぎと致すぞよと示されたので三人の不平は言はず語らず一時に爆發して、喜樂に對しいろいろの壓迫を加へ、惡罵を試み、百方妨害に着手する事となつたのである。

又もや谷口熊吉が出て來て、野心を抱きいろいろの運動を開始する。喜樂も澄子もそんな事は夢にも知らず、何事も頓着なく、一意専心に靈學の發達と筆先の研究とに、心意を傾注してゐたのである。

(大正一一・一〇・一六 舊八・二六 松村眞澄録)

第九章 稍安定（一〇四六）

福島氏は依然として數多の役員や修行者と共に、福島「丑の年に生れた寅之助の良の金神は此方だ」と威張り散らして猛り狂うて居る。そこへ喜樂に大反對の足立、中村、四方春三等が、益々反對の氣勢を煽るので、自稱良の金神の狂態は愈激烈を加へるばかり、遂には教祖を退隠せしめ喜樂を放逐し、福島を以て綾部の良の金神の教祖となし、足立を以て教主となすべく熟議を凝らし、着々實行の歩を進めてみた。谷口熊吉も無論共謀者であつた。勝に乗じて心驕るは凡夫の常、福島は日に日に狂的行動を加へて來るが、足立、谷口、四方、中村等は深い計略の各自にある事として少しも之を制止せず、却て煽動するばかりで始末におへなくなつて來た。要するに穴太から喜樂がやつて來て神懸を始めたから、こんな狂亂が出來たのだと云つて喜樂を失敗せしめ、且靈學の弊害を一般に認めさせ、喜樂の立退きを餘儀なくせしめんとする策略であるから堪つたものでない。たまたま修業者の一人なる村上房之

助が少しく覺醒して福島ふくしまの亂暴らんぼうを改めしめやうと自分じぶんが審神者さきにに着手ちやくしゆしたが、一
つ二つ問答もんたふの末すゑ、福島虎之助ふくしまとらのすけは答辨たふべんに苦しみ、直ちに立ち上つて、
福島ふくしま「こりや村上むらかみの奴やつ、生意氣なまいきな事を申すな。此方このほうは理屈りくつは嫌きらひだ。それよりも
實地じつちの神力しんりきを見せてやらう」
と云ふより早く、村上むらかみの首筋くびすぢをつかんで蛙かへるを投なげる様に、二三間先にさんげんさきへ投なげつけて
了しまふた。村上むらかみも眞蒼まつさをの顔かほになつて低頭ていとう平身へいしん只管ひたすらに謝あやまつてばかり居る。福島ふくしまは荒れ
に荒れ、狂くるひに狂くるつて、今度は中村なかむらや四方しかたの手てにもあはなくなつて了しまつた。淵垣ふちがき
の駐在所ちゆうざいしよから巡查じゆんさが出張しゆつちやうして來て、愚圖ぐづぐづ々と小言こごとを云ふので、例れいの何方どちらへもつ
く愚直ぐちよくぢい爺いの祐助いすけが綾部あやべへ飛とんで來て神懸かむがかりの鎮定ちんていを歎願たんぐわんする。見るに見かねて喜樂きらく
は鎮壓ちんあつの爲ため出張しゆつちやうせむとするや、教祖けうそはこれを聞きいて、
教祖けうそ「先生せんせい一人ひとりでは邪神じゃしんの群むれへ行く事ことはなりません。澄子すみこを連れて行いつて下ください」
との言葉ことばに従したがひ、自分じぶんは澄子すみこと祐助いすけと三人さんにんづれにて上谷うへだにの修行場しうぎやうばへと驅かけつけた。
行いつて見みれば、福島ふくしまを始めはじめ一同いちどうは家中いへぢうを暴あはれ狂くるひ、
福島ふくしま「良よの金神こんじんの神力しんりきは此この通りだ」

と云つて始末がつかぬ。足立も谷口も四方も手品の薬が利きすぎて、案外猛烈な狂亂的憑靈に畏縮して了ひ、家の隅に小さくなつて震ふて居る。福島は村中に響く様な大きな聲で、

福島「三千世界一度に開く梅の花、良の金神の世になりたぞよ。須彌仙山に腰をかけ鬼門の金神此世の守護を致すぞよ。大の字逆様の世になりたぞよ。此福島寅之助は世の變り目に神の御用に立てるために三千年の昔から世に落ちてかくしてありた結構な身魂でありたぞよ。けれども神が世に落ちて化かしてありたから今の人民は侮りて居るぞよ。結構な身魂ほど世に落ちてありたぞよ。牛の糞が天下をとると申すのは今度の譬えであるぞよ。神が表に現はれて善惡の立替を致すぞよ」

と筆先の眞似をして、朝から晩まで連續的に叫び乍ら荒れ狂ふてゐる。足立を始め其他の役員神憑は、平生から筆先の聞きかじりを覺えて居るから、今の福島の憑靈の言葉を聞いて、眞似をして居るものとは思はず、誠の良金神に相違ないと固く信じて居るから堪らぬ。福島は喜樂の顔を見るなり、

福島「サア又上田が来たぞよ。皆の眷族共、上田を調伏致して改心させねばならぬぞよ。今に神が懲戒を致してアフンとさして見せるぞよ。おちぶれ者を侮る事はならぬぞよ。結構な方を世に落して結構の御用をさしてありたぞよ。其御方と申すのは出口直ではなかりたぞよ。福島寅之助でありたぞよ。サア一同の者よ、上田を早く叩き出して了へよ。神界の仕組の邪魔になるぞよ」

と命令をする。一同は一生懸命に喜樂の前に立ち塞がり、兩手を組んでウンウンと力一杯息をつめ鎮魂で縛らうとしてゐる、其可笑しさ。何程ウンウンと氣張つても喜樂の體はビクともせない。一同は一生懸命になつて益々ウンウンを續けて居る。そこへ澄子が現はれてウンと一息呼吸を込めて睨むと、二十餘人が一時にバタバタと將棋倒しになり、身體強直して動けぬ様になつて了つた。足立、中村、四方春三の三人は顔色を蒼白に變じ、許しを乞ふ事頻りであつた。澄子は只一言、澄子「改心すれば許す」

と言つた言靈の妙用忽ち現はれ、一同は元の體に歸つた。これに驚いて村上房之助、野崎篤三郎は何處ともなく姿を隠し、三日も四日も歸つて來ない。そこで二

人の行衛が知れぬと云つて大騒動が持ち上つた。上谷の修行者一同は残らず綾部の廣間へ歸つて來た。村上と野崎の兩親が非常に立腹してつめかけ、
「一體私方の掛替のない大切の息子を全氣狂にして了ふた擧句、行衛も知れぬ様になつたのは足立サンや中村サンが行き届かぬとは云へ、もとは上田サンが出てきて神懸だ等と申して、狐や狸を大切の息子に憑けたからぢや。さあ今此處へ息子を出して返して呉れ。萬々一池河へでも身を投げて死んで居つたら如何して下さる。さあ早く返答を聞かせ。もう了見ならぬ」
と大の男が目を剥いて睨みつける。喜樂は默然として暫し考へ、
喜樂「御心配は入りませぬ。只今お目にかけて安心さして上げます」
と言葉の終るや否や、村上房之助は生田村の舊神官福林安之助氏を伴ひ、意氣揚々として歸つて來た。福林が大本の忠實な役員となつたのはこれが動機である。
次に野崎は志賀郷村字西方の竹原房太郎を伴ひ歸つて來た。竹原はもとから綾部金光教會の古い世話方であつたが、金明會へ入會した動機もこれが始めであつた。さうして福島は一先づ八木へ立ち歸る事となり、後は喜樂、澄子の二人が審神者

となり何れの神懸もよく鎮まりそれぞれの神徳を受け、金明會は一先づ治まり、
反對者も我を折つて教祖や喜樂の指圖に服する事となつた。

(大正一一・一〇・一六 舊八・二六 北村隆光録)

第一〇章 思ひ出(一)「一〇四七」

明治三十四年十月、大本の祭壇が、舊廣前の二階にあつた頃の話である。警察署から毎日の様にやつて来て、宗教として認可を受けなければ布教を許さないと云つて頑張るのである。明治二十二年憲法の發布によつて信教の自由が許されてから、そんな筈はないと理窟を言つて見ても堂しても承知しない。仕舞には巡查を前に張番させると云つた様な譯で、信者までが嫌つて遣つて來ない様な始末だ。是では困るから思いきつて皇道會といふ法人組織に改めやうとして、静岡の長澤雄楯と云ふ人の處へ相談に行かうと考へたところが、教祖様は神様に伺はれて、

假令警察から何と云つて来ようと構はぬから、其儘に打捨てて置けと云ふお話であるが、警察の干渉は益々激しくなる一方なので、如何しても打捨てて置くといふ譯には行かなくなつて来た。そこで教祖様へは内密にして、木下（出口）慶太郎を連れて静岡へ出掛けたのである。

留守中に教祖様は此事を聞かれて、上田喜三郎（瑞月舊名）の所業は神勅に反く怪しからぬ所業だ、神代の須佐之男尊の御行跡と等しきものだと言つて、彌仙の中腹にある彦火々出見命のお社の内へ岩戸隠れをされて仕舞つた。

そんな事とは夢にも知らぬ兩人は、静岡で相談をして歸り、京都府へよつて手續をしようとしたのであつたが、印形が一つ足らぬので手續が出来なくなり、止むを得ず木下に命じて印形を取りに綾部へ返し、自分は京都に滞在して布教に従事して居た。

其頃の大本の幹部は實に混沌たるものであつて、愚直な連中は迷信に陥つて仕舞ひ、野心家はそれを利用して、隙があつたら自分を排斥しやうといふ考へであつた。そして其野心家の間にも亦絶えず暗闘があつたのである。印形を取りに歸

つた木下は梨の礫で一向消息がない。そして待つて居ない信者の連中がやつて来て、京都に澤山ある稻荷下げの様な交霊術者を一々訪問して、靈力を試して見やうと云ひ出した。仕方がないから片端から廻つてあるいて、澤山な稻荷下げを縛つて歩いた。

伏見の横内に青柴つゆといふ稻荷下げがゐて、伏見の人から崇拜されて居るといふ噂を聞いてやつて行つた。とても堂々とやつて行つては斷られるに極つて居ると考へたから、百姓の様にして化込んだ。同行者は松井、松浦、田中徳、時田、三牧などと云ふ連中であつた。上田喜三郎といふ者が家出をして行衛が分らぬから、何處に居るか、神様に伺つて戴きたいと云ふと、勿體らしく咳拂ひなどして、其人は百兩の金子を持出して逐電したのであつて、巽の方角に行つたといふ。それなら一つ金縛りにして戴きたいと云ふと、縛るには七兩金が要ると云ふ。それから自分が進み出で、實は病氣で困つて居るのであるが、何の病氣であるか伺つて頂きたいといふと、短い御幣をトントンと叩いて、是は腹中に大蛇がある、住宅の乾の方角に當る倉の處にゐた大蛇が腹中に這入つたのだといふ。住宅の乾に

は池はあるが倉はありませぬがといふと神に向つて無禮な事を言ふなど、とても御話にならぬ事を言ひ出すから、時田が化の皮を現はして、馬鹿な事を云へ、此人が上田喜三郎の本人だ、病氣も何もしてゐない。吾々は新聞の種をとりに来たのであるから、今日の出来事を書面にして事實通り證明せよといつて苛め出した。横内の氏神の祭禮が十月の九日で、祭禮の翌日であつたものだから、御祭りの後の持越しか何かで、村の若者がゴロゴロ集まつて居つた。それが聞付けたからたまらない、お臺様の處へ他國の奴がグズリに来て居る、やつ付けて了へ、淀川の水を飲ませてやれ……などと云つて、岡田良仙といふ坊主上りのゴロツキを呼んで来るやら、巡查が驅付けるやら、大騒ぎになつた。連れの五人は斯うなつて見ると、生命が惜しいと見えて、敵方へ付いて了つて小さくなつてゐる。今から考へると、同伴の五人が敵方へ従いたのが合せだつたので、群集は自分と岡田良仙とをスツカリ取り違へて了つて同伴の五人と良仙とを滅茶々に殴り付けて、自分を良仙だと思つてどうか此方へ御出で下さいと云つて家の中へ連れて行つて了つた。自分は何時露顯するか分らず氣持が悪いから、コツソリ逃げ出して巡查

駐在所へ圍まつて貰つたのであつた。後になつて聞くと、此時大本では神前の大
きな水壺や土器が突然破れたり神酒徳利が引繰返つたり、京都の信者の家でも神
棚の上の物が落ちたり割れたりして、何事だらうと騒いだそうである。實母は天
眼通で多人數で取巻かれ、眞ん中に泰然と坐つて居る喜樂の姿を見たから、安心
をして居つたそうだ。巡查駐在所を出る時人違の事が解つて、又騒ぎ出したが、
巡查が伏見迄送つてくれるし、京都の信者は心配をして、伏見迄迎へに来てくれ
るし、無事に京都へ着いて西洞院西村榮次郎の家へ落付いた。是で安心と思ふと、
今度は五人の連中が承知しない。自分等が敵方へ従いた事は棚へ上げて、散々歐
打せられた恨を並べて、靈力があるなら何故數百人の暴行を差止めなかつたか、
反對に五人の者をなぐらせたのは四つ足の惡の守護神に相違ない、早く化の皮を
現はせ、なぐられた痛い所を治せ、癒されねば切腹をしる……と云つて逼る。國
家の爲とあれば何時でも切腹するがここで切腹をする様な安い生命ぢやないとい
ふと、腰拔め、貴様の行ひが悪いから、教祖様が岩戸隠れをされて了つた。モウ
大本へ行く必要がないから、何處へでも行け……と云ふ。それなら仕方がないか

ら他所へ行かうと云へば、他所へ行くなら謝罪せよ、三遍廻つてワンと云へ……
などと理不盡な事を云ひ募る。ここは一つ辛抱をする所だと、韓信股くぐりの故
事を想つて辛抱した。そして濟まぬ事をした、堪へて呉れと云つて謝罪まつてや
つた。丁度其時京都の侠客いるは幸太郎と云ふのが來合せて、乾兒の山田重太郎
を付けて送らせて呉れたので、無事に綾部へ歸る事が出來た。
歸つて見ると、荷物は引括つて片付けて了つてあつて、中村竹藏や四方平藏が、
……此通り世を紊す四つ足の守護神は居る事はならぬ、出て行け……と云つて又
苛める。さう斯うして居ると今度は警察署から教祖様に呼出しが來た、何事だら
うと聞いて見ると、教祖様が彌仙山の神社の錠前をちぎつて籠られたのは規則違
反だ、罰金を出せといふのであつた。教祖様は彌仙山の社に籠つて、靜にお筆先
を書いてお出でになつたのであるが、村の者が社前へ來た物音を聞いてヒヨイと
顔を出して見られたのである。思ひがけぬ處から白髮の老婆が突然顔を出したの
であるから、村人の驚いたのは無理もない事であつて、彌仙山の社内には狒々猿
が居ると云ひふらして評判になつた。今でこそ樹木を伐つて明るくなつて居るも

の、當時の彌仙山は老樹鬱蒼として晝尚暗き靈山であつた。狒々猿が居るといふ評判が高くなつて、仕舞には村中擧つて狒々退治をしようといふ事になつた。竹槍を擔ぎ出すやら、巡査が加はるやら、神主が来るやら大騒ぎになつた。一同彌仙山へ押寄せて見ると、丁度教祖様の處へ辨當を持つて行く後野市太郎が居合せたので、狒々猿ではないと云ふ事が分つた。皆が教祖様を取圍んで……なぜこんな處へ來て居るか……と云つて問ふと、教祖様は世の中が暗がりだから隠れたのだ……と云つて平然として居られる。皆が口を揃へて、綾部の天理教の馬鹿か、早く出て行けといふと、教祖様は今日はお籠もりしてから一週間目であるから、皆が出るなと云つたつて出る日ぢや、序に上杉迄送つてくれ……と云つて濟まし込んで居られる。

自分が上杉へ行つて、駐在所に行く、教祖様を訊問所へ入れやうとして居る所であつた。訊問所へは自分が這入るから、教祖様は御入れしないで置いてくれと云つて、それから訊問を受けた。何故女人禁制の場所へ女人が這入つたか……と問ふから、明治四年の布達によつて結界は解けて居るのに、女人禁制とは何事

かと反對に突込んでやったので、一言も出ない、さうすると今度は他人が管理して居る建造物内に錠を破つて這入るのは違法だと思はぬか……といふ問で、是に一寸困つたが、神社法令の中に信仰により立入るものは此限りにあらずとあるから、差支ない筈だと出鱈目を云つた。手許には神社法令がないから調べる事が出来ぬので、無事に歸らしてくれた。併し教祖は前以て神主に頼み、神主は内々で此處に籠らしてゐたのであつた。

教祖様の彌山籠りの騒ぎはこれで無事に済んだのであるが、済まぬのは幹部連中の腹の中だ。自分の所業は一々腑に落ちぬ所から、是は小松林といふ四足の悪の守護神の所業だといつて、頻りにその悪の守護神を罵るのである。それなら一層喜樂を追ひ出してくれればよいのであるが、喜樂の肉體は教祖様のお筆先に依つて、神業の爲居らねばならぬ肉體になつて居るので追ひ出す事も出来ず、自分の一つの身體を二様に見て居るのであるから、たまつたものでない。とうとう六疊敷の一室に入れられて、一擧一動を監視される様になつた。自分の傍へ來る時は鹽をふつてやつて來るから、お前等の肉體が汚れて居るから鹽をふつて清

めて近づくのかなどと云つて戯談を云つてやると眞赤になつて怒つて居る。福島
久子サンなどは、

久子「先生如何して改心が出来ませぬか、さういふ御心得だから、教祖様が岩戸
隠れなどをされるのだ。早く改心をして下さい……」

などと熱心に云つて来る。教祖様の岩戸隠れなども、年寄の吾儘だから仕方がな
い……と答へて、何の斯のと面倒だから、腹が痛いと言ふと……それ見なさい、
改心をしないから、腹が痛むのだといふ。

喜樂「よし腹の痛いのは改心をしない證據か、それなら證據を見せてやる」

と云つて鎮魂をすると、久子サンが俄かに腹痛を起して、痛い痛いといつて大苦
しみに苦しむで、五日間も呻吟した。教祖さまが「早く先生に謝罪せよ」と云は
れたものだから、四方平藏が謝罪に來た。

喜樂「いや代人では無効だから本人をよこせ」

と云つてやつたので、とうとう久子サンが謝罪に來た事もあつた。さうすると幹
部の連中が又やつて來て、

「先生は何といふ悪い事をする人であるか、是は如何しても悪魔だ、術を見せる、裸になつて見せる」
と云ふ。五月蠅いから近寄つて来る中村竹藏をウンと睨んでやると、又腹痛を起して……痛い痛いと言つて苦み出した。斯う云つた様な次第で、……會長（瑞月）は悪魔だ、會長のいふ事を聞くな……と云つて、幹部の連中が切りの方々へ云ひふらして歩いたものである。

（大正一一・一〇・一六 舊八・二六 松村眞澄録）

第一章 思ひ出（二）（一〇四八）

自分を排斥しやうと云ふ、幹部の中の野心家連中の活動が段々露骨になつて來た。川合の大原に泊つた時、十人ばかりの暗殺隊がやつて來た。自分の靈眼には誰と誰とが來て居ると云ふ事がすつかり分つて居る。翌日大原を出發して上谷と

西原との間の、俗に地獄谷と云つて居る處へさしかかると、如何したものが、自分の羽織の紐がほどけて羽織が脱げやうとする。不思議だと思つて鎮魂をして見ると、暗殺隊の待ち伏せである事が分つた。四方春三が供をして居たが、是も一つ穴の貉だから、自分は挨拶巻腕まくりをして居たが、喜樂「大きな割木を握つて後に目が無い。どんな事をするか知れたものでないから先へ行け」

と云ひつけると四方は吃驚して逃げ出した。少し行くと、彼方からも此方からもガサガサと出て來たが機先を制せられて張り合ひ抜けがしたと見えて、

「先生、お迎へに参りました」
などと云つて居る。

喜樂「馬鹿を云へ、こんな怪しからぬお迎へが何處にあるか、後に目が無い、先へ行け」

と云つて喜樂は一番後から跟いて行つた。手持無沙汰になつたものだから、一人逃げ二人逃げ、到頭四方權太郎、王原常太郎、村上春之助、谷口熊吉、それに喜

樂と五人になつて了つた。一人が股を廣げて放屁をやると又一人が放屁をやる、自分も負けぬ氣になつて復讐的に又放屁する。誰も彼も、やるともやるとも能くも出たものだと思ふ位盛に連發して、西原から綾部の大橋迄一里の間放りづめであつた。歸つて來ると、教祖様が家の前にある岩に赤い眞綿と白い眞綿とを重ねかけて、縮緬の紐で縛つて自分の無事な様にお呪ひして居られた。赤白の眞綿は、良と坤の金神様、紐は龍宮様だ。逃げて歸つた連中は、教祖様から叱られてお互に罪のなすり合ひを始めた。喜樂は濟んだ事だから構はぬ構はぬと云つて、一場の夢と觀じて無事に濟ませた。

無事に濟む事は濟んだが、其後も喜樂の云ふ事は用ひて呉れない。

「教祖様は經を説かれる、會長は教祖様のお話の分る様に緯を説くのである」と説明しても如何しても信用せない。そして自分の肉體は教祖様のお筆先にある通り、神業のために居なくてはならぬ肉體であるが守護神が小松林と云ふ四つ足の悪の守護神だから、如何しても其化けの皮を剥かさねばならぬと考へて居るのである。こんな風で喜樂の云ふ事は一向聞かぬから、いつそ飛び出さうとすると、

四方平藏氏が仲裁して、

四方百のものなら、教祖様のお話を九十九聞いて、先生の話の一つだけ聞かう

と云ひ出した。すると中村竹藏が、

中村「それも可かぬ」

と云ふ。喜樂は、

喜樂「君等は教祖様の御馳走される糞尿と、喜樂が御馳走する飯と鯛と何ちらを

取るか」

と聞いて見ると、

中村「教祖様の糞尿なら有りがたく頂戴する」

と云ふ。これでは到底駄目と考へたから、大坂の内藤七郎氏の處へ行つて了つた。

其後用が出来たので、一度洋服を着て綾部へ歸つて来た事がある。すると自分

の行衛を探して居つたと見えて、喜樂が歸つたのは喜んだが、又小松林の四ツ足

の悪の守護神呼ばはりを始め出した。洋服は引き剥いて雪隠へ投げ込む。誰かの

着物を着せて、鞆は何處へか片付けて了ふ。そして張番をして何處へ行くにも附

いて来る。不自由千萬な事、お話にならない。とても辛抱しきれぬから、出て行かうとするけれども如何しても出しては呉れぬ。強て出やうとする、「これでも行くか」と云つて木下慶太郎、後野市太郎、村上房之助、竹原房太郎等が出刃庖丁を持つて来て切腹しやうとする。嚇かしてはなくて本氣なんだから耐らない。仕方なしに往生して一ケ年ばかり、又腰を据ゑる事に決心した。

自分の身體は自分の自由にならず、幹部は依然として云ふ事を聞かず、と云つて一方では神様が憑られて切りに活動せよ活動せよと責められる。自分としても爲す事もなく、斯う云ふ風にボンヤリして居る譯には往かぬから、分るやうに平たく説明したものを書いて西田元吉に渡して、布教のため活動の餘地を作らうと努力した。すると京都から杉浦萬吉がやつて来て、喜樂に、

杉浦「西田と相談して京都へ来い」

と勧めてくれた。自分も其氣になつて、或夜用意のためにお守刀を一本携へて飛び出した。綾部から二里八町向ふの山路の大原の新屋といふ宿屋の便所へ這入ると、便所の脇でヒソヒソ話の聲がして居る。聞くとともになしに聞くと、「来たか来た

か」と云つて居る。段々聞くと、杉浦が例の野心家連中と喋り合せて、先廻りを
して待ち伏せして居たので、目的は自分を殺さうと云ふのである事が分つた。便
所の壺をくぐつて出ると其處に川がある、川を渡つて藪の中へ這ひ込んで一晩震
へて居た。其内夜が明けたから、臺頭と云ふ處へ行くと、暗殺隊の連中が自分の
行くのを待ち受けて居た。そして短刀を出して決心を示したから、喜樂も短刀を
出して見せて勝負しやうと云つてやつた。自分の決死の意を見て取つて少しく恐
氣がついたものか、到頭勝負はせずに連れだつて綾部へ歸つた事があつた。

こんな風で、自分の體は何時何んな目に遭はされるか分らず、活動は依然とし
て出来ぬ不自由に耐へず、其後又大坂へ高飛びして、内藤氏の家へ落ち付いた。
大坂に居て稻荷下げを縛つて歩いたり、四千圓ばかりの金を出し合つて人造精乳
會社を起して、京都に店を出したりした。

さうして居る内、或る日四方、中村、竹原等が偶然家の前を通つた。長髪の妙
な男が揃つて通るので犬が盛んに吠へつく。ヒヨイと見ると四方等であるから、
聲をかけてやると吃驚した。家へ這入られると煩さいから、近松の處へ同行する

と、

「お蔭で六ヶ月かかつて漸う立替の御用をさせて頂いたから誠に結構だ」と
と妙な事を云ふ。何の事かと聞いて見ると、自分の書いた本をスツカリ集めて五
百冊ばかりも留守中に焼いて了つたのださうだ。

一緒に園部の奥村の内まで行つた。さうすると四方平藏が又、

四方 小松林の四つ足の守護神

とやり出す。癩に觸つて耐らぬから、一つ、四つ足の眞似をしてやれと思つて赤
小豆の飯を焚かせ、揚豆腐と牛乳と牛肉とを煮させて洋服を着たまま、四つ這に
なつて口をつけてムシヤムシヤと食つた。さうすると、

「あゝお筆先は争はれぬ、四つ足の本性が露はれた。有難い有難い」

と云つて無暗に有り難がつてゐる。園部の信者は、

「そんな眞似をなさると益々誤解をさせる基だから……」

と云つて泣いて止める。煙草がのみ度いと云ふと、すぐ傍に火鉢があるにも拘は
らず、火打石で火を打つて煙草の火を呉れる。そして、

「小松林の四つ足の守護神は、もう憑らぬ。上田喜三郎の肉體は返上すると云ふ
證文を書け」

と云ふ。仕方が無いから漢字で以て出鱈目の證文を書いてやる。字の讀める者が
一人も無いのであるから、後生大事と喜んで受取つたが綾部へ歸つて、それが出
鱈目だと云ふ事が分つたので、又四つ足の惡の守護神が役員までも騙したと云つ
て怒り出した。

綾部へ歸つて見ると、自分の苦心して書いた本は悉く焼かれて了つて居る。神
と云ふ字は勿體ないと云つて御苦勞千萬にも一々調べて神の字だけを切り抜いて
焼いて了つたのだ。其切り抜いた神の字だけが蜜柑箱に數杯あつたが、その一杯
丈は今も保存してある。八木清太郎と云ふ男は喜樂の書いたもので、方々へ散つ
て居るのを軒別に廻つて集めて歩いて、それを表具屋へ賣つて酒を飲んで、虎列
刺に罹つて死んで了つた。こんな風で喜樂の云ふ事は、依然として聞きいれて呉
れぬから、今度は教祖様に會はして呉れと云つて久し振りでお目にかかつた。教
祖様は喜ばれて、

教祖「能う歸つて來て呉れた。もう何處へも行かんといてくれ」
と云ふお言葉であつたから、これまでの逐一を悉くお話したら、幹部の連中を
呼び出されてお叱りになり、幹部の連中が一同で謝罪して、これで又一段落がつ
いた。

(大正一一・一〇・一六 舊八・二六 北村隆光録)

第一二章 思ひ出(三) (一〇四九)

京都の南部といふ男、是は自分が鎮魂を教へてやつた男であるが、一廉の活神
様氣取りになつて、金光先生などと稱へ、高町の如きは夢中になつて信仰し出し
た。それを良い事にして、とうとう高町の細君と野合いて、一人は變性男子、一
人は變性女子と云つて、一段高い處へ坐り込み、高町は一段下の結界の外に平伏
して仕へて居る。高町に……一體如何したのかと尋ねると、神様(南部)が御入

用と仰有るから家内を差上げたのだ……と云ふ。

喜樂「馬鹿な、そんなことがあるものか、お前はすつかり騙されて居るのだ」

と云つてやると、又其氣になつて、一應は南部に向つて、嬢を返せと迫つては見るものの、家内から、

「禿ちゃん老爺、決して丹波の四つ足の云ふ事なんか取上げて神罰に觸れまいぞ」

とおどかさされると、またグラグラと其氣になつて畏まつて仕舞ふ。材料が面白い

材料だから、京都大虎座の馬鹿八と云ふ男が、俄芝居に仕組み、業々しい繪看板

まで拵へた。併し俄芝居などでこんな眞似をされては叶はぬから、止めさす工夫

はなからうかと云つて、高町から泣き込まれた。外には仕方がないから、是は狭

客いろは幸太郎に頼んで、看板代を五十圓出して、とうとう止めさせて了つた。

三十五年正月直靈が生れた時、教祖様はお筆先通り、此子は水晶の種だから、

種痘は出来ぬと云はれた。自分が所用で大坂へ行つて居つた留守中、役場からも

警察からも切りに種痘を迫つて来たが、其儘にうちやつてあつたのでとうとう六

月に警察から呼出しがあつて、種痘をしなかつた罰で二十銭の科料に處せられた。

間もなく規則が改正されて、二十錢の料が一足飛びに二十圓の罰金になった。當時の自分の手前では逆も二十圓の支出は出来ぬ許りでなく、幹部の連中が罰金を出す事を如何しても承知しない、是が御筆先の時節到来で世を轉覆すのだといふ。時節到来はこんな事ぢやないと云つて聞かしても、中々承知しない。仕方がないから、次回の種痘期には家内とも相談して、筆筒を空にして漸う罰金を支拂つた。罰金は納まつたが、治まらぬのは幹部の連中で、自分が罰金を支拂つたといふ事が分つたものだから、蜂の巣を崩した様に騒ぎ出した。そして一同蓑笠で警察署へ押掛けて、支拂つた罰金を返して呉れといつて談判を始めた。種痘をしなかつたと云つて罰金を出しては日本が外國に負けた形になるから、出した金を惜むのではないが返して貰ひたい、返して呉れねば此處一寸も動かぬ……と云つて、駄々をこね出した。警察では一旦取つた罰金を返さぬのは知れ切つた事で、如何しても相手になつてくれない。仕方がないから今度は役場へ行く。法律できまつて居る爲に仕方がないと云ふのなら、法律を改正せよ、神の命令を聞かねば役所が潰れるが如何だ……などと無理な事を云つて、役所を苦めたが、

相手にならないので、仕舞には検事局へ行つて、警察へ出した罰金を返せと云つて迫つた。検事局でも手古摺つて、國法を無視してそんな譯の分らぬ事を云へば、軍隊をさし向けて大本を叩き潰すが如何だ……といつておどかした。さうすると四方平藏がムキになつて、……面白い、神様と軍隊と何方が強いか、力比べをせう、何萬の軍隊でもさしむける……と云つて威張るといふ始末だ。併しどこでも取上げてくれぬので其儘泣寝入りになつて了つた。

こんな次第であるから、翌年からの豫定の罰金納めは餘程祕密にして、幹部の連中には知れない様に濟ませて來た。そんな事とは夢にも知らぬので、幹部の連中は大得意だ。とうとう神様の方が勝つたから罰金を取りに來ないのだ……と云つて喜んで居た。よせばよかつたのに、幹部の連中が餘り得意がるから、實は毎年自分が拂つたのだと話しをしてやつた。さうすると又大騒ぎになつて四つ足呼ばはりをやり出した。

或日園部の青柴仙吉、田中仙吉、上仲儀太郎、辻フデなどがやつて來て、支部の發會式をするから來てくれと云ふ事であつた。同行して途中の觀音様の池のそ

ばで一服やつて居ると、突然池の中へ付き落としたり、狼狽して這ひ上らうとする
と、竹を持つて居て、又突込む。そして、
□ 小松林の悪の守護神去ね去ね。先生には濟まぬが、小松林が不可ぬ。外國魂を
除けねばならぬ」

と泣いて意見をす。愚直な迷信家にかかつては手の出し様がない。やうやう這
ひ上つて園部へ行くと、支部の發會式なんて全然嘘なんだ。夜中に四人でおさへ
つけて、背中に大きな灸を据ゑて、

□ コラ小松林の四つ足守護神、何と心得て居る。此御方は貴様等の容物になる様
な御方ぢやない、早く去んだ去んだ」

と云つて大きな灸を据ゑ廻しにする。今度は仰向けにして、胸から脇のあたりを
くすぐる。たまらなくなつて笑ふと、

□ まだまだ居る居る」

と云つてくすぐり乍ら……去なぬか去なぬか……と責めつける。だんだん調べて
見ると幹部の中村などが二三人出かけて来て居て、蔭から差圖をして居るのであ

つた。

何時まで経つてもこんな風では、何も仕事が出来ぬから、他處へ行かうと思つても、行けば本気で切腹をするといふのだから、如何することも出来ぬ。西田が夜隠れて来て、打合せをして北桑田へ布教に行つた事もあつた。

三十七年に北桑田へ行つた。八木に氏神の祭禮と福島サンの内のお祭とがあつたので、四方平藏、中村竹藏、家内の姉のお龍サンなど同行した。是を機會に夜逃げをしようといふ考へであつた。豫て西田と打合せがあつて、檜山の鍛冶屋に待たしてあつた。突然姿を隠しては母が心配するから、決して心配せぬ様に耳打をして置いてくれと云ひたいのであるが、皆が側に居るので、先に行く事が出来ない。仕方がないからお龍サンに腹痛を起さした。皆が鎮魂をして上げてくれと頼んだが、

喜樂「自分は四つ足だ、四つ足の鎮魂なんか利くものか」

と云つてドンドン先へ行つて、ゆつくりと西田と話をした。それからいくら待つて居ても皆やつて来ない。後から聞くと同じ道をクルクル廻つて居つたのださう

な。仕舞には二手に分れてやつて来た。四方が新道からやつて来たから聲をかけ
てやつた。

八木へ行つて氏神の祭禮をすませ、翌日一寸穴太へ寄つた。中村と四方の隙を
見て、母に耳打をして又八木へ歸つた。福島サンの祭をすませて、其晩逃げやう
と考へたのであるが、皆が見張つて居て逃げる事が出来ぬ。仕方がないから足を
揉め、肩を揉めとヤンチャを云つて夜更までもませたら、皆草臥れて寝て了つた。
其間に手早く仕度して、即興の書置をかけた。

☞ たまたまの旅につかれてグツと寝る

素人按摩が肩ひねる

ねるは ねるは たわいもなしに

寝る間に抜けた目の玉は

尋ねる由も泣寝入り

夜具のトンネル穴許り

寝^ねてる間に^ま知れぬとそんな事^{こと}

歸^{かへ}つて教祖^{けうそ}に云^いひかねる

ネルの首卷^{くびまき}ネルパツチ

空^{そら}から雨^{あめ}がフランネル

ヤキヤキと熱^{ねつ}を福島會合所^{ふくしまくわいがふしよ}

跡^{あと}の祭^{まつり}で四方中村^{しかたなかむら}

自分^{じぶん}乍^{なが}ら可笑^{おか}しくなつてクスクスと笑^{わら}ふと、お龍^{りよう}サンが目^めを覺^さまして、黙^{だま}つて行^ゆけと手真似^{てまね}で知^しらす。外^{そと}へ出^でると西田^{にしだ}が來^きて待^まつて居^ゐる。それから園部^{そのべ}迄^{まで}一^{ひと}走り^{はし}に走^{はし}つた。そして港屋^{みなとや}といふ宿屋^{やどや}の二階^{にかい}に隠^{かく}れてゐた。自分^{じぶん}が夜逃^{よにげ}したといふことが分^{わか}つて、皆^{みな}で大騒^{おほさわ}ぎをして園部^{そのべ}穴太^{あなを}をスツカリ搜^{さが}し廻^{まは}つたさうな。『靈界^{れいかい}物語^{ものがたり}』靈主^{れいしゆ}體從^{たいじう}第二卷^{だいにくわん}其儘^{そのまま}を繰返^{くりかへ}したのである。

宮村^{みやむら}の内田官吉^{うちだくわんきち}の内に^{うち}二日^{ふつか}居^をつて宇津^{うつ}へ行^ゆき、山國^{やまくに}へ行^ゆき、山國^{やまくに}で二晩^{ふたばん}とまつて宇治^{うぢ}まで行^いつた。それから汽車^{きしや}で龜岡^{かめをか}に行^ゆき、王子^{わうじ}へ行^ゆかうとすると、四方平^{しかたへい}

藏がやつて来た。

八木で心配をしてゐるからと云ふので八木へ寄つた。今夜は逃げぬから寝よといふけれど、警戒をしてマンチリともせずに見張つて居る。こんな風で又綾部へ歸つて来た。そして更に半年程六疊の間に押込められた。代る代る張番をして暫時の間も自分の自由にはならぬのである。古事記を研究しやうとすると、そんな乞食の學問なんか、釋迦の眞似などする事は要らぬと云つて取り上げて了ふ。それぢや日本書紀を讀まうといふと、日本の書紀ならよからうといふ。讀んで居ると其本を見て、日本の書紀などと云ふが、是は角文字ぢやないかと云つて取上げて焼いて了ふ。仕方がないから一部福林の神官から借りて、蒲團を被つて豆ランプの火で調べた。人の足音がすると、あわてて消すといふ様な次第で、骨が折れる事、一通りや二通りではなかつた。其後事情があつて四十一年迄某官幣社の神職を勤めた。

幹部の連中は立替立直しは三十七八年の日露戦争だと誤解して居たのだが、さうでなかつた爲に、一人減り二人減り、野心家の中村竹藏は死に、四十二年頃に

は教祖様の外には四方與平、田中善吉のみが残つて、後は皆みなくなつた。モウ大丈夫と考へたから自分も歸つて来て、熱心に布教に従事し、今日の大本の土臺がだんだん出来て来る様になつたのである。

(大正一一・一〇・一六 舊八・二六 松村眞澄録)

第三篇 冒險神驗

第一三章 冠島(一〇五〇)

然れども言に非ざれば意を現す能はず、言は意を盡す能はず、書に非ざれば言を載す能はず、抑も聖賢易に曰く、書は言を盡す能はず、言は意を盡す能はず、意は神を盡す能はず、

の言、偉人君子の行、忠臣義士の偉擧、貞女節婦の美傳、悉く文字に依つて傳へらるるものである。喜樂は性來の人間として鈍根劣機至愚至癡到底教祖の心言行を述べむとするは、甚だ僭越の至りである。併し乍ら其一小部分にもせよ、教祖の實行された心言を傳へておかなくては、あたら教祖の心言を土中に埋没する如きものであるから、茲に教祖が冠島に始めて神命を奉じて御渡りになつた事實の大要を述べて見やうと思ふ。

世必ず非常の人あつて、而して後非常の事あり、非常の事ありて而して後に非常の功ありと司馬相丞が言つた。自分が茲に口述する出口直子も亦非常の人たるを信ずる。否貴き神の代表者たるを堅く信じて、茲に其一端を物語らむとするのである。

日清戦役の後獨逸が膠州灣を占領し、露國が旅順大連を租借した行動は甚だ列強國の精神を刺激し、各其均霑を希望する結果、英國は威海衛を、佛國は廣州灣を各占領し、露國が鐵道布設權を滿洲に得たるに倣ひ、争つて鐵道布設權を清國各地方に獲得せむとし、各自に所謂勢力範圍を策定し、陰然支那分割の狀勢を馴

致し、東洋の危機正に此時より甚だしきはなしと思はれた。加之義和團と稱する時勢の大勢を知らざる忠臣義士の一團、これを憤慨すること甚しく、遂に興清滅洋の旗幟を翻して、山東省の各地に蜂起し、所在キリスト教徒を虐殺し鐵道を破壊し、明治三十三年四月初旬、進んで直隸省に入り、忽ち清國の宗室端郡王を擁し、將軍董福祥を中堅とし、五月以來勢益す猩獺をきはめ、六月に及んで北京は全く重圍の中に陥り、獨逸公使ケツトレル先づ慘殺せられ、我公使館書記生杉山某又殺害せられた。日本を始め列國は遂に獨逸元帥ワルデルデーを總指揮官となし、聯合軍を組織して、太估より竝進し、將に北京の團匪に迫らむとする間際であつた。

開闢以來未曾有の世界の力比べともいふべき晴れの戦争である。此檜舞臺に立つて、神國神軍の武勇を現し、列國の侮りを防ぐ必要があるとの御神勅で、教祖は六十五才の老軀を起して、昔から女人の渡つたことのない丹後沖の無人島、冠島俗に大島へ、東洋平和の爲、皇軍大勝利の祈願をなさむと、陰曆の六月八日を以て、上田會長、出口澄子、四方平藏、木下慶太郎の四人を引連れ、五里半の路

程を徒歩して、黄昏頃舞鶴の船問屋、大丹生屋に着し、渡島の船頭を雇ひ、これから愈漕ぎ出さうとする時しも、今まで快晴にして極穩かであつた青空が俄にかき曇り、満天墨を流した如く風は海面をふきつけ、波浪の猛り狂ふ聲、刻々に激しく聞えて來た。大丹生屋の主人は、

「此天候は確に颶風の襲來なれば、今晚の舟出は見合はしませう。まして海上十里の荒い沖中の一つ島へ、こんな小さい釣舟にては到底安全に渡ることは出来ませぬ、一つ違へば、可惜貴重の生命を捨てねばならぬ、明日の夜明を待つて、天候を見きわめ、これで大丈夫といふことがきまつてから御参りなさい」

としきりにとどめる。又舟人も異口同音に、到底海上の安全に渡り得可からざること主張して、舟を出さうとは言はぬのみか、一人減り二人減り、コソコソとどこかへ逃げて行つて了うのであつた。教祖は、

教祖「神様の御命令だから、そんなことを言つて一時の間も猶豫することは出来ませぬ。是が非でも今から舟を拵へて出て貰ひたい。今晚海のあるのは龍宮様が私等の一行を、喜び勇んでお迎へに來て下さる爲に、荒い風が吹いたり、雨が

降つたりするのだ。浪の高いのは當然だ。船頭サン、大丈夫だ、神さまがついて御座るから、少しも恐れず、早く舟を漕ぎ出して下さい。博奕ヶ崎迄漕いで行けば、屹度風はなぎ、雨はやみ、波も静まります。天下危急の場合だから、一刻も躊躇することは出来ぬ。死ぬるのも生るのも皆神様の思召によるものだ。神様が死なそまいと思召すなら、どんなことがあつても死ぬものぢやない、信仰のない者は一寸したことに恐れるものだ、が今度は大丈夫だから、是非々々行つておくれ」

と雄健びして船頭の主人の言葉を聞き入れる氣色もなかつた。大丹生屋の主人を始め、一同の舟人等は小さい聲で、

「金もほしいが命が大事だ。こんな氣違ひ婆アさんの命知らずの馬鹿者に相手になつて居つては堪らぬ」

と嘲笑的に囁き、只の一人も應ずるものが無い。一行五人は如何ともすること能はず、只管一時も早く出舟の都合をつけて下さいと橋の上に合掌して祈りつつあつた。木下は操舟に鍛練の聞えある漁師、田中岩吉、橋本六藏の二人を甘く説き

つけて歸り來り、

「只今より冠島へ連れて行ってくれ」

と改めて頼み込むと、二人は目を丸うして、

「なんぼ神さまの命令でも此空では行けませぬ。私等も永らくの間、舟の中を家

のやうに思ひ、海上生活をやって居ります故、大抵の荒れならこぎ出して見ます

が、此氣色では到底駄目です。一體あんた等は何處の人ぢや本當に無茶な人です

なア」

と呆れて一行の顔を見つめて居る。教祖は切りに促し、

教祖「早く早く」

と急ぎ立てられる。船頭は返事をせぬ。かくては果じと、二人の船頭に向つて、

「海上一町でも半里でもよいから、冠島までの賃金を拂ふから、マア中途から歸

る積りで往つてくれ」

と木下が云つた。二人の船頭は、

「お前さまたちが、そこまで強いて仰しやるのならば、キツと神様の教でありま

せう、確信がなければ、到底此氣色に行くといふ氣にはなれますまい。私も一寸冠島さまに伺つてみて決心します」

といひ乍ら、新橋の上に立つて、冠島の方に向ひ合掌祈願しつつ、俄作りのみくじを引いて見て、

「ヤツパリ神様は行けとありますから、兔も角行ける所まで漕ぎつけて見ませう」と半安半危の氣味で承諾の意を洩らしつつ、早速用意を整へ五人を乗せて潔く舞鶴港を後にして、屋根無し小舟を操り、雨風の中を事もせず、自他七人の生靈を乗せ、舟唄高く漕ぎ出した。

海上二里許り漕ぎ出たと思ふ頃、教祖のさして居られた蝙蝠傘が如何した機みか、俄に波にさらはれ取おとされたと見る間に、舳に立つて艫を操つてみた、舟人の岩吉が目ざとく見とめて、拾ひ上げた。時しも舟底に肱を枕にして、ウツウ

ツ眠つて居た澄子は忽ち目を醒まし、

澄子「ア、吃驚した、今平藏サンが、誤つて海中に陥り、命危い所へ教祖さまのうしろの方から、威容凜然たる神様が現れて、平藏サンを救ひ上げ、息を口から

吹き込んで蘇生せしめられたと思へば、ヤツパリ夢であつたか」

と不思議相に語り出す。一行一層異様の思ひを爲し、教祖の持つてこられた蝙蝠傘をよくよく調べて見れば、正しく平藏サンの傘であつた。至仁至愛の大神は、教祖さまをして身代りの爲に、平藏氏の傘を海におとさしめて、其危難を救ひ、罪を浄め、新しい人間と生れ變はらして下さつたのでせう……と各自に感歎し乍ら、狭い舟の中に静座し、膝をつき合せ乍ら、一同が謝恩の祝詞を奏しつつ、勇み進んで、雨中を漕ぎ出した。

こんなことを述べ立てると、信仰なき人は、或は狂妄といひ迷信と誹り、偶然の暗合と笑ふであらう。神異靈怪なるものの世にあるべき道理はないと一笑に附して顧みないであらう。さり乍ら天地の間は、すべて摩訶不思議なものであることは、本居宣長の玉銚百首にもよまれた通りである。

あやしきを非じといふは世の中の
怪しき知らぬしれ心かも

しらゆべきものならなくに世の中の
くしき理神ならずして

右の歌の意の如く、天地間は凡て奇怪にして人心小智の伺ひ知るべき限りでは
ない。然るに中古より聖人などいふ者出て来りてより、怪力亂神を語らずとか、
正法に不思議なしとか悟り顔に屁理屈を振りまはしてより、世人の心は漸次無神
論に傾き、神靈靈怪を無視し、宇宙の眞理を得悟らざるに至り、至尊至貴萬邦無
比の神國を知らざるに立到つたのである。又玉銚百首に、

からたまのさかしら心うつりてぞ

世人の心悪しくなりぬる

しるべしと醜の物知りなかなかに

よこさの道に人まどわすも

とよまれてあるのも實に尤もな次第である。却説舟人の一生懸命にこぐ舟は早くも博奕ヶ岬についた。教祖の言あげせられた如く、ここ迄來ると、雨は俄に晴れ、風はなぎ波は静まつて、満天の星の光は海の底深く宿つて、波紋銀色を彩どり、雲の上も海の底も合せ鏡の如く、昔の男の子の、

棹はうがつ波の上の月を、

波はおそふ海の中の舟を

を思ひうかべ實に壯快の氣分に打たれた。

影見れば浪のそこなる久方の

空こぎわたる我ぞわびしき

といふ紀貫之の歌まで思ひ出され、一しほ感興深く進む折しも、ボーツと海のあ

なたに黒い影が月を遮つた。舟人は、

「あゝ冠島さまが見えました」

と叫んだ時の一同の嬉しさは、沖の鷗のそれならで、飛立つ許り、龍神が天に昇るの時を得たる喜びも斯くやあらむと思はれ、得も言はれぬ爽快の念にうたれた。暫くあつて東の空は燦然として茜さし、若狭の山の上より、黄金の玉をかけたたる如く、天津日の神は豊榮昇りに輝き玉ひ、早くも冠島は手に取る許り、目の前に塞がり、囀る百鳥の聲は百千萬の樂隊の一齊に樂を奏したるかと思はる計りであつた。かの昔語にとく所の浦島子が龜に乗つて、龍宮に往き、乙姫様に玉手箱を授かつて持ち歸つたと傳ふる龍宮島も、安部の童子丸がいろいの神寶や妙術を授けられたといふ龍宮島も亦、古事記などに記載せられたる彦火々出見命が鹽土の翁に教へられて、海に落ちたる釣針を捜し出さむと渡りましたる海神の宮も皆此冠島なりと云ひ傳ふる丈あつて、どこともなく、神仙の境に進み入つたる思ひが浮かんで來た。

正像末和讚にも

末法五濁の有情の行證叶はぬ時なれば、釋迦の遺法悉く龍宮に入り玉ひにき。

正像末の三時には彌陀の本願廣まれり、澆季末法の此世には諸善龍宮に入り玉

ふ

とあるを見れば佛敎家も亦非常に龍宮を有難がつて居るらしい、かかる目出たき蓬萊島へ恙なく舟は着いた。

翠樹鬱蒼たる華表の傍、老松特に秀でて雲梯の如く幹のまわり三丈にも餘る名

木の桑の木は冠島山の頂に立ち聳え、幾十萬の諸鳥の聲は敎祖の一行を歡迎する

が如くに思はれた。實に龍宮の名に負ふ山海明媚、風光絶佳の勝地である。敎祖

は上陸早々、波打際に御襖された。一同も之に倣うて御襖をなし、神威赫々たる

老人島神社の神前に靜かに進みて、蹲踞敬拜し、綾部より調理し來れる、山の物

川の魚うまし物くさぐさを獻り、治國平天下安民の祈願をこらす、祝詞の聲は九

天に達し、拍手の聲は六合を清むる思ひがあつた。これにて先づ冠島詣での目的

は達し、歸路は波もしづかに九日の夕方、舞鶴港の大丹生屋に立歸り、翌十日又

もや徒歩にて、數多の信者に迎へられ、目出度く綾部本宮に歸ることを得たので

ある。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一〇・一七 舊八・二七 松村眞澄録)

第一四章 沓島(一〇五一)

丹後の舞鶴からも若狭の小濱からも、縞の財布が空になると云ふ宮津からも、
丁度十里あると云ふ沖中の一ツ島で、昔から「男は一生に必ず一度は參れ、二度
は參るな、女は絶対に禁制萬一女が參拜しやうものなら、龍宮の乙姫さまの怒り
に觸れて海上が荒れ出し、いろいろの妖怪が出たり大蛇が澤山現はれて女を丸呑
みにする、さうして子孫の代迄神罰を蒙る」と云ふ古來の傳説と迷信とを打破し
て、教祖の一行は恙なく明治三十三年舊六月八日冠島參拜を遂げ、今度更に古來
人跡なき神聖なる沓島へ渡つて、天神地祇を初め奉り、生神良の鬼門大金神を奉
祀して天下の泰平や皇軍の大勝利を祈願せむと、陰曆七月八日再び本宮を出立、

一行九人は前回同様大丹生屋で船を雇ひ、穩かな海面を迂り乍ら沓島に向つて漕ぎ出した。

埠頭の萬燈は海水に映じて其色赤く麗しく、港門の潮水は綠色をなし、海灣浪靜にして磨ける鏡の如く、百鳥群がり飛んで磯端靜に、青松濱頭に列なり梢を垂れ得も言はれぬ月夜の景色を眺めつつ、午後八時半二隻の小舟に乗り、舟人は前回の如く橋本六藏、田中岩吉の二名これに當り聲も涼しく船唄を唄ひ乍ら悠々として漕ぎ出した。満天梨地色に星輝き、波至つて平穩に、恰も海面は油を流した如く、星が映つてキラキラと光つて居る。海月が浮いて行くの迄が判然と見える。銀砂を敷いた上に居る様な心持がして極めて安全な航海である。博奕ヶ岬迄行つた頃は、八日の半絃の月は海の彼方に西渡き經ヶ岬の燈臺は明々滅々浪のまにまに漂ふて見える。頭の上にも足の下にも、銀河が横つて其眞中を敏鎌の様に冴えた月が靜かに流れて、海の果で合するかと疑はれるばかりであつた。舟人の話によれば、

茲三年や五年に今夜位靜穩な海上はない。大方冠島沓島の神様の御守護であり

ませう。ほんに有り難い、勿體ない」

と喜び勇み乍ら、赤い褌を締め眞裸となつて節面白く船唄を唄ひ出した。

萬波洋々たる海の彼方には、幾百の漁火が波上に浮み、甲艇乙舸競ふて海魚を

漁りする壯丁の聲は波の音を掠めて高く聞えて来る。此漁火を打見やれば、恰も

海上のイルミネーションを見る様である。舟は容赦なく東北さして漕ぎ出された。

二三の釣舟が二三丁ばかり傍に通るかかると、二人の船頭は大聲で呼びとめる。

船頭同志は互に分け隔てなき間柄とて、極めて亂雑な挨拶振り、初めて聞いたも

のは喧嘩ではないかと疑ふばかりである。此釣舟で一尺二三寸ばかりの鯖を二十

尾ばかり買ひ求めて、冠島沓島への供へ物とした。東の空はソロソロと明くなり

出した。舟人は褌一つになつて、汗をタラタラ流しつつ力の極み、根限り漕ぎつ

ける。午前八時半無事に冠島の磯際についた。「まあ一安心だ」と上陸し、神前

に向つて教祖以下八人は天津祝詞を奏上し終つて、木下慶太郎、福林安之助、四

方祐助、中村竹藏の四名を冠島に残しおき、神社境内の掃除を命じおき、歸途に

改めて参拜する事とし教祖を始め出口海潮、出口澄子、四方平藏、福島寅之助の

五人は直に沓島に向つて出發する。福島寅之助は冠島から沓島へ行く間の巨浪に肝を潰し、舟底に喰ひつき時々發動氣味になつて唸つて居る。それきり同人はコリコリしたと見え沓島へは再び參らないと云つて居た。

さて冠島に残された連中が一尺以上も堆高く積つて居る庭一面の鳥糞を掻き浚へ、お庭を清める、枯木や朽葉を集めて社の傍の林の中に掃き寄せる等、大活動をやつて居た。忽ち中村竹藏が激烈な腹痛を起し七顛八倒する。全く神罰が當つたのだと一同は恐れ入つて謝罪をなし、塵芥を一層遠き林の中へ持ち運んだ。神明聽許遊ばしたか、俄に痛みも止まつたので頑固一邊の中村も、其神徳に感激した様であつた。教祖の一行は漸くにして沓島に漕ぎついた。流石に昔から人の恐れて近づき得ない神島だけありて、冠島とは大變に趣が違ふてゐる。今日は格別穩かな海だと云ふに拘はらず、山の如きウネリが頻りに打ち寄せて來る。鷗や信天翁、鵜などが岩一面に胡麻を振りかけた様に止まつて、不思議相に一行を見下ろして居る。波の上には數萬の海鳥が浮きつ沈みつ、悠悠と遊んでゐる。音に名高き斷岩絶壁、小舟を漕ぎ寄せる場所が見つかからぬ。兔も角も此島を一周して適

當な上陸點を探らうと評定して居ると、教祖が是非に釣鐘岩へ舟を着けよと云はれる。命のまにまに釣鐘岩の直下へ漕ぎつけて見ると、恰も人の背中の如く險峻な斷岩で如何しても掻きつく事が出来ない。愚圖々々してゐると、激浪のために舟を岩に衝突させ、破壊して了ふ虞があるから、瞬時も躊躇してをる場合でない。海潮は「地獄の上の一足飛び」と云ふ様な肝を放り出して腰に八尋繩を結びつきたまま、舟が波にうたれて岩に近づいた一刹那を睨ひすまして、岩壁目蒐けて飛びついた。幸にも粗質な岩で手足が滑らぬ、一丈四五尺程の上の方に少しばかりの平面な處がある。そこから舟を目蒐けて繩の片端を投げ込めば、舟人が手早く拾ふて舟に結びつける。最早大丈夫だと岩上からは上田の海潮が一生懸命に繩を手繰り寄せる。下からは眞正の海潮が教祖を乗せた舟を目がけて押し寄せ、來るや來るや母曾呂々々に持ち渡す。教祖は手早く繩に縋り乍ら漸く上陸された。續いて三人も登つて來た。綾部で組み立てて持つて來た神祠をといて、柱一本づつ舟人が繩で縛る、四方と福島がひきあげる。漸く百尺ばかりもある高所の二疊敷ほどの平面の岩の上を鎮祭所となし、一時間あまりもかかつて漸く神祠を建て

あげ、艮の大金山神國常立尊、龍宮の乙姫、豊玉姫神、玉依姫神を始め、天地八
萬の神等を奉齋し、山野河海の珍物を供へ終り、教祖は恭しく祠前に静座して聲
音朗かに天下泰平神軍大勝利の祈願の祝詞を奏上される。
話は一寸後前になつたが、第一着に海潮が遷座式の祝詞を恐み恐み白し上げ、
最後に一同打揃ふて大袂の祝詞を奏上した。島の群鳥は祝詞を拜聴するものの如
くである。何分北は露西亞の浦鹽斯德港迄つつ放しの島であるから、日本海の激
浪怒濤は皆此沓島の釣鐘岩に打かるので一面に洗ひ去られて、此方面は岩ばかり
で土の氣は見たいと思ふても見當らなかつた。沖の方から時々寄せ來る山の様に
大きな浪が此釣鐘岩に衝突して、百雷の一時に鳴り響く様に、ゴンゴン ドドン
ドドンと烈しき音が耳を刺戟する。舟人は今日は數年來に見た事のない穩かの波
だと云つた浪でさへも、これ位の音がするのだもの、海の荒れた日にはどんなに
烈しからうと思へば、凄じ様な心持がして來た。船人の語る所によれば此釣鐘岩
には、文祿年間に三種四郎左衛門と云ふ男、數百人の部下を引率れ冠島を策源地
として陣屋を構へ、時の天下を横領せむと軍資金を集むるために海上往來の船舶

を掠め海賊を稼いで、此岩の頂上に半鐘を釣り斥候の合圖をし冠島との連絡をとつて居たので、被害者は數ふるに暇なき迄續出したので、武勇の譽高き豪傑岩見重太郎がこれを聞いて捨ておけぬと計略を以て呉服屋に化け、一人一人舞鶴へ引寄せ牢獄に打ち込み、悉皆退治したと傳ふる有名な島で、其後は釣鐘島、鬼門島と稱し、誰も此沓島へは來たものはないと云つてゐた。然るに今回初めて教祖が世界萬民のために、百難を排して渡り來られ、神々様を奉祀し、天下無事の祈祷をされたのは實に前代未聞の壯舉であると云ふので、東京の富士新聞や福知山の三丹新聞を始め其他の諸新聞に連載された事がある。

さて此島を一周りして、奇岩絶壁を嘆賞しつつ冠島へ再び舟を漕ぎ寄せ、一行九人打揃ふて神前に拜禮し、供物を獻じ終つて又此冠島も一周する事となつた。周圍四十有餘丁あり、世界の所在草木の種子は皆此島に集まつてあると云はれてある。昔は陸稻も自然に出來てゐたのを、大浦村の百姓が肥料を施して汚したので、其後は稻は一株も出來なくなり、雜草が密生する様になつたのだと二人が話しつつ覗き岩迄漕ぎつけて見れば、數十丈の岩石に自然の隧道が穿たれてある。

屏風を立てた様な岩や書籍を積み重ねた様な岩立ち並び、龍飛び虎馳る如き不思議の岩が海中に立つてゐる。少しく舟を西北へ進めると、一望肝を消すの断崖、一瞻胸を轟かすの碧潮に鯛魚の群をなして縦に泳ぎ、緯に潛み、翠紅、色交々亂れて恰も錦綾の如く、感賞久しうして歸る事を忘れるに至る。此處に暫く遊んでゐると、十年も壽命がのびる様である。世の俗塵一切を拂拭し去つた様な觀念が胸に湧いて來る。兔に角男女を問はず信徒たるものは一度は是非參詣すべき處である。

九日の夕方、恙なく舞鶴へ歸着し翌十日舞鶴京口町で一行記念の撮影をなし、目出度本宮へ歸る事となつた。

(大正一一・一〇・一七 舊八・二七 北村隆光録)

第一五章

怒濤(一〇五二)

教祖や會長に反對の連中がヒソビソと首を集めて、冠島丈は幸ひに教祖の一行五人が無事に參つて來よつたが、到底沓島へは教祖のやうな婆アさまが行けるものでない、キツと神の怒にふれて、舟が轉覆し、海の藻屑になつて了ふか、但は不成功に了つて中途から引返して歸るに相違ないと夕力をくくつて嘲笑を逞しうしてゐた所が、見事今回又もや沓島開きが出来たといふ成功談を聞き、負ぬ氣になり、^{ナニ}教祖のやうな婆アさまや娘が行く所へ行けないといふ事があるものか^と、二十人の頑固連中が沓島參拜を企て、大暴風雨に遭ふて命カラガラ、冠島に辛うじて避難し、一命を拾うた物語を述べておく。

對岸の清國では團匪の騷亂で、各國の政府が居留民保護の爲に聯合軍を組織して北京城へ進軍中であつた。茲に出口の教祖は東洋の前途を氣づかひ、神命のまにまに、二度までも無人島へ渡り、冒險的の企圖をこらして、艱難辛苦を嘗め玉ふにも拘はらず、足立其他の役員に誑惑された信徒等は、利己一片に傾き、おのれが卑劣心より口々に、今回の教祖一行の冒險的渡海を非難し、好奇心にかられたり、一方には信者集めの手段を講じたものだなどと、盛に熱罵を逞しうしてゐ

る者のみである。判事ハリバーの言に曰く「權威のある所には自然に不從順の傾向あり」と。宜なる哉、近來教祖及上田の名聲の漸く大ならむとするを嫉妬し、いろいろと排斥妨害運動に餘念なき連中が二度までも孤島に參拜の成功に益々嫉視反抗の氣勢を高め、今度は是非共會長を案内者として沓島へつれ行き、鐘岩の斷岩へ登り、いろいろとよからぬ望みを遂げむと、某々等數名は鳩首謀議の結果、今一度勝手を知つた會長に同行參拜せむ事を強請して止まなかつた。萬一にも否まうものなら、卑怯者と誹るであらう、今まで、屢彼等が奸計に乗せられ、九死一生の難に遭遇したる記憶の新なる一身上に取つては、恰も狼虎の道づれも同様である。何時間隙があつたら、咬殺されるやら計り知られぬ危険極まる島詣であつた。然し乍ら敵を恐れて旗を捲くのも、神の道を宣傳する者の本意でない、と、確く決心し、日夜沐浴齋戒心身を清め、神の加護と教祖の御神徳に倚信して、彼等と共に出舟參拜する事を承諾した。

萬一を慮つて平素熱心なる信者、竹原房太郎、木下慶太郎、森津由松、福林安之助、時田、四方安藏、甚之丞等の面々を引つれ、心の合はない敵味方合せて甘

いちめい 一名は明治三十三年七月二十日をトし、いよいよ決行することとなつた。

にじふいちにち 二十一日の未明、四隻の漁舟は罪重き一行を乗せて、舞鶴港を漕ぎ出し、海上

しちりばか 七里許り、冠島は手に取るやうに近く見えて来た。モウ一息といふ所で俄に東の

そら 空が變な色になつて来た。四人の船人はあわてふためき、口を揃へて、

「サア皆サン、覺悟をなされ大變なことになつて来た。あの雲の様子では大颯風

だ」と叫んでゐる。見る間に東北の空に眞黒の妖雲がムラムラと湧きだした。追々風

が荒くなつたと思ふ間もなく、颯風襲來、潮を蹴り飛ばし、波濤怒り狂ひ、勃乎

たる海風の聲は轟々と、南に北に東に西に猛び廻る。騷然たる聲裡、山嶽のやう

な波、堅乎たる巖のやうな波浪が来る、其物凄きこと筆舌の盡す限りではなかつ

た。小舟を木の葉の如くに中天にまき上げるかと思れば、直に千仞の波の谷間に

つき落し、無遠慮に舟玉の神の目も恐れず、勝手氣儘に奔弄し出した。波と波と

の間にかくれた一行の舟は、どうなつて了つたか、其影さへも見ることが出来ぬ

ので、互に胸を轟かしつつあつた。恰も地獄の旅行をしてゐるやうで、何れも青

い

息吐息の爲體、蛭に鹽、猫に出合ふた鼠の如く、舟底にかざりついて縮かんでゐる。誰もかれもウンともスンとも得言はぬ弱り方、中にも松井元利といふ京都の信者は、因果を定めたか、生死の外に超然として動ぜざること岩石の如く、頭から潮を浴び乍ら、泰然自若として只天の一方のみを眺めて居る。時田金太郎が小便のタンクが破裂し相なと云つて、激浪目がけてコワゴワ乍ら放尿する。舟人が……そんな大男が立つては危険だ……と喧しく叱りつけるやうに叫ぶ。それに引替へ、臆病風に襲はれた中村は震ひ戦き、始めて口を開き、
中村「會長さん、一體どうなりますぢやいなア、今あなたの頭の上の所に大きな海坊主がいやらしい顔で、長い舌を出して、私をつかんで海へ投込むやうな手つきをし乍ら……それ今其處に睨んで居りますわいな、どうぞ坊主をいなして下され、あゝ小便がしたくて堪らぬ、どうしたらよからうか」
と周章狼狽のさま實に見るも氣の毒であつた。小便がこらへきれなくなつたので、とうとう自分の飯碗の中へ放尿して、それを海へコワゴワ投げ込んでゐる。中村は驚愕の餘り弱腰が抜けたと見えて、チツとも身動きが出来なくなつてゐたので

ある。

烈然たる颶風はよく千里の境域に達し、猛然たる旋風は萬里の高きに依つて廻るかと怪しまれ、龍ならずして龍吟じ、虎ならずして虎嘯く如き光景である。一波忽ち來りて漁舟に咬つく、其度毎に潮水を澤山において行く、又次の一波のお見舞迄にと、一同が力限り命が惜さに、平常にはこけた箒も口々に起さぬやうな不精男が桶や茶碗や杓などで、一生懸命に潮水をかへ出してゐる、又一波來つて、潮水を頭といはず、背中といはず、無遠慮に浴びせて通る、忙しさ恐ろしさ、到底口で言ふやうな事ではない。

會長は一生懸命に天津祝詞を奏上し始めた。天の助けか地の救ひか、少し許り風がやわらいで來た。従つて波も稍低くなつた。此一刹那に、舟人は手早く四隻の舟を二ヶ所へ漕ぎ寄せて、二隻づつからくんでみた、かうすれば舟の覆没を免れるからである。……サア是で一安心だと思ふ間もなく、今度は一層激烈な大颶風の襲來となつた。

雨は沛然として盆を覆すが如く、車軸を流すが如く、手きびしく頭の上から叩

きつけるやうに降つて来る。漂渺として際限なき海原も今は咫尺辨ぜざる迄に暗黒に包まれた。怒れる浪は揉つもまれつ、荒磯の岩をも粉碎せずんばやまぬ猛勢である。白き鬣を振ふて立てる浪は眞一文字に舟に組みつく、其度毎に小舟がグラつき轉覆せむとする危さ、かくある以上は、平素から教祖を非難してゐた連中も、會長を嫉視してゐた小人もチウの聲一つ得上げず、震ひ戦き、今は只神に依り、教祖に従ひ、會長に依頼して、命の安全を計るより外途なきに至つたのである。

人間といふものは斯うなつては實に弱い者である。神のおいましめを蒙つたと各自が思ふたのか、腹の中に企んでゐたごもくたを悉皆吐き出して前非を悔悟する、誰も彼も叶はぬ時の神頼みといふ調子で、一心頂禮口々に神文を唱へ、神にお詫を申してゐる。村上清次郎といふ男は天から四十三本の御幣が吾舟にお下りになつて、吾等を保護して下さるのが拜めますから、私は有難い事だと思ふて安心してゐます……と嬉し相に感謝してゐる。これは信仰の力に依つて、目ざめ、神のお守りあることを天眼通で見せて貰ふたものである。森津歌吉は何ともか

も得言はず、目をむき口を閉ぢて、波許り恐ろし相にながめ、時々扇子を以て波を片方へ押のけるやうな氣取で、妙な手附をして拜んでゐる。舟に酔ひ、泡をば福林安之助が八百屋店をたぐり上げ苦しんでゐる。會長は聖地を出立の際、教祖より、

教祖「今度は餘程神さまを頼んで氣をつけて參らぬと、先日の參拜のやうに樂に行きませぬぞや、罪の塊計りだから、萬々一危急の場合、命に關するやうなことのあつた時には、之を開いて見るがよい……」

と密封した筆先をお授けになつたのを、大切に肌の守りとしてつけてゐたが、披見するは今此時だと、懷中より取出し、押しいただいて披いて見れば、中には平假名計りで、何事かが記されてある。其筆先の大要は、

「艮の金神が出口の手をかつて氣をつけるぞよ、慢心は大怪我の元ぢやぞよと毎度筆先で知らしてあるが、今の人民は知恵と學計りにこり固まり、途中の鼻高になりて、神の教を聞く精神の者がなきやうになりて、天地の御恩といふことを知らぬ故、世の中に惡魔がはびこり、世が紊れる計りで、此地の上がむさ苦くて、

神の住居いたす所がないやうになりたので、誠の元の活神は此沓島冠島に集まり
て御座るぞよ、それ故に餘程身魂の研けた者でない、此島へは寄せつけぬぞよ、
此曇りた世を水晶にすまして、元の神國に立直さねばならぬ大望がある故に明治
廿五年から、神は出口の手をかり、口をかりて、いろいろと苦勞をさして、世間
へ知らせてゐるなれど、餘り世におちぶれて居る出口直に御用をさす事であるか
ら、今の人民は誠に致す者がないぞよ、人民は此結構なお土の上に家倉を建て青
疊の上で、安心に月日を送らして貰ひ乍ら、天地の御恩を知らぬ計りか、神は此
世になきものぢやと思ふて居るものがちであるから、神の守護がうすかりたなれ
ど、人間は神がかまはねば、一息の間も生て居る事は出けぬぞよ、人間の此世を
渡るのは、丁度今此小舟に乗り、荒い海を、風と波にもまれて渡るよなものであ
る、誠に人の身の上ほど危いはないものはない、もし此舟に一人の舟人と艫櫂
がなかりたならば、直に行きも戻りもならぬよになり、舟を碎くか、ひつくり返
るか、人も舟も海の藻屑とならねばなるまい、人民も神の御守護なき時は少時も
此世に居ることは出来ぬ、此世の中は、人を渡す舟のようなもので、神の教は艫

權である、出口直は此舟を操る舟人のよな者である。今の困難を腹わたにしみ込
ませて、いつ迄も忘る事なく、神さまの恵を悟つて信心を怠るなよ、何事も皆
信心の力によつて、成就するのであるから、神の御子と生れ出でたる人民は、チ
ツとの間も神を離れるな、道をかへるな、欲に惑うな、誠一つで神の教に従へ、
災多き暗がりの世は誠の活神より外にたよりとなり力となる者はないぞよ云々
』
といふ懇切なる神示であつた。あゝ神は吾等一行の我慢を戒め、邪念を拂ひて、
誠の道に導き至幸至福ならしめむが爲に、此荒き海原へ連れ出し、かくも懇切な
る教訓を垂れさせ玉ひしかと、悪鬼邪神の如き連中も、ここに始めて神の厚恩を
悟り、教祖の非凡なる神人たるに舌をまくのみであつた。

又其筆先の終りの所に一段と細い字を以て、

『上田の持ちて居る巻物は、此際披き見よ』

と示されてあつた。此巻物は本田親徳先生より、長澤豊子の手を通じて授けられ
たる無二の寶典である。片時も肌を離さず、危急存亡の場合、神のお許しあるま
で、決して開くなとの教を確守し、今迄大切に肌の守りにしてゐたのであるが、

今や一行の精靈を救はねばならぬ場合に當り、始めて開く玉手箱、何が記してあるかと、恐る恐る押頂き伏し拜み、披き見れば……

尊きかも、畏きかも、救世の神法、靈學の大本と數十百に亘る神業、其大要は喜樂が高熊山の靈山にて見聞したる事實と符合し、神祕に屬し、他言を許されぬもののみであつた。會長は此一巻に納めたる、神法を實行する時機正に到來したりと、天にも昇るが如く勇み立ち、心鏡正に玲瓏たり、百折撓まず屈せず、暴風強雨何者ぞ、水火何者ぞ、滿腔の精神は益々颯風と戦ひ、言靈の神力を以て、どこまでも之に打克たむとの勢頓に加はり來る、欲を離れ、利をはなれ、家を離れ、自己を離れ、社會を離れて只神あるのみ、全く神の御懷に抱かれある身は、如何なる事も恐るるに及ばず、大丈夫大安心なり、怒れよ狂瀾、躍れよ波濤、吹けよ強風、荒べよ暴風、汝の怒りは雄大なり、壯烈なり、我は今汝の怒りに依つて生ける誠の神の教を受けたり、今の會長は以前の會長に非ず、今は全く神の生宮となれり。暴風強雨來れと、十曜の紋の記されし、神官扇を差上げて、天の御柱の神、國の御柱の神、天の水分神、國の水分神、大和田津見神靜まり玉へ……と宣

る言靈に、不思議や風やみ雨やみ波従つて静まりぬ。舟人はおどろいて、

「先生は神さままで御座いませう」

と舌をまいて感嘆してゐる。抑も我國は神の御國なれば、惟神の道と稱し、幽玄微妙の神教あり、神力無限の言靈あり、實に尊き天國淨土である。舟は漸くにして冠島へ避難する事を得た。第一着に老人島神社に供物を獻じ救命謝恩の祝詞を奏上し、次いで綾部本宮を遙拜し、一行の罪重き者の沓島參拜は到底神慮に叶はざるべしと再び歸路の安全を祈りつつ厚き神の守りの下に漸く舞鶴に歸着し一同茲に一泊することとなつた。

大丹生屋の二階の一間に横臥して所勞を休めてゐる、會長の枕許へ杉浦萬吉といふ男出で來り、手をつかへ、面に改悛の色を現はし、涙をハラハラと流し乍ら、杉浦「先生にお詫を致さねばならぬ事があります。申上ぐるのも畏きことなれど、實の所は吾々數名は相談の上、先生の懐にある巻物を預り、其上せむとをなし、本會の爲に雲霧を拂ひ清め、其後釜には四方春三サンを据ゑて、吾々が思惑を貫徹せむと欲し、其手段として先生に對し、沓島參拜を無理に御願したの

で御座います、乍併神様の厳しきおさばきにより、命辛々の目に會ふたのは、全く神さまより吾々に改心せよとの御戒めで御座いませう、何うぞ自分等の罪を赦して下さいませ』

と平身低頭して聞くも恐ろしい物語をするのであつた。會長は前日より略探知して、今更餘り驚きもなさず、笑うてこれを許した。暫くあつて綾部の本部より教祖の命令によつて四方平藏が四方春三を伴ひ、沓島行きの一を行を迎ひに來り、一同の無事を祝し、冥土の旅から歸つたやうに小をどりして喜んだ。四方春三も杉浦の改悟を聞いて包むに包みきれず、陰謀を逐一自白し、四方『あゝ私の心には悪神が潜んでゐたのでせう、これからキツと改心致します』と眞心から涙を流して有體に謝罪するのを見ると、却つて可哀相になつて來た。雨降つて地固まるとやら、今度の遭難にて誰も彼れも一時に悔み改め、道の曙光を認めるやうになつたのも、全く神の深遠なる思召によることと、會長は益々其信念を鞏固ならしめた。

二十二日の夕方無事に館に歸り、神前に一同拜禮し各々家に歸つた。

第一六章 禁獵區(一〇五三)

梅雨朦朧として晝尚暗く、濕潤家に満ちて萬物黴花を生じ、山色空朦煙光霏々たる六月の二十一日、狹田も長田も手肱に水泡かき足り、向股に泥かきよせて早乙女の三々伍々隊を成し、蓑笠の甲冑を取よるひ、手覆脚絆の小手脛當、聲勇ましく田歌を歌ひつつ、國の富貴を植ゑて行く、狗の手も人の手てふ農家の激戦場裡、安閑坊喜樂、梅田柳月、大槻傳吉の三人の士倒し者は、今しも本院を立出でて、本町西町とふみ抜く道は狭くも廣小路、驅け出す馬場や六つの足、綾部停車場にと走せ付けた。往くは何處ぞ和知の川、音無瀨鐵橋音高く、梅雨を犯して梅迫驛、停車間もなく、眞倉の洞穴、小暗き中を吾物顔に轟々と脱け出づれば、山媛の青き御袖を振はえて、炭團の如き三人の顔を暫し掩はせ玉ふも、時に取つて

の風情である。車中乍ら心も勇み膽躍り、欣喜の餘り手も足も舞鶴驛に舞下り、新橋詰の船問屋西川方へと流れ込んだ。

折柄切りに降り注ぐ大粒の雨に膽を打たれたか、豫約の水夫は刻限來るも俤だに見せぬ。天道殿は罪重き三人の參島の企てをおぢやんにせむず御心にや、意地悪く間斷なく、無遠慮に天水分神を遣はせ玉ふ。何時迄待つても空が晴れさうにも無いが、雨は元より覺悟の前だ。併し肝腎の舟の神が御出にならぬのには大閉口、さりとして中途に歸るのは死んでも厭な三人、疊の上に居ても死ぬ時には死ぬ、生死は天なり、惟神なり、是非水夫を呼びにやつて下さいと促す。西川の後家サンも止むを得ず、田中、橋本二人を、人を以て呼寄せた。出口教祖が始めて沓島開きをなされた時に御供をした水夫である。數千の漁夫の中に最も剛膽な、熟練な聞えある選抜きの漁夫、これなら大丈夫、何時でも二つ返辭で往つて呉れるだらうと喜び勇んだ甲斐もなく、案に相違した弱音を吹くのである。

何ば信神で參拜るにしても、神様の御守護があるにしても、此氣色では鬼で無くて行けんで、マア二三日ゆるりと遊んで待つてお呉れ。天候が定まつたら、

お伴をさして貰はうかいの、明日は又冠島様の一年一度の御祭典で、今晚は冠島の明神が神船に乗つて、對岸の新井崎神社に御渡海になるので恐ろしい夜さだ。中々舟は出せぬので、若し神の御心にでも障つたら大變だ。桑名の龜造で無けら、今晚舟を出す者は無いわいの。臆病風に魅せられたか、一向色よい返事をしてくれぬ。三人は況して今夜の様な行けぬと云ふ日に行つて見たいのが希望だ。是非々々賃金は厭はぬ、やつてくれい……と泣く様に頼む。水夫は益々恐怖心に驅られ、ソロソロ卑怯にも逃げ歸らむとする。逃げられては堪らぬので、口々に宥めつ賺しつ、直往勇進斷々乎として行へば鬼神も之を避くとの教祖の神諭を楯に取りて動かぬ。互に押問答の果しもなく、遂には水夫も口をとぎて呆然として、只々謝絶一點張り、波に取られた沖の舟で、取付く島がない、吾等平時に於てこそ溫柔なること綿羊の如くなれ、目的遂行に對しては猛虎の如く、一向直進眼中風雨なく海洋なし、滿腔の勇氣は烈火の如く挺身突撃死を見る歸するが如き覺悟ありと雖も、如何せむ舟を操ることを知らない三人は、肝腎の機關士に見放されたが最後、神ならぬ石佛同様の身、

海上一寸も進航することが出来ぬのである。外の水夫も雇入れむにも、生憎一人も應ずる者が無い。とうとう根負して、

「そんなら明朝一時まで自分等は待つ事にせう、キツと雨も止み、快晴になるは請合の西瓜だ、吾々の出修には必ず天祐があるから安心して行つてお呉れ」
と口から出任せ、覺束なき豫言を二人は嘲笑ひ、自分等を馬鹿にした様な面付でシブシブ歸つて行く。

三人問屋の部屋でガツト蟲の様に小さく縮かんで寢に就いた。大方白川夜船でも漕いで居たであらう。一眠したと思ふ時分に、大丹生屋の門口を打叩き、

「お客さん晝の船頭が来た」

と叫んでゐる。……サア占た……と一度にはね起き、又も御意の變らぬ内と、直に支度に取かつた。

「船頭さん、天氣はゼロだらう」

とからかへば、

「イヤ氣色は大變よい様だが、往ける丈行つて見な判らぬ」

とまだ煮え切らぬ返事である。

時節到來港口を出たのは廿二日の正に午前二時であつた。ヤハリ空は曇り切つて星一つ青雲一片見當らぬが、米價のあがる糠雨が、ピリピリと怖相に一行の顔を嘗める位。例の南泊邊まで乗り出すと、火光海面を照らして疾走せる一隻の大汽船に行違つた。其動波の爲に吾小舟を自由自在に翻弄されたのは、實に癩にさわつて堪らぬ。暫くすると天は所々雨雲の衣を脱いで、蒼い雲の肌を現はし、點々明滅、天書現はるるも、連日の降雨で内海の部分は水が濁つて居るせいか、今夜は清き星が波に宿を借りて居らぬ。博奕ヶ崎も後に見て漕ぎ行く程に、東天紅を潮して遙の山頂より隆隆々朝暈を吐出し、冠島沓島は眼前に横はり、胸中闊然欣扑歡呼覺えず拍手神島を遙拜し、各自に感謝祈願の祝詞を奏上し奉る。海上は至極平穩で、縮緬の様な波が奇麗に流れて居る。水夫は汗水になつて力限り艫と舳とから漕ぎ付ける。小舟は矢を射る如く、鳥の翔つ如く冠島へ着いたのは恰度六時に五分前であつた。

何時でも片道に十時間以上十二時間はかかるものを、今回に限つて僅に四時間

足らずとは實に意外であつた。喜樂は得意満面に溢れて、
喜樂「罪の軽い安閑坊が參拜すると此通りだ、神様は公平無私で在らせられる」
と一人で調子に乗つて居る。冠装束いかめしく徐々神前に進み、供物を獻じ、祝
詞を奏し、拜禮了つて、恭しく社殿を罷りさがつた。記念の爲に自分は神前の丸
石を一個頂戴した。勿論交換の石を持參して居るのであるから、只頂戴したので
はない、今日は明神の祭日とて、前日から數名の氏子が社務所に入りして、境
内の掃除を行つて居る。

「早うから參詣でしたなア、マア一服なさい」

と座を譲る親切を厚く感謝しつつ、再海濱の船繫場に引返した。名木の冠鳥桑は
去年の夏、或者の爲に盜伐されて了つて影も止めず、僅に三尺許り周つた桑樹が
波打際に根こじに古自横たへられてある。實に憤慨に堪へぬ次第である。

「一昨年あたりから、横濱や神戸あたりから六七十人の團體がやつて来て、五六
十萬羽の鯖鳥を密獵したので、近頃は大變に鳥が減つて、漁獵に差支て皆の者が
困つとるわいの」

と水夫二人が悲しさうに物語りつつ、早くも沓島に向つて漕出した。

冠島沓島の中津神岩には數十羽の沖つ鳥、胸見る姿羽たたきも此れ宜しと流し

目に、一行の舟を見送つて居る。淺久里、棚の下の巖壁を面白く左手に眺めて、諸鳥の囀る聲は鐘の岩の眞下に漕ぎつけた。奇絶壯絶胸爲に清涼を覺ゆ。

去る明治三十四年、見渡せば山野は靉靄として花の香に匂ひ、淡糊を解いて流

したやうな春霞はパノラマの如き景色の配合を調和して、鳥は新緑の梢に謳ひ、

蝶は黄金の菜の花に舞うてゐる好時節、舞鶴の海は白波のゆるやかに轉び來つて、

遠きは黄に近きは白く、それが日光に反射して、水蒸氣の多い春の海を縁取つて、

得も言はれぬ絶景天下泰平の眞最中、出口教祖は三十五名の教弟を引連れられて、

此鐘岩の絶頂に登り立ち、丹後國宮川の上流、天岩戸の産水と龍宮館の眞清水を

汲み來られ、眼下の海原見かけて、恭しく撒布し玉ひ、祝して仰せらるるやう、

教祖「向後三年の後には必ず日露の開戦がある。其時は巨人の如き強大國と小兒

の如き小國とが、世界列國環視の下で、所謂晴れの場所、檜舞臺の上での腕比べ

の大戦争であるから、萬々一不幸にして、我國が不利の戦争に終るやうな事にな

つたら、それこそ大變、萬却末代日本帝國の頭が上らぬ。そこで國祖の神靈大に
之を憂慮し玉ひ、今此老軀をここに遣はし、世界平和の爲、日東帝國の國威宣揚
の爲祈願せさせ玉ふなり、あゝ良の大金神國常立尊よ、仰ぎ願はくは太平洋の如
く廣く、日本海の如く深き御庇護を我神國日本の上に降し玉ひて、此清けき産水
と美はしき眞清水の海洋を一周し、雲となり、雨となり、或は雪となり霰となつ
て、普く五大洲を潤はし、天下の曲靈を掃蕩し、汚穢を洗滌し、天國を地上に建
設し、豐葦原瑞穂國をして、眞の樂境となさしめ、黄金世界を現出せしめ玉へ
と滿腔の熱誠と信仰をこめ、天地も崩る許りの大音聲を振り上げて祈願されし
斷岩は即ち此れであると、喜樂の談を聞いた一行は、是非一度登岩して見たき一
念期せずしてムラムラと湧起し、矢も楯も堪らぬやうになつた。
水夫に頼んでカツカツにも舟を着けて貰ひ、かき登つて見ると、手足がワナワ
ナするやうな心地がして教祖の勇氣に充たせられて居られることを、今更のやう
に感歎せずには居られぬやうになつた。音に名高き彌勒菩薩は自然岩に巖然とし
て其英姿を顯はし、恰も巨人が豆の如き人間を眼下に睥睨して居るやうで、どこ

ともなく神聖不可犯の趣が拜まれる。遠く目を東北に放てば日本海の波浪は銀屏を連ねたるが如く、黄金の大塊東天に輝き、足下の海は翠絹の褥の如く、美絶壯絶快感譬ふるに物なし。歎賞久うして再舟に上り、鰐の巢突當岩を巡見するに、奇又奇、怪又怪、妙と手を拍ち、絶と叫び、精神恍惚として羽化登仙したるの思ひであつた。

舟は容赦もなく鬼岩の眼下を脱け出で、辛うじて戸隠岩に漕付いた。到着早々癩にさわつたのは、不届き至極にも斯かる神聖なる神島にまで、密獵者が入込み、少し許りの平地をトして藁小屋を結び、雨露を凌ぎつつ、日夜鳥網を張りまはし、棍棒を携帯し、垢面八字髭を貯へた見ても恐ろしい様子、腹でも空いたら人間でも容赦なく餌食にし兼閒じき五十男が、張本人と見えて、數多の壯丁を使役して頻りに信天翁を捕獲して居た眞最中であつたが、彼等は教服姿の吾等一行を遙見して、何故か右往左往にあわてふためき、山上目がけて駆け登るあり、斷岩を無暗に疾走するあり、何事の起りたるかと怪しまるる程であつた。稍落付顔の一人を近く招いて、

喜樂「あなた等は何を以てか俄にあわて迷ふぞ。自分等は信仰上より梅雨を冒して今此神島に參詣した者だが、見ればあんた等は海鳥の密獵者と見えるが、併し商賣とは云ひ乍ら、かかる危険な殺伐な所業を止めて、他の正業に就き玉へ」
と三人は熱誠を籠めて説き諭せ共、固より虎狼の如き人物、一言も耳に入り相な氣配だにない。「自由の權構てなやホツチツチ」と言はぬ許りの面構へ、要らぬ奴が來やがつて、人をビツクリさしやがつたが、マア裁判官でなくて大安心……
と口走つたのは滑稽の極みであつた。抑も昨年來出口教祖は冠島沓島の密獵を非常に惜まれ、且つ罪もなき鳥族の徒に生命を奪はるるを憐み玉ひ、鳥族保護の祈願まで、朝夕神前にて御執行あつたが、本日は満願の日なれば、神明へ謝禮の爲に種々の供物を持たせ、自分等を特に御差遣になつたのである。それが又偶然か神の攝理か、不可思議にも今日即ち明治四十二年六月廿二日、京都府告示第三百十九號を以て、加佐郡西大浦村大字三濱小橋及此兩島の區域を禁獵區域となし、今後十年間は年内を通じて該區域内に棲息する鳥類及び雛の捕獲又は採卵を禁止せられた當日であつた。

十年以前に出口教祖の建設せられた神祠は積年の風雨に曝されて、半朽廢に歸し、見るからに畏れ多く、一日も早く改築し奉りたく、是非來春までに造營せむことを神前に祈誓した。畏み慎み祠前に進み、各自に供物を獻じ燈火を奉點し、例の祝詞を奏上し奉る。捕り殘された數萬の信天翁は不遠慮に自分等齋員の頭上を飛びまはり、神聖なる教服の袖に糞汁の雨を降らせ、一帳羅を臺無しにする。まだ其上に業のわいた、氣樂相に怪しい聲を絞り出して、八釜しく、自分等を嘲笑して居る様に、心の勢か、感じられるのである。それから肝を投出して、お籠り岩に辛うじて歩を進めた。

見れば上は絶壁に隔てられ、眼下は深き谷底に海水が青く漂うて物凄。足の裏がウチウチするやうな難所に、教祖の眞筆を以て歴然と神の御名が記されてある。教祖の豪膽と熱誠に感じて、思はず拍手九拜感歎の聲口をついて出て來た。

始終沈黙を守つて居た大槻は此時思ひ出した様に語る。

大槻「日露戦役の眞最中、教祖のお供をして、十三ヶ日間此岩窟に靜坐し、敵艦全滅、我軍全勝の祈願をこらした時は、ズイ分困窮を極めた。清水は一滴も無し、

三人の中へ僅か三升の煎米がある丈、これを生命の親として、幾十日も食はねばならぬ、晝夜にドンドンドンと怪しい、何とも譬えやうの無い音がして寂しいやら、凄じい様で、人心地はせず、陸上との交通は無論斷絶なり、雨は毎日毎夜勤務の様に降り続ける、喉はかかなく、腹はすく、手足はワナワナする、目はマクマクする、腹はガクガクして、死んでるのか生きてるのか、吾乍ら終には判別が付かかねる。そこへ雨育ちの體を俄の暑熱に當てられる。思ひ出してもゾツとする。教祖は平素の修行の結果にや、神色自若として容顏麗しく、ますます元氣が増許り、二十日や三十日の辛抱が出来ぬ様では、日本男兒の本領はどこに在るか、ちと勇氣を出したが宜からうと御叱りになる、自分等はもう此上一片の勇氣も精力も出すことが出来ぬのである。然るに天の與へか向ふの岸に滴りおつる水に鹽氣がないと云ふ事を、フト発見した。恰も地下の世界から脱出した様な心持で、色々工夫をこらし、携へ持てる竹筒を受けて水を取り、漸く渴を醫したといふ始末で、萬一此水が無かつたなら、自分等は生命を全うすることが出来なかつたかも知れぬのであつた。併し一時は水で息をしたが何時迄も水許りでは堪らない。煎

米はモウ三日前に終りを告げた。斯んな無人島に居て死ぬよりも、陸上にあつて幾らでも國家の爲に盡すことが出来るであらうから、一日も早く歸らせて貰ひたいと教祖に泣きついた所が、教祖も可愛相に思召したか、……そんなら明日は迎への舟の來る様に神界へ祈願してやらう……と仰せられ、早速御願になると、天祐か偶然か、但は島神聽許しましたか、翌朝旭の豊榮昇る頃、遙の海上より七隻の漁舟が沓島を目がけて漕ぎ寄せて來る。其時の嬉しさは死んでも忘れられないと思ひました。數名の漁夫は自分等三人の顔を熟視して、てつきり露探と誤認し、俄に顔色を變へて震ひ出し、……露人が一人に日本人が二人だ。恐ろしい迂闊に相手に成れないぞ……と互に目曳き、袖曳き、逸足早く逃げ歸らむとする。逃げ歸られては堪らないから、自分は手を合さぬ許りにして、事情を逐一説明して頼み込んだ。彼等も漸くの事に納得し、兔も角も舞鶴まで送つてくれることになつた。所が其甲斐もなく、漁夫は體よく口實を設けて、自分等を安心させ、油斷させて置いて、一人も残らず逃げ歸つて了つたのである。大方村役場へでも報告する爲であつたのでせう。そこで止むを得ず後野氏が斷岩を迂りおりて、鰐の

巢まで危難を冒し、海水を泳ぎなどして、鐘岩の眞下迄行つて見ると、一人の漁夫がそこに波浪を避けて絲を垂れ鯛を釣つて居る最中で、裸體の儘に立つて居る後野氏の姿を見てビツクリし……生命知らずの馬鹿者奴、お前は鰐の巢窟を通つて來たなアと叫びつつ、直に船に乗せて戸隠岩の眞下に漕ぎ寄せた。教祖は漁夫に向ひ、厚く感謝せられ……さてバルチック艦隊も近日の中に對馬沖にて全滅するから安心ぢや、お前さまも村へ歸つて村の人に知らしてやつて安心させるがよいと……仰せられたが、果して其お言葉通り、七日程経つた所で、日本海の大戦で、あの通りの大勝利、自分も其時は餘りの事で呆れました」

と懷舊談を切りにやつて居る。二人の水夫も話の尾に付いて、

「私等も二人で此島へ御伴して參りましたが、教祖さまが……モウお前サン等は歸つてくれ、そして四十日目に船を持つて迎ひに來てくれ、萬一居なかつたら、又四十日経つた所で來てくれ……と仰せられたが、こんな無人島に荒行なさるかと思へば、俄に悲しくなつて、二人共泣きました」

と朴訥な口から話して居る。歸路冠島の硯岩に舟を泛べて和布を刈り、貝や蟹を

捕獲しつつ、五丈岩三丈岩等の勝景を感賞しつつ、順風に真帆をあげ、歸路に就く。正に午時であつた。

船中にて晝飯を喫し、舞鶴灣口の蕪、久里、博奕ヶ崎、白黒岩も何時しか後に見て、横波、南泊と進む程に、早松原にと差かかれれば、水夫は潔く、田邊見たさに松原越せば、田邊がくしの霧が込む。と唄ひ乍ら、廿二日の午後四時、大丹生屋へ安着した。

(大正一一・一〇・一七 舊八・二七 松村眞澄録)

第一七章 旅装(一〇五四)

明治三十三年八月一日、喜樂は郷里なる穴太より義弟危篤の電報に接し、急ぎ故郷へ歸つた。案の如く大病で義弟なる西田元吉は重態である。早速神界へ祈願の上、全快すべきことを告げ、其翌々三日綾部へ歸つた。大本の布教者西田元教

は此時始めて神の尊き事を知つて信仰に入つた。其動機には實に面白い次第あれど稿を改めて口述することとする。

さて綾部へ歸つて見ると、門口に喜樂の荷物一切が荒繩や古新聞で包んで、放り出してある。不思議に思つて四方春三を呼んで、誰が斯んな事をしたのかと尋ねると、彼は顔色を變へて奥の間に逃げ込んだ。益々不思議だと思つて四方祐助を呼んで委細を聞くと斯うである。

祐助「先生の御不在中に役員會議がありました。其時に四方春三サンが發起人で、あんな上田サンの様な譯の分らぬ先生は、一日も早く追ひ返すがよい。天眼通も天耳通も何もかも、皆上田サンの知つて居る事は、四方春三が皆覺えたから、今故郷へ歸つて居られるのを幸ひ、一時も早く荷物を穴太へ送つて、斷りに四方平藏サンが役員總代で行かれる處でありました。あなたの御歸りが一日遅かつたら、皆の役員サンの思惑が立つのに惜い事ぢや」

と頭を搔いて苦笑ひをして居る。そこで、
喜樂「此事は教祖さまは御承知か」

と尋ねると、

祐助「イエイエあなたを先へ送つて了ふた上で教祖様に申上げるのです。前に教祖様に申上げたら、キツと止められるは必定ぢや。あんな權太郎先生に永らく居つて貰つては、皆の役員が困るから、善は急げといふ事があると昨日から皆の者が位田の村上新之助サンの家で集會してます」

との事である。誠に油斷も隙もあつたものでない。又一方の四方春三は陰謀露顯に及んだので、何とか善後策を講ぜねばなるまいと、位田の村上宅へ自ら走つて報告した。反對者は驚愕の餘り施すべき手段がないので、とうとう山家村鷹栖の四方平藏方へ、謝罪して貰ひたいと歎願に出かけた。平藏氏の取持で雙方共に一先づ無事に治まるは治まつたが、機會さへあらば、上田を追出してやらうといふ考へは少しも放れなかつたのである。何れも皆金光教會の教師や役員や信者になつて居つた人々計りだから、金光教の守護神が憑つて、上田を排斥せむとするので其肉體は實に氣の毒なものである。

喜樂が斯道の爲に滿腔の熱誠をこめ、寢食を忘れて活動せる結果は大に功を奏

し、日に月に隆盛に赴き、教祖も是非神勅なれば上田をして事務を總理せしめむとされたので、例の足立氏は憤怒措く所を知らず、身は京都に在り乍ら、從來の部下を使喚して百方排斥を試み、野心満々たりし四方春三を旗頭となし、今回の横暴を繰返したるなるに、斯る重大事件を傍觀し居られし教祖の心事面白からずと、稍捨鉢氣分に成り居れる際、四方祐助の使を以て、教祖は上田を招かれたれば、心中に積み重なる疑團を晴らすには好機逸す可からずと、直に廣前に參じ教祖に故郷の様子などをお話し、互に義弟の病氣の快方に向へることを喜び合つて居たが、中村竹藏は奥の一間より御神諭を奉じて出で來り、さもおごそかに喜樂に向ひ、

中村「今回教祖殿は此寒空に、何國へか神命を奉じて御修行に御出ましになり、御老體の身として御苦勞遊ばすこと、吾々は何とも申様がありません。是も全く上田サンの改心が出来ぬからであります。謹んでお筆先を拜讀きなされ。神様や御國の爲に盡さなならぬ人が、病人位で郷里へ歸るなんて、實に神様を輕しめて居られるのぢや。人の一人や半分死んだつて、大切の御用に代へられますか、此

筆先は今度教祖さまが御修行に御出ましなされる御神勅でありますぞ、改心の出来ぬ者は教祖の御伴叶ひませぬ。上田を伴れて行くとありますが、あなたのやうなお方のお出でになるべき所ぢやない。何程神勅でも、役員として御道の爲に、拙者が今回の御供は、生命に代へてもさせませぬ。其代りに拙者が及ばず乍ら御供仕る。上田サン如何で御座る。只今教祖の前で御返答なされ。トコトン改心するから、御供をさして下さいと契約書を御書きなさい」

云々と中村氏は胸に一物ある事とて、口角泡を飛ばして上田に毒付いて居る。喜樂は聞かぬ顔して、横を向いて庭の面を眺めて居ると、教祖は中村氏に向ひ、教祖「御神諭は上田さまの事ぢやと思ふたら違ひますぜ、中村サン 手と胸に手を置いて、先日からの皆サンの行ひを考へて、取違ひを成さらぬやうに……」

と一言柔かな針を入られて、中村は首尾悪さうに教祖の前を下がり、御神諭を元の所へ納めて了つた限、物も言はず面ふくらしつつ、足音高く疊ざわり荒々しく、自分の居間へ下つて了つた。

教祖は自ら座を立ち、神前の三寶の上に置かれたお筆先を手づから喜樂に渡さ

れた。恭しく押戴いて直に其場で拜讀すると、御神文の中に、

「今度は普通の人間では行かれぬ處ぢや。實地の神の住居いたして居る、結構な所の怖い處である。皆の改心の爲に上田海潮、出口澄子、四方春三を連れ參るぞよ」

と記されてあるので、早速教祖に向つて厳しく談判を吹きかけた。其理由は四方春三の御供に加はつて居ることである。彼は當年の夏頃より上田排斥の主謀者とも云ふべき人物で、西原と上谷の間の峻坂にて上田をせむとなしたる如き佞人である。それでも寛仁大度の吾々は、神直日大直日に見直し聞直し宣直して赦して置いたにも係はらず、又々今回吾歸郷中に大排斥運動の原動力となつて驅廻つて居る。然るに世界の善惡正邪を透見し玉ふ良の金神様が彼をお供に加へられるとは如何しても合點が出来ぬ、良金神さまは良い加減な神さまだ。彼の如き者と同行するは恰も送り狼と道づれになるやうなものだ。それを知つて同行させると神から言はれるのは、要するに上田を排斥されたのであらう。表面は體裁を良くし、裏面には上田を同行させない御神意であらうから、今度の御伴は御免蒙り

たい……と稍憤怒の情を以て教祖に肉迫した。さうすると教祖は、
教祖「イエイエ決して其様な主意ではありませんせぬ。最早此通り旅立の用意も出来
て居りますから、今度は是非同行して貰はねばなりませんせぬ」
と蓑笠に杖草履など準備の出来上つたのを、見せられたので、漸く得心して御供
することにした。其日は八月の七日であつた。教祖は尚も上田に向ひ、
教祖「海潮さん、一寸裏口を開けて御覽なさい、恐ろしい事がありますからよく
見ておいて下されや。皆戒めの爲ぢやと神様が仰有りますぜ」
との言である。何となく氣味が悪いので側に居た四方祐助と四方春三とを誘つて、
裏口の障子を開放して見たが、教祖の言はれたやうな恐ろしいものは一つも見當
らぬ。何の事が合點が行かぬので、三人がそこらをキヨロキヨロ見廻して居ると、
裏口の柿の木の下に蚯蚓が一筋這うて居る斗り、暫時経つと一足の殿蛙が勢よく
飛んで来たかと思ふと、矢庭に其蚯蚓を呑んで了うた。其後へ又黒い可なり太い
蛇が出て来て、其蛙を一呑みにして了うた。併し別に是位の事が何恐ろしいもの
かと思つて三人が熟視してゐると、平素上田が寵愛して居るお長といふ雌猫が走

つて来て其蛇を噛み殺して了うたと見る間に、何處から来たか、黒色の大猫がお
長を噛殺さむとする。お長は驚いて直に柿の木へ逃げ登った。黒猫も亦續いてお
長の跡を追うて柿の木へ登った。上田はお長を助けたさに柿の木へ續いて攀登つ
たが、一の枝まで上った頃、お長は黒猫に噛まれて、悲しい聲を出して、高い枝
の上から地上に墜落しふんのびて鳴いてゐる。上田はお長の仇敵と一生懸命にな
つて黒猫をゆり落さうとしたが、何うしても落ちぬので、止むを得ず下へおりて
見ると、上田の新しい浴衣の白いのが、猫の糞まぶれになつて居た。三人は始め
て……あゝ上に上のあるものぢや、如何にも恐ろしい事ぢや……と肌粟粒を生
ずる程に驚いた。其時教祖はニコニコし乍ら三人の前に現はれ、
教祖「これで何事も分りませう」
と言はれたが、其時には餘り深く教祖の御言葉も心にとめなかつたけれど、後
至つて其理由が判明したのである。

(大正一一・一〇・一八 舊八・二八 松村眞澄録)

第四篇 靈火山妖

第一八章 鞍馬山（一）〔一〇五五〕

世は浮薄に流れ、人は狡猾に陥り剛毅昂直の氣淪滅し、勇壯快闊の風軟化して
因循姑息となり、野鄙情弱と變じ、虚誕百出詐偽自在に行はれ、或は囁嚅笑談他
の意に投合するを勉め、巧言令色頭を垂れ腰を曲げ、以て其欲を満たさむとする
の卑劣と無節操は、社會の全體に瀰漫し、我神州神民たるの高尚優美の氣骨雅量
を存せず、國民の基礎たるべき青年は概ね絲竹管絃の響きに心耳を蕩かし、婀娜
嬋妍たる花顔柳腰に眩惑せられ、奢侈淫逸の欲を逞ふして空しく有爲の歳月を經
過する者のみ。國家の前途如何を思ふの志士仁人無く、世は將に常暗ならむとす
るを深く憂慮し、神示のまにまに大本の教祖は拔山蓋世の勇を振ひ、百折不撓の
膽を發揮し、世道人心を振起せむと、上田海潮、出口澄子、四方春三の三名を從

へ菅すげの小笠をかさに莫蔭もくえん、手てには芳かんばしき白梅しらつめの枝えだにて作りたる杖つゑをつき草鞋わらぢ脚絆きゃはんに身みを固かため、明治めいじ卅三年閏八月八日の午前ごぜんの一時いちじ、正まさに廣前ひろまへの門口もんぐちを立出たちいでむとする時とき、前夜ぜんやより集あつまり来きたりし數多あまたの役員やくゐん信者しんじや等は各教祖おのおのけうその袖そでに縋すがり異口同音いくどうおんに「何どう卒途そとちう中ちゆうまでなりと見送みおくらせ下ください」と泣なきつつ頼たのむ者ものばかりであつた。教祖けうそも役員やくゐん等らが、しほらしき眞心まごころはよく推知すゐちし居をられたけれど、只管ひたすら神様かみさまの命令めいれいを畏かしこみて一人ひとりも許ゆるされなかつた。生別せいべつ離苦りくの悲かなしさに何いづれも袖そでを絞しぼりつつ、教祖けうそが平素へいそに於おける温言厚諭おんげんこうゆの情なさけは、人ひとを動うごかし、人ひとを感かんぜしめたのである。別わかれに臨のぞんで、今更いまさらの如ごとく其温容そのおんようを慕したひ和氣わきに懷なつき恰あたかも小兒せうにの慈母じぼに別わかるる如ごとく焦こがれ慕したふたのである。さて教祖けうそは梅うめの杖つゑ、海潮かいてうは雄松をまつ、澄子すみこは雌松めまつ、春三はるざうは青竹あをたけの杖つゑをつき乍ながら、何處いづこを當あてともなく従したがひ行く。秋あきすでに深ふかく木葉このはは色いろを變へんじて四尾よつをの神山しんざんは漸やうやく紅くれないに黄雲くわううん十里肅然じゆくぜんたるさまである。和知わちの清流せいりうは淙々そうそうとして脚下きやくかに白布はくふを曝さらし一行いつかうの前ぜん途とを清きよむる如ごとくに思おもはれた。須知すちやまたうげ山峠のしゅんぼんの峻坂しゅんぼんを苦くもなく登のぼり、狭せまき山道やまみちを辿たどりつつ行ゆけば川合かはひの大原おほはら神社しんじや、一行いつかう恭やうやしく社前しやぜんに跪きざし、前ぜん途との幸運かううんを祈願きぐわんしつづ、枯木峠かれきたうげも漸やうやく踏ふみ越こえて、今いまや榎木峠えのきたうげの絶頂ぜつちやうに差さしかからむとする時とき、前ぜん途と

にあたつて怪しき火光のチラチラと燃ゆるを見とめた。海潮は盜賊どもの焚火を
なして旅客の荷物を掠めむとして待ち構へ居るには非ずやと心も心ならず、不安
の念に包まれ乍ら近づき見れば、豈圖らむや、會員の一人なる福林安之助が數多
の役員信者を出し抜いてソツと旅装を整へ、梅の杖まで用意して先へ廻つて待つ
てゐたのである。教祖一行の姿を見るや忽ち大地に慄伏し、

福林「何卒今度のお伴をさして下さい。私は猿田彦となつて此處にお待申して居
りました。願はくば異例なれども猿田彦と思召、特別を以てお伴をお許し下さい」

と頻りに懇願して居る。教祖は、

教祖「何事も神様の御命令なれば此三人の外には如何なる事情があるとも隨行し
て貰ふ譯には行きませぬ」

と固辭して動き玉ふ氣色だになかつた。福林は詮方なくなく腹の底から湧き出す

涙と共に嘆願し、

福林「今此處で假令死ぬとも此まま家へは歸らぬ」

と容易に初心を變ずべくも見えなかつた。海潮は其眞心を推し量りて氣の毒に堪

へ兼ね、教祖にいろいろと頼んだ上、
海潮「今度に限つて破格を以て隨行と云はず荷物持ち人足として連れて行つて上げたら如何でせうか」
と頼んで見た。教祖も其の誠意と熱心に感じられ漸く隨行を許された。福林は天にも登るが如く喜び勇み、雀躍し乍ら四人の荷物を棒もて肩に擔ぎ、一行の後に跟いて行く事となつた。老の御足も健かに早くも、質志、三の宮に到れば東天明く旭日燦々たる處なれども、音に名高き丹波船井の霧の海に天地萬有包まれて、天の原射照り透らす日の大神の御影を拜する能はず、前途朦々として何と無く物悲しき心地がした。行程六里、檜山に達し會員坂原氏宅に暫時息を休め、須知、蒲生野や水戸峠を上りつ下りつ、觀音坂の頂上に辿り着き見れば、丹波名物の霧の海原何時しか拭ふが如く晴れ渡り、船井郡の一都會、花の園部や小向山、天神山は一眸の下に横たはり、佐保姫の錦織りなす麗しさは、筆舌の克く盡す所にあらず、上村、淺田氏等の同居する木崎の川原町に達した。偶一行の出修を知りて急ぎ出迎へ是非一夜泊りて旅の御疲勞を休められよと請ふ事最と懇なりし爲め彼

の家に^{いへ}入る。閒も^まなく中田、辻村の兩會員^{りやうくわいめん}入り來り、教祖^{けうそ}の居らるる前^{まへ}をも憚ら^{はばか}ず、何の挨拶^{あいさつ}も會釋^{あしやく}も碌々^{ろくろく}せず、開口一番^{かいかういちばん}上村氏^{うへむらし}が平生^{へいせい}の處置^{しよち}甚だ不公平^{ふこうへい}なり、依つて吾々は退會^{たいくわい}せむなどと不平^{ふへい}を訴ふるので、座上^{ざじやう}の上村氏^{うへむらし}は大に怒り、これ又口^{またくち}を極めて彼が不謹慎^{ふきんしん}にして豫てより深き野心^{ふかやしん}を藏し、現在^{げんざい}今お供の列^{れつ}に加はる四方^{しかた}春三等^{はるさう}と氣脈^{きみやく}を通じ、本會^{ほんくわい}の瓦解^{くわかい}を企てつつありなど、雙方^{さうほう}意外^{いぐわい}の事^{こと}のみ言ひ争ひ、はては四方、中田^{なかだ}を速かに除名^{ぢよめい}せられ度し、然らざれば小子^{せうし}より退會^{たいくわい}すべし等、得手^{えて}勝手^{かたて}の難問題^{なんもんだい}を提出^{ていしゆつ}する。中田、辻村^{つじむら}の兩人^{りやうにん}は一層^{いつそう}憤激^{ふんげき}し、否、上村^{うへむら}こそ今回^{こんくわい}の瓦解^{くわかい}の謀主^{ぼうしゆ}にして、生等^{せいら}は只相談^{たださうだん}を受けたる迄^{まで}にて始め^{はじめ}よ^り斯る反逆^{はんぎやく}には贊成^{さんせい}し難し、と一言^{いちごん}の許^{もと}に跳つけた。それ故^{ゆゑ}今日^{こんにち}其真相^{そのしんさう}の暴露^{ばくろ}せむ事^{こと}を怖れ、先^{さき}んずれば克^{よく}く人^{ひと}を制^{せい}すとの兵法^{へいはふ}を以て、反對^{はんたい}に彼^{かれ}より生等^{せいら}を誣告^{ぶこく}するのである」

と逆捻^{さかねぢ}に一本^{いつぽん}參る。互^{たがひ}に負^{まけ}ず劣^{おと}らず、爭論^{そうろん}の何時^{いつ}果^はつべしとも見^みえざれば、海潮^{かいてう}は苦々^{にくにく}しき事^{こと}に思^{おも}ひ、種々^{しゆじゆ}と理非^{りひ}を噛分^{かみわ}けて諭^{さと}せども、固^{もと}より敬神^{けいしん}愛民^{あいみん}の思想^{しさう}を有^{いう}せざる頑迷^{くわんめい}不靈^{ふれい}の製糞器^{せいふんき}、只神^{ただかみ}を估^うりて糊口^{ここう}の資^しに供^{きよう}するより外^{ほか}、他に^た一片^{いつぺん}の

希望なきもの共なれば、濟度するには此上なく骨を折らざるべからざる、最も困つた厄介極まる代物であつた。

折柄庭前に嬉々として四頭の犬遊び、其状誠に親睦にして羨ましい程である。何と思はれしか教祖は懷中より一片の食物を取出し、犬に投げ與へられしに、犬は忽ち爭奪搏噬を初め、恰も不倶戴天の親の仇に出會せしが如くである。教祖はこれを見て、人心の奥底は大抵斯くの如しと微笑みし乍ら、匆匆に此家を立出でむとせらるる時、上村は大に恐縮して曰く、生等の心は實に此犬のやうだと稍反省の意を表はしたが中田、辻村は劫々承知せず、益々暴言を逞しふし、是非々々教祖の御入來を幸ひ、正邪黑白を判別されむ事を強請して止まなかつた。これには海潮もほとほと持て餘し、本會の主義精神は一身一家の榮達名聞を企圖するに止まらず、國家的觀念を養ふにあるのに、汝等會員たるの本旨を忘れ、教祖折角の苦行の首途を擁して、非違の裁斷を請はむとするは、實に時を誤りたる非禮の行爲なり、教祖多年の艱苦は實に汝等の如き會員を覺醒し正道に導かむが爲めのみ、今又六十有五歳の教祖が梅ヶ枝の一杖に身を托し、凜烈肌を劈かむとする寒

天をめぐり何地を當ともなく神命の隨々、孤雁聲悲しく、暮雲に彷徨するが如く
將に遠く出修されむとす、宜しく本然の私に還り教祖のお心を推察せば、斯くの
如く見苦しき事をお耳に入れ申すべき場合に非ざるべし、と事を釋け、理を解き
て諭せども、元來彼等は金光教の教師にして、自ら企て自ら爲すの勇なく、徒に
他の覆轍に做ひ、其糟粕を舐りて以て得たりと爲し、信者の爭奪にのみ餘念な
りし癖は容易に改まらず教祖の諭示も海潮の説得も寸效なく、中田、辻村の兩人
は梟の夜食を取り外せし如く頬を膨らせ席を蹴立てて歸り、四方、福林もこれに
従いて行つた。

教祖は上村氏等に慇懃なる謝詞を述べ、海潮、澄子を具して立ち出でられし故、
上村氏も大橋までお見送りの爲めとて従ひ來つた。さて四方春三は中田方に至り
頻りに何事か善からぬ事のみ囁きつつ不興の顔色物凄く、口を極めて海潮を罵り
是非排斥せずむば止まずと息捲く。福林氏は草臥たりとて中田が家に入るや、直
に昇り口に打倒れ、熟睡を装ひつつ狸の空寝入り、素知らぬ振にて彼等の密談を
残らず聞き取つた。少時ありて缺伸と共に起き上り、態と空惚けたる面を擦り乍

ら教祖は何處にありやと問へば、

中田「あの氣違ひ婆か、否狂長殿か、只今然も偉相に上村氏を隨行させて出て行

つたから大方大橋の詰邊りに今頃は迂路ついて御座らう」

と會員にあるまじき言葉を弄するも、一味の四方は咎めもせず厭さうに福林を伴

ひて教祖の跡を追つかけた。夕陽は已に西山に没し、黄昏の霧は一行を包まむと

する。四方春三は、

四方「夜の旅は危険ですし、さりとて旅費も豊ならず、むしろ中田氏に一泊しま

せう」

と云へば教祖は少しく怒つて、

教祖「假令野宿をしても彼等の家に泊るのは厭ぢや」

とて氣色悪ければ、一行は不承々に従ひ行く。小山、松原乗り越えて一里半行

けば鳥羽の里、廣瀬も後に八木の町、月は照れども深更に入りて漸く八木の會合

所福島氏方へ着いた。

（大正一一・一〇・一八 舊八・二八 北村隆光録）

第一九章 鞍馬山（二）「一〇五六」

折節當夜は八木會合所の祭神及び會場移轉式舉行日にて數多の會員參集し居たるに、不意に教祖一行の御立寄りと聞きて驚喜し俄に色めき立ちて上を下への大騷動、見るに見かねて教祖は之を制し慇懃に挨拶あり。畏くも大神の奉齋所を遷座する大切な御式を輕率に執行して神靈に非禮の罪を重ね、前以て詳細の報告も出願にも及ばざりし會員一同の不注意は今眼前に報うて來て氣の毒であつた。幸ひにも教祖に祭主を懇願して移轉式を完了し、次に教祖及び海潮の講話あり、午後十一時には各十二分の神徳を忝なみ會員一同退散した。印度坊主は經が大切、自分等は明日が大事、夜更しは身の障りと狭い座敷に雑魚寢をなし、翌九日、旭日東山の端に圓顔を現はし給ふの頃、霧の流るる小川に手水を使ひ口嗽ぎ、恭しく神前に祈願を凝らし、行途の如何を占なひ奉る。時に皇神海潮の手を通じて教へ諭し給ふ様、

世の中の人の心のくらま山

神の靈火に開くこの道

と、此神詠によりて行途の城州鞍馬山なる事を窺ひ知り得たれば、心は五條橋の
牛若丸の如く飛び立つばかり勇み立ち、午後一時福島氏に送られて八木停車場へ
と歩を運ぶ。折柄園部の上り列車、幸宜しと飛乗れば二分停車の忙しく渡る鐵橋
寅天の、音轟々と大堰川、八木の城山跡に見て、二條の軌道を疾驅して、早くも
龜岡に接近す。海潮が故郷なる曾我部の連山は殊の外眼に立ち、高熊山の靈峰は
彼方ならむと思へば不知不識に拍手せられる。愛宕の神峰は群山重疊の其中央に
巍然として聳え、教祖一行の出修を眺めて山靈行途の安全成功を暗祈黙禱せらる
るの思ひがある。車中偶曾我部の里人某を見る。言葉を掛けむとすれば態と素知
らぬ振りに背面し、時々横目に此方の身邊を覗ふ様、あまり心地良きものに非ず。
彼は曾て海潮が故郷にありて國家の大勢に鑑み、憂國の至情を以て一身一家を抛
ち、惟神の大道たる皇道靈學の教旗を翻したる時、陰に陽に極力妨害を加へたる

枉津神なれば、今更面目なくて其鐵面皮も稍良心に呵責され、思はず背面せしならむかと思ひしに、豈圖らむや、然は無くて彼は餘等一行の旅装を注視し、乞食巡禮に零落せしものと誤認し、歸郷するや嗤笑して告げて曰く。

上田は怪しき教に沈溺せし爲め終に乞食に墮落したり。神道に熱中するもの宜しくこれを以て殷鑑とし、決して祖先傳來遵奉し來りし佛道を捨て神道に迷ふが如き愚學を演ずる勿れ。彼れ上田は親族には絶交せられ、朋友には疎まれ、弟妹には見離され、吾住み馴れし戀しき故郷を捨てて是非もなく他所へ流浪し、今又養家の老母や妻を携へ、浮雲流水の身となり居れり」

などと、御苦勞にも惡言醜語を遠近に觸れまはし、餘が郷里の一族も少からぬ迷惑を感じたと云ふことである。

日本神國に生を享け、神國の粟を喰み、神恩に浴し乍ら、報本反始の本義を忘れて、邪教に魅せられたる印度靈の小人の言葉程、迂愚頑迷にして斯道に害毒を流すものはない。

汽車は容赦なく山本、請田と進み行き、第一隧道を潛り抜け第二、三、四と貫

く程に、流れも清き保津川の激潭、急流に散在する奇石怪岩面白く、読み盡されぬ書物岩、數へ盡せぬ算盤岩、激潭飛瀑の中に立ち竝ぶ屏風岩、佛者の隨喜渴仰する蓮華岩を川底に見降しつつ、溪間の鐵橋矢を射る如く、早くも嵐峽館の温泉場、感賞間もなく君が代を萬代祝ふ龜山隧道、脱け出れば花より團子の嵯峨の驛、五分停車の其内に、右手の方を眺むれば、月雪花と楓の嵐山、秋季に花は無けれども、松の木の間を彩る錦、神の隨々萌出でて、月照り渡る渡月橋、筏流るる桂川、お半長右衛門浮名を流す涙川、流れも清き天龍の巨刹は松年畫伯の筆になる天龍と共に高く甍を雲表に現はし、峨山の禪風薫るあり。十三詣りの虚空藏の祠、千歳榮ゆる松尾大社、神徳薫る梅の宮の森、千葉の葛野を眺むれば、百千足屋庭も見え、國の秀見ゆる勇ましき。左手は撰歌に名高き定家卿の小倉山、花と紅葉の二尊院、佛祖を祀つた釋迦の堂、北は御室の仁和寺、五重の塔は雲を突く、此處に昇降する客の大半はこれに詣づる信徒なるべし。汽笛の聲に動き出す。汽車は間もなく花園驛、車掌が明くる戸を待ち兼ねて一行は飛降り、禪宗の本山妙心寺を横手に眺めつつ、教祖は老の御足に似もやらず一行の先に立ち進まれ、徒

歩にて北野の鳥居前にと衝立つ梅松竹の杖。今日は陽曆廿五日當社の祭典にて神輿渡御の眞最中、騎馬の神職は冠装束嚴めしく劉曉たる音樂に連れて、神輿の前後を練り出る有様、最殊勝に見ゆる。數萬の賽者は一時に容を改め襟を正して拍手するあり。社頭には千年の老松梅林、楓雜木も苔蒸して神さび立てる神々しさ。教祖は此處に歩を停め拍手再拜の後、餘等一行に向ひ、教祖「抑も當社の祭神は今より一千餘年の昔、左大臣藤原時平が讒言に由つて時の帝王の逆鱗に觸れ、無實の罪に問はせられ親子共に四方へ流謫の身となり、御無念やる方なく、

天の下乾ける程のなければや
着てし濡衣ひる由もなき

と歎き給ひし菅原道眞公の眞心終に天地に貫徹し、鳴神とまで化けて神異靈徳を顯はし一陽來復の時至つて北野天神と祭られ後世までも斯くも手厚き官祭に與り

給ふは、實に聖明の世の賜と云ふべし。然し乍らここに思ひ出されて忍び難きは、吾等の奉仕する良の大神國常立尊の御上である。大神は天地開闢の太初にあたり、海月なす漂へる國土を修理固成して豊葦原の瑞穂の國を建設し、以て神人安住の基礎を立て嚴格なる神政を勵行し給ふや、剛直峻正にして柔弱なる萬神の忌憚する所となり、衆議の結果惡鬼邪神と貶せられ、千座の置戸を負ひて神域の外に神退ひに退はれて其尊身を隠し、千萬の御無念、克く忍び克く堪へ天地の諸靈を守護し給へども、盲千人目明一人の現社會に誰ありて神名を稱へ奉る者なく、神饌一、回獻ずる人無く、暗黒裡に血涙を呑み落武者の悲境に在せ給ひしに、時節到來、大神の至誠は天地に通じ、煎豆に花の咲き出でしが如く月日並びて治まれる、二十五年の正月元朝寅の刻、天津神の任しのまにまに、
「三千世界一度に開く梅の花、良の金神の世になりたぞよ。須彌仙山に腰を掛け丑寅の金神守るぞよ」
と大喜と大抱負とを以て目出度く産聲を擧げ、再び現在の主宰とならせ給へり。
あゝ斯くも至尊至貴至仁至愛なる大神の御心を察し奉りて一日も早く片時も速に、

大神おほかみの假宮かりみやなりとも造營ざうえいし奉りたてまつ我神州わがしんしゅう神民しんみんとして敬神けいしん愛民あいみんの至誠しせいを養やしなひ神恩しんおんの忝かたじけなきを覺悟かくごせしめ、日本魂やまとたましひを鍊磨れんま修養しゅうやうせしめねば、邦家ほうかの前途ぜんとは實じつに寒心かんしんに堪たへず。瞬時しゆんじも速すみかに大慈だいじ大悲だいひの大神おほかみの御洪德ごこうとくを宣傳せんでんし、惡鬼あくき邪神じやしんとの冤罪ゑんざいを雪すすぎ奉たてまつるは吾等われらの大責任だいせきにんにして又畢生またひつせい必かならず決行けつかうせざるべからざる大願たいぐわんなり。今いまや北野きたのの神かみの官祭くわんさいを拜はいして大神おほかみの御上おんうへを追懷つゐくわいし、悲歎ひたん遣やる瀨せなし。』

とて冴さえたる御聲みこゑは愈曇いよいよもり光眼くわうがん瞬またく事切ことしきりと見受みうけられ……草枕旅くさまくらたびには厭いとふ村時雨むらしぐれはらはらかかるを袖そでにうけつつ語り出いでらるる其眞情そのまごころに絆ほだされて、海潮かいてうも澄子すみこも聲こゑをのみ、貰もらひ泣なきせし其顔そのかほを、菅すげの小笠をがさに隠かくして同行どうぎやう五人杖ごにんづゑを曳ひいて鞍馬くらまを指さして急いそぎ行ゆく。

鞍馬くらまへ愈到着いよいよちやくしてより其夜そのよは御宮おみやの前まへにて御通夜おつやする事こととした。四方春三しかたはるざうは寺じぜ前んに備そなへありし御籤みくじを頂いたきしに餘程よほど惡あしかりしと見え、思おもはず、春三はるざう『オウ失敗しまつた』

などと口外くちくわいする。其夜そのよ福林ふくばやしは旅たびの疲勞ひらうにて前後ぜんご不覺ふかくの體ていに寢入ねいりしが、不圖ふと夜中よなかの一時頃目いちじごころめを覺さまし見みれば、傍かたはらにありし四方春三しかたはるざうの姿すがたの見みえざるに驚おどろき、探さがし見み

るに外そとの方に當あたつて「起きて下さい」と頻しきりに呼よはる聲こゑの聞きゆるままに耳みみをすま
せば確たしかに四方しかたの聲こゑである。福林ふくばやしは急いそぎ外そとへ出でて見みれば、大おほいなる火ひの玉たま、お宮みやの
前まへを行ゆきつ戻もとりつ驅かけめぐり、而しかも其その火ひの玉たまの尾をには正まさしく尋たづねる四方しかた春はる三ざうの姿すがた
あるを認みとめ、今いまの聲こゑの所在ありかも始はじめてわかつた。薄うす氣き味み悪わるく見み守もる内うち、火ひの玉たまは次した
第いに先むか方かうへ行ゆきし故ゆゑ恐おそる恐おそるも其その方はう角かくへ行ゆきて見みれば四方しかたは大おほきな焚たき火びをして居あ
た。福林ふくばやしは近ちかづいて、

福林ふくばやし「一體いったい如何どうしたのか」

と聞きけば四方しかたは青あゑい顔かほして震ふるへ乍ながら、

四方しかた「オ、恐こはい恐こはい、こんなに恐こはい事ことはない、今いまのを見みて呉くれたら何なにも云いふ事ことは
無ない」

と云いふのみにて打うち明あけもせず泣ないて居ゐる。それから連つれ立たちて御お宮みやへ戻もり再ふたび
寢しんに就つき、夜よ明あけてから更あらためて四方しかたに夜やはん半はんの出で來き事ことを尋たづねたけれど、四方しかたは何なにも
知しらぬと云いふ。念ねんの爲ため昨さく夜や焚た火きせる處ところへ行いつて見みたが其その跡あとさへ無なき不ふ思し議ぎに福
林やしは只ただ驚おどくばかりであつた。海かい潮てうは教けう祖そに向むかひ今こん度ど鞍くら馬ま參まりの神しん慮りよを伺うかひしに、

教祖けうそは只ただ、

教祖けうそ「先さきに行いつたら分わかりませう」

と云いはれしのみであつた。

歸途きとは京きやうと都とより龜岡かめをかへ出いで八木やぎにて一泊いっばくせしが四方しかたは終日しうじつ蒼白あをじろな顔かほして悄氣込せうげこみ居あたりし様さま見るも憐あはれであつた。同人どうじんは其夜そのよ園部そのべまで二里にりの行程かうていを走はしつて友人いうじんに會あひ、

四方しかた「今こんど度は死しぬやも知しれぬ」

とて暇乞いとまごひを成なして歸かへれる由よし、教祖けうそは此事このことを聞ききて叱しかつてゐられた。

翌日よくじつ綾部あやべの役員やくあん信者しんじやは途中とちう迄まで出迎でむかひに出でて無事ぶじ大廣前おほひろまへに歸かへり着つく。四方しかた春三はるざうは始終しじう太息といきを洩もらし居あたが上谷うへだにの宅たくより迎むかひに來きたり、歸宅きたくして後のち一ヶ月いっかげつほど煩わづらひて

歸幽きいうして了しまつた。其それより前まへ、

四方しかた「生前せいぜん是非ぜひ先生せんせいに一度いちど來きて貰もらはねば死しぬにも死しなれぬ」

とて使つかひが來きたから海潮かいてうは見舞みまひに行ゆき、

海潮かいてう「許ゆるしてやる」

と言へば安心して歸幽した。春三時に十八才、實に靈學に達したる男であつたが慢心取違ひの末、神罰を蒙りて一命を終はつたのは遺憾の事であつた。

或夜俄に大風吹きて廣前の杉の樹、ゴウゴウと唸りし事がある。後教祖に伺ひしに、鞍馬山の僧正來りて本宮山へ鎮まり又其眷族は馬場の大杉へ行つたが其後大杉には蜂の如く澤山の眷族が見えたと教祖は物語られた。

(大正一一・一〇・一八 舊八・二八 北村隆光録)

第二〇章 元伊勢(一〇五七)

明治三十四年舊三月八日、元伊勢の御水の御用があつた。世界廣しと云へども、生粹の水晶の御水と云ふのは、實に元伊勢の天の岩戸の産鹽産釜の御水より外には無いので、其水晶の御水を汲んで來ねばならぬと云ふ御筆先が舊三月一日に出たのである。

「良の金神の指圖でない」と此水は滅多に汲みには行けぬのであるぞよ。此神が許しを出したら何處からも指一本さへるものもないぞよ」

と云ふ意味の御筆先である。極めて大切な御用であるから、六日前に木下慶太郎が調べに行つて来た。此水は昔から汲取禁制の御水で萬一禁を犯した場合はず大風大洪水が起ると傳へられ、何人も觸れる事の出来ぬ様に特に神官が見張をして居るのみならず、上の方から見下した處では小さい流れがあつて、二間ばかりの板を渡さねば行かれないと云ふ事まで確めて歸つて来たのである。愈當日になつて、教祖の外海潮、澄子を初め一行四十二名、菅笠、莫塵蓑の扮装、御水を汲み取る爲に後野市太郎が拵へし青竹の一節の筒二本を携帯して出發した。丹後の内宮の松代屋に着いて一行は打ち寛ろぎ、前に木下が調べし通り神官が見張つて居つては汲む事が出来ないから、先づ森津由松に命じて様子を見届けにやつた。日が暮れかけたので、見張の神官が内へ引上げるのを見届けて森津は早速報告に引返した。草鞋もとかずに森津の報告を待ち兼ねて居た、木下慶太郎は例の用意して置いた青竹の筒二本を携へて大急ぎで岩戸へ駆けつけた。六日前に調べた時に

見て置いた小さな流には大きな朽木が流れ寄つて横はつて居つたので、これ幸ひと渡つて行つた。そして産盥と産釜の水を青竹の筒の中へ杓子で汲取るのであるが筒の穴が小さい爲、仲々手早く濟まず、愚圖々々して邪魔が這入つては今度の大切の御用が勤まらぬと心得た木下は、二本の筒を両手に持つて矢庭にツブツブと突込んで、漸く水が一杯になつたので、安心して松代屋へ引揚げた。一行は風呂から上つて夕食の最中であつたが首尾よく御用を勤めた事を申し上げると、教祖は非常に喜ばれた。そして木下は大きな朽木の橋の事を申上げると教祖はそれは正しく龍神様であると云はれた。翌日は御禮参りに行つて夕方五時出立、夜徹し歩いて歸つたが、綾部へ歸るまで何の御用をして來たか知らぬ者さへ多かつた。汲んで來た生粹の水晶の御水は神様に御供へして其御下りを皆で少しづつ戴き、大本の井戸と元屋敷の角藏氏方の井戸と四方源之助氏宅の井戸とへ五勺ほどを残り丹後の沓島冠島の真中即ち龍宮海へさせとの教祖の吩咐であつた。第一着に大本の井戸に入れたが、教祖は、

教祖 今に京都大坂あたりから此お水を頂きに來る様になる

と云はれたが今日では已に實現して居るのである。

元屋敷の井戸と云ふのは、西の石の宮の處の井戸で出口の元屋敷であるが、角藏に賣つたのであるから勝手にさす譯には行かぬので木下慶太郎の計らひで釣瓶繩が切れたから水を貰ひに來たのだと云つてさし込んで來たのである。元屋敷は後に角藏から買ひ戻して大本の所有になり、今日では石のお宮が立ててある。四方源之助の内の井戸にも木下が同一筆法でさし込んで來た。これは今統務閣の側の井戸で現今では三つとも大本の有となつて居る。

此御水の御用が出來た頃、大本で三つの火の不思議があつた。お廣前のランプが落ちて大事になる所を漸く消し止めたが、それからまだ二三分間も經たぬ内に風呂場から火が出て、これ亦大事になる所を海潮が見付けて大騒ぎとなり漸く消し止めた。すると又役員の背中へランプが落ちて危い所を無事に消しとめた。僅二三分の間に三つも火事沙汰が起つたので何か神慮のある事だらうと思つて居ると海潮は神懸りとなつて深い神慮を洩らされたのである。御水は後になつて教祖様が役員信者の大勢と共に龍宮海へさしに行かれた。此水が三年經てば世界中へ

廻るから、そしたら世界が動き出すと云ふ事であつたが果して三年後には日露戦争が始まつたのである。

(大正一一・一〇・一八 舊八・二八 北村隆光録)

第五篇 正信妄信

第二章 凄い権幕〔一〇五八〕

明治七年になつてから、日露戦争が勃發したので、ソロソロ四方平藏、中村竹藏、村上房之助、木下慶太郎、田中善吉、本田作次郎、小島寅吉、安田莊次郎、四方與平、鹽見じゆん、などの連中が俄に鼻息が荒くなり、六疊の離れに喜樂が

閉ぢ込められ、隠れて古事記を調べたり、靈界の消息を書いてみると、中村竹藏が二三人の役員と共に大手をふつてやつて来た。そして喜樂に向ひ、中村「會長サン如何です、大望が始まつたぢやありませんか、早く改心をなさらぬと、今年中に世界は丸潰れになりますぞ、露國から始まりてもう一戦があるとお筆先に出て居りますくないか、へんこれでも筆先がちがひますかな、靈學三分筆先七分にせいと、お筆先に出て居るのに、一寸も筆先をおよみにならぬから、露國から戦が始つても何も分りませんまいがな、この先はどうなるといふ事を御存じですか、早く教祖さまにお詫をなされ」

と威丈高になつて、説諭するやうな氣分で喋り立た。丁度宣戰の詔勅が下つた三日目である。そこで喜樂は自分の隨筆と題した一冊の書物を出して、中村に示し、喜樂「そんな事はとうから分つてゐるのだ、これを見てください、明治卅五年の一月にチャンと明治卅七年の二月から日露戦争が起るといふ事が自分の筆でかいてある」

とそこを廣げてつき出して見せると、中村は妙な顔をして、

中村「そんな角文字をまぜて、外國身魂で何程書いても、そんな事はここでは通
用しませぬ、何にも知らぬ學のない神力ばかりの教祖のお筆先が尊いのです」
と木で鼻をこすつた様に、冷笑的に云ふ。そこで喜樂は、
喜樂「お前は明治卅三年にも今年に日露戦争が起るといひ、三十四年にも三十五
年にも毎年、今年は日露戦争が起る、立替が始まる、目も鼻もあかぬ事が出来る
というて居つたぢやないか、そんな豫言でもしまひには當るもんだ」
といふと中村は威丈高になり、
中村「私は自分が言ふたのではない、勿體なくも良大金神變性男子出口の神さま
のお筆先に……今年は立替が始まる、露國との戦ひがある……と現はれて居るの
で、さういふたのです、つまり會長サンは教祖ハンの仰有つた事や神さまの御言
をこなすのですか、あなたの御改心が遅れた爲に御仕組がおくれたので御座いま
すぞ。會長サンが明治卅三年に改心が出来て居つたら、神さまは三十三年に立替
をなさるなり、三十四年に改心が出来て居つたら、ヤツパリ三十四年に立替を遊
ばす御仕組にチャンと三千年前から決まつて居ります、自分の改心がおくれて神

さまに御迷惑をかけ、御仕組を延ばして、世界の人民を苦しめておき乍ら、神さまがウソを言ふたよに仰有るのですか、そんな事を仰有ると、綾部には居つて貰へませぬ、何というても露國と日本との戦争が始まつたのですから、きつと日本は九分九りんまで、サア叶はぬといふ所まで行まずぞ、そうなつた所で綾部の大本から良金神變性男子の身魂が大出口の神と現れて、良めをさして三千世界をうでくり返し、天下太平に世を治めて、後は五六七の世松の世と遊ばすのですから、早く改心をして貰はぬと、お仕組の邪魔になりますぞや、三千世界の立替立直しの御用の邪魔を致した者は、萬劫末代書きのこして、見せしめに致して其身魂を根の國底の國へおとすぞよ……と神さまがお筆先にお示しになつて居りますぞや、會長サンの改心が一日遅れたら世界の人民が一日餘計苦しむといふ、あなたの身魂は極惡の身魂の因縁性來だから、何事も改心が一等ぞやとお筆に出て居ますぞえ

と脱線だらけの事を云ひ竝べて攻め立てる。會長は可笑しさをこらへて、喜樂「自分が一日早く改心した爲に三千世界の人間が一日早く助かるといふよな、

善にもせよ悪にもせよ、そんな人物なら結構だが、自分等一人が如何なつた所で、世界に對して何の關係があるものか、餘り譯の分らぬ事を云ふもんぢやない、そんな事を云ふから、綾部の大本は、氣違の巢窟だとか、迷信家の寄合だとか、世界から悪罵されて、はねのけ者にされるのだ、チツとは考へて貰はぬと困るぢやないか」

と言へば中村は口をとがらし、

中村「おだまりなされ海潮サン何程うまく化けても駄目です。世間から悪くいられるのがそれ程氣にかかりますかな、何と氣の小さい先生ですな、それだから變性女子は反對役だと神さまが仰有るのだ、世界中皆曇つて晝中に提燈を持つて歩かなならぬ暗がりの世の中になつてゐるのぢやから、世界の人民にほめられるよな教がそれが誠ですかい、トコトン悪くいはれてトコトンよくなる仕組ですよ、餘りあんたは角文字や外國の教にこるから、サツパリ靈がねぢけて了うて、お筆先が分らぬのだ。チツとお筆先を聞きなされ」

と呶鳴りつけ乍ら、恭しく三寶にのせて來た七八冊の筆先をよみ始め出した。

喜樂は頭が痛くなつて来て、氣分が悪くて仕方がない。そこで、

喜樂『其筆先なら何べんも聞いて居るから、聞かして貰はいつでもよい、何もかも知つてゐる』

というや否や、

中村『コラツ小松林、お筆先が苦しいか、サア是からお筆先攻にして退かしてやる、サア早く小松林、此お筆先を聞いて、トツトと會長サンの肉體を立去れ、そして其後へ變性女子の身魂坤の金神さまがお鎮まり遊ばすのだ、會長サンの肉體は、貴様のよな四足の這入る肉體だないぞ、コラ退かぬか』

と呶鳴りつける。村上や四方平藏が傍から、

村上『コラ小松林、何を愚圖々々してゐるのだ、早く會長の肉體を飛出して、園部の内藤へしづまらぬか、惡の靈の年の明きだぞ』

と三方から攻めかける。四方平藏は口を尖らして、

四方『コレ小松林サン、お前サンもよい加減に改心をなさつたら如何ですか、お前サンの改心が出来ぬ爲に、教祖さまが有るに有られぬ苦勞をなされてゐるなり、

役員信者が日々に心配をいたし世界の人民が大變に苦しんで居るぢやないか、サア早く駿河の稻荷へ歸りなさい、ここは稻荷のよな下郎の寄る所ぢやムいませぬぞや、水晶魂の誠生粹の身魂斗り集まつて御用を致す龍門館の高天原でムいますぞや」

ウンウンと手を組で、三方から鎮魂をする、どうにも斯うにも仕方がないので、會長は、

喜樂「そんなら仕方がないから、小松林は今日限り、いんで了ふ、そして坤の金神さまに跡へ這入つて貰うて御用をして貰ひませう」

といふと、竹藏が、

中村「コレ平藏サン、用心しなされや、又園部のよにだまされるかも知れませぬで。悪神といふ奴は何處までもしぶとい奴だから、ウツカリしとると馬鹿にしられませぬ。本當に小松林は改心しとるのだない、偉相に笑うて居るぢやありませんぬか、コラ小松林、そんな甘い事吐して、會長の肉體を使はうと思つても、此中村が承知をせぬぞ、サア何ぞ證據を出せ、いよいよ會長の肉體を離れたといふ事

を明かに示して、教祖にお詫を致さぬと、どこまでも許さぬのだ。モウ斯うなつた以上は三日かかつても、十日かかつても、會長の肉體から放り出さなおかぬのだい

と四股をふんで雄健びをする、千言萬語を盡して諭せば諭す程反對にとり、どうにも、かうにも始末がつかぬやうになつて來た。そこへ八木から福島久子がやつて來て、教祖さまに挨拶をし、終つて慌ただしく喜樂の前に來り、

久子「何とマア平藏サン、お筆先は恐れ入つたものでムいますな。とうとう露國と戦争が起つたぢやおへんか、まだ會長サンは御改心が出來ませぬのかい」

中村「コレはコレは福島ハンどすか、よう來て下さつた、神さまのお筆先は恐れ入つたもんどすな、こんな御大望が始つて居るのに、まだ小松林が頑張つて、會長サンの肉體を離れぬので、今皆の役員がよつて説諭をしとるのどすが、中々ど澁太うて聞いてくれませぬワ、どうぞあんたも一つ言うてきかして下さいな」

と福島家の辨舌家に應援をさせようとかかつてある。又こんな口喧しい女にとつつかまつては大變だと思ひ、便所へ行くやうな顔して、ソツと裏口から飛出し、西

町の 大槻鹿造の宅へ一目散に逃て行つた。

大槻鹿造とお米サンの二人が喜樂の走つて行つたのを見て、

大槻「會長サン、又喧嘩が始まつたのかな」

と笑うてゐる。

喜樂「八木の福島が今やつて來よつたので、うるさいから逃げて來たのだ」

といふと大槻鹿造は、

大槻「アハ、又例の小松林サンかな、まアここに久子が八木へ歸る迄、ゆつくと泊りなさい。新宮の婆アさまも婆アさまだ、立替だの立直しだのと、第一それが私は氣に食はぬのだ、大槻鹿造は大江山の酒呑童子のみたまだなんて、婆アさまが吐かすので、何奴も此奴も人を鬼扱ひにしやがつて、むかつくのむかつかぬ

のつて、外の婆アぢやつたら、此鹿造も承知をせぬのだけれど、何と云うてもお

米や傳吉の母親なりするもんだから、辛抱してゐるのだ、本當にトボケ人足計り

集まつたもんぢや、それよりも牛肉でもここでたいて食ひなさい、何れ久子が平

藏か中村が捜しに來るに違ないから、牛肉の臭で往生さしてやるのも面白かる」

と幸さいひ牛ぎゅう肉にく屋やを開かい業げふしてゐるので、店みせから三さん百ひゃく目めほど上じやう等とうを持もつて來きて、裏うらの離はな

れでグツグツと煮たいて食くひ始はじめた。そこへ中なか村むらが、

中なか村むら「大おほ槻つきサン、會くわい長ちやうサンはもしやここへ見みえては居をりませぬかな」

と裏うら口ぐちの方ほうから尋たづねて居をる。鹿しか造ざうはチツと耳みみが遠とほいので、明はつ瞬きり分わからなんだが、お

米よネが、

お米よネ「中なか村むらハンか、マア這は入いつて牛ぎゅう肉にくでも食くひなさい、今いま會くわい長ちやうに牛ぎゅう肉にくをすすめて

食くはしてゐる處ところぢや、樫かしの實み團だん子ごを食くつたり、芋いもの葉はのお粥かゆを食くつとるより、餘よつ程ほど

氣きがきいてゐるで、ここは大おほ江え山やまの酒しゆ呑てん童どう子じと蛇じやとの因いん縁ねんの身み魂たまの夫ふう婦ふの所ところへ鬼おに三さぶ

郎らうハンが來きて居をるのだから、みたま相さう應おうで牛ぎゅう肉にくを食くて居をるのだから、お前まへもちと

鬼おにの仲なか間まい入りしたらどうぢや」

と擲から拵かうてゐる。中なか村むらは鼻はなをつまみ乍ながら、顔かほしかめて這は入いつて來きて、

中なか村むら「御ご免めんなはれ、大おほ槻つきサン、あんたは教けう祖そハンの御ご總そう領りやう娘むすめを女によう房ぼうに持もつたり、

結けつ構こうな御おん子こを貰もらうて居をり乍ながら會くわい長ちやうサンにそんな事ことを勸すすめて濟すみますか、四よツ足あしを

食くはしたり、餘あまりぢやおへんか」

と不足らしく唝鳴つてゐる。鹿造は笑ひ乍ら、

大槻「今の世の中は一日でも甘い物喰て、好きな事をするのが賢いのぢや、お前もちと改心して牛肉でも食て、元氣をつけ、古物商でもやつて金儲けをし、立派な着物を着て甘いものでも食つたらどうだ、何程善ぢや善ぢやというてお前等一人位がしやちんなつても、誰も相手にする者が無いぞ、會長サンは流石は能う分つとるワ、此時節に四足の肉が食へぬの何のと、そんな馬鹿な事をいふ奴がどこにあるものか、餘程よい阿呆だなア」

とからかひ半分に唝鳴つてゐる。お米サンは又お米サンで、お米「コレ中村ハン、お前は播磨屋の竹ハンというて、随分博奕もうち、女も拵へ、肉もドツサリ食た男ぢやが、さう俄に神さまにならうと思つたて、到底成れはせぬぞえ、あんな新宮の氣違婆アさまにトボけて居らずに、チト明日から牛肉でもかついで、そこら賣りに往つたら如何だい、誰か賣りにやらさうと思つてる處ぢやが、五圓がとこ賣つて來ると一圓位儲かるから、そしたらどうだな」

と厭がるのを知りつつ態とにからかうてゐる。中村は蒼白な顔になり、

中村「兔も角會長サンを返して下され、大本の御用をなさる因縁の身魂だから、こんな所へ来て貰ふと、だんだんに身魂が曇つて仕方がないと教祖さまが仰有りました、サア會長サン早う去にませう」

と引張らうとする。會長は、

喜樂「コレ中村はん、最前から牛肉を三百目かけて貰うて一人で食つて了うた、

これは小松林が食たのだから、これから坤の金神さまに三百目程お供へしてから歸ぬから、教祖ハンや、お久ハンや、平藏サンに宜しうというといてくれ」

とワザとに劫腹が立つので、からかうてみると中村は躍氣となり、

中村「どうも身魂の因縁といふものは仕方のないもんぢやな、惡の靈の所へはヤツパリ惡がよりたがると見えます」

といふのを聞咎めて、鹿造は、

大槻「コレ中村、おれを鬼とは何だ、貴様に三文も損をかけた事もなし、貴様等に惡といはれる筋があるか」

といふより早く、二つ三つポカポカと拳骨をくれた。中村は、

中村「ナアに大和魂の生粹の、おれは身魂だから、酒呑童子の靈位に恐れるものか」

と言ひ乍らスタスタと新宮さして歸つて了つた。さうかうして居る所へ、園部の浅井みといふ支部長がやつて来て、それから此處にグツグツして居つては又うるさいといふので、お米サンに何事も頼んでおき、日の暮頃から、園部へ行つて隠れて布教することになつた。

（大正一一・一〇・一八 舊八・二八 松村眞澄録）

第二章 難症（一〇五九）

明治三十七八年頃は日露戦争の勃發で四方平藏、中村竹藏等十二人の所謂幹部役員は愈世の立替で、五六七の世になる、それまでに變性女子を改心をさしておかねばお仕組が遅れると、しやちになつて、信者の家を宣傳にまはり……會長が

改心せず、又小松林の居る内は、門口の鬨一つ跨げさす事はならぬ、大變な神罰が當ると一生懸命に一軒も残らず觸れ歩いてゐる。そしてどんな立派な事を會長が言うても、一つも聞いてはならぬ、小松林が良金神さまの御仕組を取りに来てゐるのだから……とふれまはした。信者は一人も残らず、熱心な十二人の活動で、彼等の云ふ事を固く信じて了ひ、且つ園部で狐の眞似したのが大變に崇つて、信者一般から四ツ足の守護神と思ひこまれたからたまらぬ。此時喜樂の云ふ事を聞いて布教に従事してゐた者は西田元教と淺井はなといふ五十餘りの婆アサン二人のみであつた。

西田と淺井とは代る代る園部を十二時頃に立つて三里計り日をくらし、綾部へやつて来て、大槻鹿造の家で、夜中ソツと會長と會見し、教理を研究しては、又夜の間に園部へ歸り、園部を根據として、細々と宣傳をやつて居た。喜樂は意を決して、園部迄夜の間に淺井に伴れられて、逃げのび、船井郡や北桑田郡の信者未開の地を宣傳して居た。

片山源之助といふ材木屋がふと園部の支部へ參拜して来て、教理を聞き、俄に

信者となつて、幽齋の修行を始め、天眼通を修得し、旅順の要塞を透視したり、
日露戦争の始末を豫言したり、いろいろと不思議な事が實現したので、非常に澤
山の信者が集まつて來た。さうすると又もや綾部の連中が嗅つけやつて來て、澤
山の信者の前で、

「會長は小松林といふ四ツ足の守護神が憑いとるのだから、相手になつては可
ませぬぞや、貧乏神ですから」

と吹聴する。片山の天眼通が呼物となつて澤山の信者が集まつて來た。そこへ綾
部から來て、會長の悪口雑言を竝べ立てるので、譯も知らぬ信者は一も二もなく
信じて了ひ、會長を輕蔑し、片山先生片山先生と尊敬して、遂には會長を邪魔者
扱ひにするやうになつて了つた。西田は大變に憤慨していろいろと活動したけれ
共、綾部の妨害が甚しいので、頽勢を挽回する事が出来なかつた。それから會長
は再び綾部へ歸り、假名計りの教典を作り、西田元教に持たせて宣傳に歩かすこ
ととしてゐた。

再び綾部へ歸り、離れの六疊に蟄居して教典を書いてゐると、又もや四方中村

の幹部がやつて来て、

中村「會長サン、行けば行く程茨室、神に反いて何なとして見よれ、一つも思惑

は立ち致さんぞよ、アフォンとして青い顔をして、家のすまくらに引つ込んで、

人に顔もよう會はせず、悄氣てゐるのを見るがいやさに、神がくどう氣をつける

ぞよ……と現はしなかつた筆先を實地に御覽になつたでせうな。さうだからどつ

こへも行くでないと仰有るのに、小松林の四ツ足にチヨ口まかされて、又しても

又しても、綾部を飛出しなさるもんだから、こんなザマに會ふのです、モウこれ

からはどつこへも行かず、教祖さまの御命令を聞いて役員の言ふ通りになされ、

世界の人民が苦みますから」

と中村がそれみだか……といふやうな冷笑を浮かべて喋り出した。會長は、

喜樂「ナニ、私は失敗したんでも何でもないワ、自分の心がお前に分るものか、

細工は流々仕上げを見て貰はな分らぬワイ」

と言はせも果てず、中村は大きな聲で、

中村「コラ小松林、まだ改心を致さぬか、ツツポにおとしてやるか、慢心は大怪

我が元だぞよ」

と呶鳴りつける。四方平藏は側から、

四方「會長サン、あなたの仰有る事も先になつたら又聞く時節が來ますから、今の所ではお氣に入らなくても辛抱して御用聞いて下され、今年來年が世界の大陸、グヅグヅしてる時ぢやムいませぬぞや、これ程御大望が差迫つて來て居るのに、大本の御用繼ともある人が、そこらをウロウロとウロつきまはるとは何の事ですか、教祖さまが、又何時もの病が出て小松林がそこら中へつれて歩くから、役員氣をつけよ……と厳しう仰有るのですから、こうして皆の者があなた一人の事に付いて心配して居るのに、お前サンは吾々役員が可哀相とは思ひませぬか」

と詰りよる。會長は、

喜樂「お前らがトボけてるのが可哀相なから、早く目をさましてやろうと思つて、いろいろと氣をつけるけれども、小松林の四ツ足が吐すのだなどいつて一口もきかず、目をさましてくれぬので、綾部に居つても用がないので、今の内に一つでも神界の御用をしておかうと思つて、そこら中を布教に歩くのだ。日露戦争が

起つても、それ位で世界の立替が出来ない、まだまだ世界の戦争があり、それから民族問題が起り、いろいろ雑多な事が世界に勃發して、最後にならねば立替は出て来るものぢやない、ここ十年や二十年で、そう着々と埒があくものか、今の内にチツと目をさましておかぬと、此戦争は濟んで了ふなり、立替は出て來ぬなりすると、又虚言ぢやつたと言つて信者が一人も寄りつかなくなつて了ふ、つまりお前達は一生懸命になつて神さまのお道を潰さうとかかつてるやうなものだ」

といふのを皆まで聞かず、

「コレ會長サン、お前サン等が何程小賢しい理屈を並べても誰も聞く者はありません、一分一厘違はぬお筆先だと仰有る神さまの御言が違つてたまりますか」
などと頑張つて、一言も聞入れぬのみか、益々四ツ足扱ひを始めて始末に了へぬので、澄子と相談の上、何事も沈黙を守り、一時の間も時間を惜んで、教典を書き現はすことに全力を盡して居た。

そうした所が西田が一ぺん北桑田へ來てくれと祕かに頼みに來たので、何とか

して又もや綾部を脱け出さうと考へて居た。幸に八木の祭典に出張する事となり、前に述べた如く八木を夜ぬけして、園部へ走り、それから人尾峠を乗越へて、宇氣といふ山里へ日の暮頃に落つき、安井清兵衛といふりウマチスで身體の自由を失ひ苦しんでゐる老爺サンの鎮魂をなし、其夜はそこで一泊する事となつた。西田が鎮魂をすると、爺イサンは其場で足が立ち、座敷中を歩いて見て、大變に喜び、それから熱心な信者となつたが元來が村中でも受けの悪い親類の財産を併合して、財産家になつたやうな爺だから、金銭の執着心が甚うてモ一つといふ改心が出来ぬので、僅に室内を歩くよにはして貰うたが、まだ外へ出て働くまでにはならなんだ。そこで爺イサンが西田に對して言ふには、

安井「どうぞ私が山へ行けるよにして下さつたら、内の林の杉や檜の屑をさがして切つて、それで神さまのお祭り場所を建て、教會を開き、私が隠居の代りにお守をさして貰ふ」

と蟲のよい事を言ひ出した。そこで元教が大變に腹を立て、

西田「神さまの御祭り場所を建てるのに、屑をよつて建てるといふ様な事を云ふ

爺ぢイは嫌いやだ。一番いちばんよい木きを上げあげるのが信神しんじんの道みちぢやないか、そんな事こと言いうとると、又また元の通とほりいざりになつて、折角せつかく拵こしらへた財産ざいさん迄までなくなつて了しまうぞ」
と云いつたきり、サツサと安井やすゐの内うちを飛出とびだし、それきり變屈へんくつ人の西田にしだは寄よりつかぬやうになつて了しまうた。果はたして此爺このおやぢは元の通もと とほりの難病なんびやうになり、欲よくにためた財産ざいさんも息むす子の縫之助ぬひのすけが人ひとにだまされて、一獲千金いつくわくせんぎんのボ口儲まづけをせうとして大失敗だいしつぱいをなし、財産ざいさんの九分通くぶどほりまで、三年さんねんほどの間あひだになくして了しまうた。

さて會長くわいちやうは西田にしだと共に其時そのじぶん分ぶんこれもリウマチで平太へたつて居ゐた小西こにし松元しょうげんといふ男をとこの内うちへ訪問ほうもんして、暫しばらく其家そのいへを根據こんきよとして布教ふけうに従事じうじしてゐた。此小西このこにしは園部そのべの支し部ぶへ駕籠かごに乗のつて出でて來きて、西田にしだの鎮魂ちんこんで即座そくざに足あしが立たち、大變たいへんに喜よろこんで、材木ざいもくなどを獻納けんなふし、支部しぶの擴張くわくちやうまでやつた位くらいな熱心家ねっしんかであつた。此小西このこにしは川漁かはれふが大變たいへん上手じやうづで寒中かんちゆうでも一寸ちよつと出でて來くると、三升さんじやうや五升ごしやうの川魚かはうををとつて來くる河童かつばと仇名あだなをつけられて居ゐる酒飲さけのみ爺おやぢである。毎日まいにち三升さんじやう位くらいは平氣へいきで平たひらげて、朝あさから晩ばんまで女をんなを相あひ手に酒さけを吞のんで居ゐつた。西田にしだが小西こにしの病氣びやうきを直なほした時とき今こんご後は決けつして魚うををとつてはいかぬ、そして酒さけを二三年にさんねん吞のまぬやうにせぬと今度こんどはリウマチ所じこか中風ちゆうふうになつて

了ふと注意しておいたのも聞かずに、寒の内に網を持って宇津の川原へ籠り魚を掬ひに行つて、柳の又ツと川へ出た、幹からふみ外し、川へドンブとおち込み、再び大熱を發し、元の通りにリウマチになり、晝夜間斷なくウンウン唸つて苦んでゐた。そこで西田が再び鎮魂をして餘程よくなつたが併し、足の痛みが止まつた丈で、行歩の自由が叶はぬ。そこで喜樂を綾部から引出し、小西の鎮魂をして貰ひ、病氣を本復させて、神さまの御用に使はうとしたのであつた。喜樂は西田と二人で小西の内へ尋ねてゆくと、小西は宮村の内田官吉といふ弟の家に世話になり、薬風呂をわかして養生をし乍ら、神さまを念じてゐた。そこで會長が始めて小西に面會し、二日計り逗留の間に二三回鎮魂をしてやつた所、漸く全快し六里計りの道を徒歩で宇津へ歸り、一生懸命に神さまを念じてゐた。澤山の信者が諸方から集まつて來て毎日二三十圓計りのお賽錢の收入があるので、小西がよい氣になり、ソロソロ信者の女に手をかけたり、朝から晩まで酒を呑み始めた。其時喜樂は京都へ行つて皇典講究所へ通うてゐるので、西田に任して宇津の小西の廣間の方は構う事が出来なんだ。さうすると小西がソロソロ慢心をし出して、

西田のいふ事を聞かなくなつて来た。一人息子の増吉といふのが二十聯隊へ入營し、日露戦争に出征してゐた。そして朝から晩まで自分の息子の無事に歸る事計りを祈り乍ら、澤山の信者の鎮魂をやり、日に日に信者はふえて来る許りであつた。さうした所が俄に電報の間違で増吉が戦死したといふ知らせが、北桑田の郡役所から届いたので、松元とお末といふ夫婦が西田を前後より差挟んで、ソロソロ不足を言ひだした。其お末婆アサンの言はザツと左の通りである。

末「コレ元はん餘りぢやないか、内の増吉は信心さへして居れば滅多に戦死する氣遣ひはない、金鷄勳章を持つて歸らしてやるというたぢやないか、ソレに此電報は何のこつちや、奴狸奴が人を「ダマ」しやがつてサア早う出てゆけ、内の爺も爺ぢや、華を第一といふ法華經の信者が、綾部の狸にだまされて、仕様のない神をまつるもんだから、こんな目に會うたのだ。早う神さまを叩きつぶして川へ流しなされ、コラ元公早ういななか」

と雪が二尺ほど積つてゐるのに無慘にも外へつき出した。西田は日の暮前に二尺程も積つてゐる雪の中へ放り出され、漸くにして半里許りの山路を登り、人尾峠

の頂きまで登りつめると、風の吹きよせで雪が五六尺もつもり、身動きも出来ぬやうになり、其夜を泣きもつて明かした事もあつた。然るに小西増吉は幾回となく危険な場合を神さまに助けられ、同じ村から六人召集されて出征してゐた者が、五人まで負傷したり戦死したりしてゐるにも拘はらず、増吉丈は怪我一つせず、二十聯隊の全滅した時に僅か二人残つた其一人であつた。そして金鷄勳章を貰うて聯隊長の從卒となり樂に勤めて歸つて來たのである。それから小西がビツクリして西田に葉書をよこしあやまつて來て、

「どうぞ一ぺん遊びに來てくれ」

というので西田も再び小西の宅へ行き、一所に神の道を開いてゐたが、又もや衝突してそこを飛出して了うた。其時は會長はすでに別格官幣社建勳神社の主典をつとめてゐた。そこへ小西から手紙が來て、

「矢代といふ所に大變キツイ曲津が居るから、私の手にあはぬよつて、先生に助太刀に來て貰いたい」

といふので、公務を繰合はして宇津へはるばる行つて見ると、

「周山村の矢代といふ所に吉田龍次郎といふ人がありますが、其奥サンが此間から二度許り参つて來られますが、主人が如何しても博奕をやめぬから、やめるよに祈祷がして貰ひたいといふのですが、神さまに伺うてみると大變な曲津がそこには巢くうてゐるから、お前の力ではどうせだめだから、會長サンに御願ひをせいと云はれましたから、一寸御手紙を上げました」

と云うてゐる。それから小西の信者に案内をして貰うて矢代へ行つた。丁度明治四十年の夏の始めで田植の最中であつた。それから吉田の宅へ行つて見ると、自分が行くのを知つて、曲津は早くも逃げ出し、何にも居らぬやうになつて居た。其家の主人の龍次郎氏はどつかへ行つて居つて不在であつたが、妻君のお鶴サンに面會し小西の言うたやうな事を聞かされ、そして曲津が居りますか……と尋ねるので、何も居りませぬと答へると、たよらない先生ぢやなアと言ふやうな顔をして、お禮だというて金二圓包んでくれた。それから吉田家と懇意になり龍次郎氏は建勳神社へ二三回も尋ねて來て、いろいろと神勅を伺うたりし乍ら、妻君の熱心で何時とはなしに大本へ歸依するやうになつたのである。

第二三章 狐狸々々〔一〇六〇〕

明治卅八年の八月、西田元教は種々と艱難辛苦して山城の宇治で數十人の信徒をこしらへ、茨木清次郎と云ふ人の座敷を借つて盛んに布教をやつて居たが、あまりの多忙に一度應援に来て呉れと云ふ端書を寄越したので、自分はソツと綾部を未明に飛び出し、鞆をさげて須知山峠を登つた頃、太陽が昇られた。それから一生懸命に榎木峠、観音峠を越え、園部の支部へ一寸立ち寄り才幸太郎と云ふ信者を荷持ちとし、徒歩にて龜岡、王子を越え沓掛から道を右にとつて伏見に着いた時は、已に太陽は西の山の上一二間ばかりの處にあつた。伏見の安田庄太郎と云ふ信者の家に立寄つて見た處、瓦屋で今竈へ火を入れて居る最中、ユツクリ話も出來ずして居ると、中村の股肱となつてゐる男の事とて、

安田「海潮ハン、何で綾部に居りなさらぬ。又しても病氣が起りましたか。海潮のする事は何も彼も後戻りばかりぢやと教祖さまは仰有るのに又行くのですか。さあ歸りなされ、それとも今竈へ火を入れて居る最中ですから話しも出来ませぬ、今夜泊つて下さい。又後で話をしますから………」
と云ふ。

「これはまだ目が醒めぬのか、愚圖々々しては大變………」
と幸太郎を促して早々に立別れ、伏見の豊後橋を渡つて宇治川の長い土手を遡り、綾部から二十四五里の道を漸く夜の八時頃茨木の宅へついた。行つて見れば人が一杯詰つて居る。南郷國松、茨木清次郎、岡田熊次郎、長谷川仙吉、其外七八人の世話方が出来て大變な勢で月例祭をやつてる處だった。家の内にも外にも參詣者が一杯詰つてゐる。海潮が見えたと云ふので澤山の信者が涙を流して喜んでゐた。それから自分は綾部の者には少しも知らさず、清次郎の家で布教宣傳をやつて居ると、毎日五六十人から百人位の參詣者が出て来て、いろいろの病人がお神徳を頂いて歸るので宇治の町は坊主と醫者を除く外、全部信者になつて了つた。

そして近村からも三四里の處から日々參拜する非常な盛況である。宇津の小西松元の廣間が氣にかかつて居るので、一生小西の處へ行かぬと云ふた西田元教を無理に勧めて、視察の爲めに才幸太郎と共に使にやつた。さうすると松元は自分の宅が狭いので産土の八幡神社の廣い社務所を借つて、そこで神様を祭り大變な勢で布教宣傳をやつて居つた。さうして西田が來たのを見て小西は、

小西「よう珍しい、能う忘れずに來られましたな」

と横柄に云ふて居る。さうした處が小西の神懸の様子が大變に怪しいので一寸影から審神者をして見ると、何でも狸が憑依してる様なので押戸を開けて見ると、手のとれた古い佛さまが五つ六つ無雜作に突つ込んである。そこで西田が、西田「小西サン、こんな蟲の喰た佛像は川へ流したら如何だ。此奴あ屹度狸が守護してゐるから、其奴がお前に憑つて居るのでお前の神懸が可笑しうなつて、一寸もあはぬ様になつたのだ」

と云ふと、小西が大變に怒つて、

小西「馬鹿の事云ふな。お前は海潮の狐の尾先に使はれて來たのだらう」

と悪口をつき、大勢の信者の前で散々に罵倒するので西田は立腹し、そこを立出で宮村へまはり、芹生峠を越えて貴船神社を右に見乍ら、京都を横断して漸く宇治へ歸つて来てブツブツ小言を云つて居た。さうすると翌日になると、西田が眞青な顔になりブルブル慄ひ出した。よくよく調べて見ると瘡を起して居るのである。そこで海潮が審神すると、西田が口を切つて、

「俺は宇津の八幡様の社務所に居る佛像を守護して居る狸だ。俺の大切な御本尊を川へ流せと吐しゃがつたから、此奴の生命を取らにやおかぬ」

と意地張つて益々身體を苦めるので、摺鉢を西田の頭に着せ、其上に艾を一掴み乗せて灸を据えろと「熱い、暑い」と云ひ出し到頭落ちて了つた。それから其翌日は何ともなかつたが、三日目の同じ時刻になると西田が、

西田「又來やがつた。何糞ツ」

と氣張つてゐる。されど狸の憑靈は猛烈な勢で襲ひ來り、又瘡を慄はせて苦めて居る。自分は今度は西田の頭に濡れた手拭を着せ其上に摺鉢を乗せて、百刃ばかりの艾をつけて扇で煽ぎ乍ら鎮魂して居ると、ヤツとの事で落ちた。それから二

三遍チヨコチヨコやつて來たが到頭退散してしまひ、西田は元の通り元氣になつて布教に従事して居た。

話は後へ戻るが、西田の手紙を見て綾部を立てて園部の支部へ立寄り、それから小山の田井儀兵の宅に一寸一服してゐると、東から園部へ這入つて來た汽車の汽笛の聲が、何とはなしに驚きと悲しみとを含んでるので、海潮は田井儀兵に向つて、

海潮「あの汽笛の聲は誰か轢死したに違ない」

といふと、

田井「如何にも何時もとは違ふ、烈しい聲ですな」

と外を覗くと野良に居た澤山の人が一生懸命に鐵道へ駆けつける。自分も宇治へ行く道だから、此處でユツクリして居れぬと鐵道の側へ行つて見ると、小さい青い顔した男が胴から二つになつて五六間ばかり引きずられて眞青な顔して死んで居る。西田が自分を迎へに來て轢かれて死んだのではないかと思ふ位、其顔がよく似て居たので側へ寄り、よくよく見れば、さうではなかつた。其間に巡查が來

たりいろいろして調べて居た。轢かれた處の砂の上に新庄村の何某と木の先で土に書いてあつた。後にて聞けば此男は僅た一圓五十錢の主人の金を使ひ過ぎ、それを園部の親類へ借りに来て拒絶せられ轢死したと云ふ事を新聞で知つた。さて才幸太郎の顔が俄に其轢死した男に見え出し氣分が悪くて仕方がないのを無理に宇治迄荷を持たして居たのである。才幸太郎は時々瘡を又慄ひ出し、審神して見ると、

才「俺は小山の軌道の上で轢死した男だ。一番先にお前が俺の顔を見たので憑いたのだ」

と云ふ。それから又摺鉢の灸で、やつとの事で全快させ園部へ歸した。さうこうして居ると、伏見の安田から聞いたと見えて三牧次三郎と云ふ中村の乾兒が宇治へやつて来て、南郷國松や長谷川仙吉其外の役員に種々雑多の海潮や西田の悪い事を云ひ、

三牧「良の金神様に敵とうて来た奴だから相手になるな」
と云ひ出し、到頭卅九年の一月元日の朝大勢寄つて自分を放り出して了つた。自

分は一文も旅費なしに小山の田井氏の宅迄歸つて來ると澤山の信者がよつて來て泣いて喜び四五圓ばかりの小遣ひを呉れた。それを以て久し振りに綾部へ歸つて來た。それから西田は其月の十五日に三牧次三郎や南郷其他の者の計略にかかつて荷物一切を取られた上、放り出されてお雪と夫婦連れ伏見へ行き、お雪は或燃絲の工場へ女工になつて這入り、西田は按摩を稽古して、商賣片手に伏見地方に布教して居たが、四十二年に自分が綾部へ歸つて大廣前を建てたりお宮を建てる様になつてから、ソロソロ綾部へ歸つて來て、頻りに宣傳する事となつたのである。

これより先、西田と三牧は宇治の橋熊と云ふ顔役に頼まれて其乾兒等の家の祖靈祭を夜になると頻りにやつてみた。さうした處が其祖靈箱が時々躍り出し、お供物をすると魚のお供の方へカタツと音をさしては向き直つたり、階段を下りたりするので、靈と云ふものは偉いものだ。本當に西田サンや三牧サンは偉いと云ふ評判になり、何處もかも競ふて祖靈祭を頼んでみた。橋熊は親分の事とて自分の宅だけは海潮にして貰ひ度いと云つて特別に頼みに來たので、自分が行つて祖

霊祭をすませ、一服をして居ると橋熊が妙な顔をして、
橋熊「もし先生、宅の祖霊さまはまだ納まらぬのですか、他家の祖霊さまは皆動
くの、何故宅丈は動きませぬ。貴方は先生であり乍ら霊が利かぬのですか」
と不足相に云ふので、狸が這入つて動くのだと明かす譯にも行かず、
喜樂「私は祖霊祭は今日が初めてだから勝手を知りませぬ、三牧さんが上手です
からして貰ひなさい」

と體よく云ふた。さうすると今度は、三牧を頼んで祖霊祭を改めてやつた所が、
大變に箱が動き出したので、三牧の信用が高まり、西田がやつても自分がやつて
もチツとも動かぬので到頭迷信家の信用を失ひ、自分は眞先に放り出され、西田
も次で追ひ拂はれて了ふたのである。綴喜郡の郷の口の淺田安治といふ酒造屋の
妹に、お鶴と云ふ癩疔病者があつた。其女の病氣を癒して呉れと云つて頼みに來
たので、遙々と郷の口へ行つて鎮魂した處、一月ばかり癩疔は止まつて居た。さ
うした處酒倉の中で又もや癩疔が起つたのでソロソロ海潮の信用が薄くなつた處
へ、其村で廿才位の娘で永らく足の起ため病人があつた。自分は再び宇治へ歸つ

て南郷の宅に居て布教してゐると、又頼みに來たので今度は三牧と小竹が鎮魂に行つた。さうすると其娘が、

「俺は三年前に死んだ此處の婆アぢやが村中の誰彼に内所で金を何程何程貸した」と誠にやかに喋り立てるので、合して見ると千圓ばかりの金だから、病人の兄が、

「家の婆アサンの靈がお前の處へ金を貸したと云ふが返して呉れ」

と其處ら中へ歩いたので、村中の大騒動となり、

「一體誰がそんな事云ふたか」

と調べて見ると、三牧が鎮魂して其娘が喋り出し、小竹と云ふ男と二人がついて

居ると云ふので、巡査がやつて來たり色々と悶錯が初まつた。そこで郷の口から

自分を呼びに來たので行つて見ると、其娘は頻りに婆アサンの聲色を使ふて、

「如何しても金を貸した」と意地張つてゐる。それから三牧と小竹を宇治へ歸し、

自分が一晚泊つて様子を考へた處が、非常に怪しいので刀を一本主人から貸して

貰ふて祝詞をあげ乍ら空を切つて見ると箆笥の横から晝の眞中に七匹の豆狸が飛

び出した。それと共に其娘は病氣が癒つて了つた。さうすると海潮にお禮を云ふ

所か、

「お前サンは三牧の様な弟子を使ふて宅の娘に狸を憑けて、こんな村中の騒動をさしたのだらう」

と反對に理屈を云ひ、

「ど狸奴が、早うかへれ」

と呶鳴りつけられるので到頭狸憑けにしられて了ひ怨みを呑んで宇治まで歸つて来た。さうすると、南郷や長谷川が三牧と一つになつて、三十九年の正月元日に朝つぱらから自分を放り出す事となつたのである。靈界の事分らぬ連中になると困つたもので、譯を云へば云ふ程益々疑ふて始末におへぬものである。それから自分も病人の鎮魂がサツパリ嫌になり、神懸の修行も斷念して了ふた。が大正五年に横須賀の淺野サンの宅へ行つた時、参考のために又もや幽齋の修行をして見せたのが元となつて淺野サンが靈學を熱心に研究し始める事となつたのである。

(大正一一・一〇・一八 舊八・二八 北村隆光録)

第二四章 呪の釘（一〇六一）

明治卅三年八月下旬の事であつた。會長は大本に在つていろいと一心に教典を執筆してゐる時、郷里の穴太から……元治郎危篤すぐ歸れ……といふ電報がついたので、直に教祖に其の由を申上げた。教祖は早速に神さまにお伺ひになり、教祖「餘程の大病ぢやそうですから、早う行つて助けて上げなされ、元ハンもこれで改心が出来て、反對をせんよにならはりませう」

との言に早速草鞋脚絆に身を固め、木下慶太郎氏をつれて、翌早朝から龍宮館を立出で、十四里に餘る山路を辿りつつ其日の黄昏時に漸く穴太の自宅に着いた。其夜は二人共旅の疲れで前後も知らずに寝て了つた。

翌朝早く起て病人は如何かと調べてみるに、手もつけられぬやうな熱と痛の爲に、一寸も身動きならずウンウンと唸り聲を立てて苦んでゐる。直に神前に向かつて元治郎の病氣平癒を祈願した。さうすると喜樂の腹の中から、固まりがゴロゴロと上つて来て、

喜樂きらく 『此病このやまひは商賣敵しやうばいがたきで十五人の鍛冶屋じふごにんかぢやの團體だんたいから呪のろはれてゐるのだから、これからすぐに産土うぶすなさまへ參拜さんぱいして見よ。お宮みやの裏うらの二本にほんの杉すぎの木きに、元治郎もとぢらうの姿すがたを畫ゑがき、其上そのうへに七本の釘しちほんくぎがうつてあるから、早はやう行いつて其釘そのくぎを抜き取り、其釘跡そのくぎあとにつき立たての餅もちをうめておいたら、此病氣このびやうきはキツと直なほる』

との事ことであつた。かくと聞きいた傍かたはらの人は半信半疑はんしんはんぎの體ていで、會長くわいぢやうの顔かほをポカンとして見みつめて居ゐた。弟おとうとの幸吉かうきちと木下慶太郎きのしたけいたらう氏しと下男げなんの幸之助かうのすけと三人さんにんが、神かみのお告つげのままに、直様産土すぐさまうぶすなの小幡神社をばたじんじやに至いたり搜さがしてみれば、果はたして二本にほんの大杉おほすぎに五寸位ごすんぐらゐの釘くぎが八本はちほんづつ打込うちこんである事ことを發見はつけんし、直ただちに釘くぎを抜き取とつて急いそいで歸かへつて來きた。そこへ村むらの衛生係えいせいがかりが巡查じゆんさと醫者いしやをつれて入來いりきたり、

『此病氣このびやうきは猩紅熱しやうこうねつだから、傳染でんせんする虞おそれがある、今いますぐに豫防よぼうの手當てあてをしなくてはならぬ、又またお前まへたちは家いへを一步いっほも出でてはならぬ』

ときびしく言いひ出だした。其當時そのたうじは村中むらぢゆうに猩紅熱しやうこうねつが流行りうかうして、どこの家いへにも二人三ふたりさん人の患者くわんじやが唸うなつてゐたのだから、醫者いしやも猩紅熱しやうこうねつと診察しんさつしたのであつた。會長くわいぢやうも二三年計にさんねんばかり醫學いがくを研究けんきゆうした事ことがあつたのを幸さいはひ、病理上びやうりじやうから傳染病でんせんびやうでない事ことを説明せつめい

し、これはきつと生靈の祟りだといふ事を主張した。醫者等は嘲笑うて、
「此開けた世の中に、生靈の祟りなどといふ事があるものか」
と一笑に附して聞入れぬ。會長は熱心に靈的作用を説き、且抜いて來た其釘を
見せて證據とした。醫者を始め巡査衛生係は半信半疑の體で一先づ引取つて了つ
た。不思議にも今まで苦悶してゐた元治郎は、社内の杉から釘を一本一本ぬき取
ると同時に體の中が涼しく覺え、やがて全部の釘をぬき取ると同時に、やがて
熱も痛も拭ふが如く去り、今まで身動きだに出來なんだ者が、俄に起上つて喜び
勇み、もうこれなら大丈夫だと泣き笑ひをした。ここに始めて見舞に來てゐた人
も神徳の廣大無邊なるに驚いた。元治郎は喜樂の不在宅で鍛冶屋を職業としてゐ
たが、下男げなんの幸之助かうのすけは澤山たくさんの鍛冶職人かぢしよくにんから頼まれて、氏神うぢがみの杉すぎの木きに元治郎もとぢらうの姿すがた
をかき、釘くぎを打込んで呪のろひ殺さうとしたのであつた。それを神さまの靈眼れいがんに依つ
て發見し、病氣びやうきが直つたのだから、俄に會長くわいぢやうが恐しうなり、自分じぶんの罪つみが發覺はつかくせむ
事を恐れて、其夜そのよの中に自分じぶんの女房にようぼうと共に何處どこともなく逐電ちくでんして了つた。あとに
て聞けば幸之助かうのすけは紀州きしうの故郷こきやうへ歸ると共に元治郎もとぢらうと同じ重病ぢゆうびやうにかかり、大變たいへんに苦

んだと云ふ事であつた。二三日穴太に逗留してゐると、近所の熱心な人が參つて来て、いろいろと病氣の御祈願を頼むので鎮魂をし、難病を癒してゐた。やがて綾部へ歸らうとする時、元治郎に、
喜樂「お前は神さまの思召に依つて、こんな目に會つたのだから、キツと幸之助を恨めてはならぬぞ、一日も早く眞心に立歸つて、神さまの御恵を享けるよに祈つてやれ、幸之助が決して悪いのではない、餘りお前の我が強いから、大勢の同職人に憎まれたのだ、お前もこれから病氣が直つたら、心を入れかへて信神をせいで」

といつて木下と共に綾部へ歸る事となつた。そして歸りがけに重ねて、喜樂「お前の病氣は呪ひ釘をぬいたのだから、一旦は全快したやうであるけれど、お前の罪は消えてをらぬから、再悩みが出て来るだろ、しかし命には別状ないから安心せい、二月計りは苦しいが、それを越えたら元の體になるだらう」
といつておいた。其後又もや體がそこら中がウツキ出し、腰のあたりが腫れて、再身動きもならぬ様になり、困つてゐたが六十日目の夜、二三升の膿汁が腰の腫

物からはげ出し、始めて病氣が全快した。今まで信神の嫌であつた元治郎もこれより御神徳の有難い事を悟り、今までのバクチを止めて朝晩神さまを拜む心になり、とうとう神の道を宣傳するやうになつたのである。

それから八十八歳になつた喜樂の祖母が亡くなり、百日祭をすました翌日家が焼けて了つたので

、母と共に家族一同が、一先ず綾部へ引つ越して來ることとなつたのである。自宅の焼ける事は二三年前から、神さまに知らされてゐた。それ故に何時も元吉に氣を付けて村々の百姓から、修繕の爲に預つて來た農具を、別の小屋の中へしまつておけと云つておいたお蔭で、上田家の物は何もかも残らず焼けて了つたが、預つた農具は少しも焼けなかつたのは不幸中の幸であつた。

家の焼ける前の日、西田は弟の幸吉と綾部へ一度參つて來うと、相談をきめ、家に寝てゐると、喜樂が黒木綿の紋付羽織を着て歸り來り、火の用心が悪いから、二三日どこへも出るなと云つたと思へば夢であつた。又母の耳へ、どこからともなく、火事があるから氣をつけ、どこへも行くなと云ふ聲が聞えたので、不思議

がつて注意をしてゐた所、俄に佛壇の上の方から火が出て、丸焼けになつて了うたのである。其の時王子の栗山のおことハンが綾部へ参つて來たので、歸りがけに手紙を書いて、龜岡の古世の岩崎といふ伯母の内へ言づて、穴太が焼け相なから氣をつけて貰ひたいというてやつた。伯母は一日二日グズグズしてゐる内に穴太が焼け、穴太から行つてみると、喜樂の手紙が來てゐるので、驚いたといふ事があつた。

母及弟妹は二三年綾部に來て居たが、餘り元の役員の反對がきつく、小松林の親ぢやというて虐待をされ、しまひには役員に蹴り倒されて息が止まり、折よく西田が歸つて來て介抱して、息を吹き返したといふやうな鹽梅で、母は大變に怒つて、一生綾部の方向いて小便もこかぬと云つて、明治卅五年の秋一先づ園部まで引上げ、それから卅六年には、元の穴太へ歸つて了うたのである。

併し其時の役員は或迷信上から行つたことで、決して悪い事とは夢にも思つてゐなかつたのである。御道の爲世界の爲になることだと固く信じて、喜樂の母の横腹まで蹴つて氣絶さすやうな目に會はし得々として居たのであつた。實に迷信

程恐しいものはないのである。

（大正一一・一〇・一八 舊八・二八 松村眞澄録）

第二十五章 雜草（一〇六二）

建勳神社に奉仕中、喜樂は休日を利用して宇津の小西の布教してゐる八幡宮の社務所へ出張して見た。さうすると澤山な信者が集つて、祈祷して貰うてゐる。

湯淺仁齋氏の、妻君も滿艦飾をこらして參拜して居た。さうすると小西が大勢の前で、

小西「あゝ會長サン、來なさつたか、狐はモウ去にましたかなア」
とおちヨくる様に無禮な事を言ふ。喜樂はムツとしたが、いやいや待て待てと胸をなでおろし、喜樂は永らく綾部で大勢に壓迫や妨害を加へられ、隠れ忍んでやうやう西田と二人してここにお廣間を拵へ、ここを根據として大本の教を開かね

ばならぬのだから、今怒つては大事の前の小事だと、ワザと平氣な顔をして笑うて居ると、小西は尚もつけ上り、

小西「皆サン此人は綾部の海潮と云ふ人で、瑞の御靈の大神様が御守護して御座つたのぢやが、官幣社の神主になつたりするもんだから、神様が愛想を盡かして、此松元に移り替へなさつたのだから、瑞の御靈の御神徳は皆此松元におさまり、海潮サンは蝉のぬけがらになつた後へ、稻荷山のケツネがついて居ますから、モウ駄目です。こんな人に鎮魂をうけてはいけませぬ」

と人の前で臆面もなく喋り立てる。喜樂は、喜樂「あゝさうだ、私は脱殻だ、どうぞ松元サンに、一時も早く綾部へ来て御用をして貰はねばなりませぬ」

といったら、松元は得意になつて、

小西「綾部の教祖様が變性男子の御身魂で、此松元が松の大本で、變性女子の御用をするんだが、モチと海潮の改心が出来ぬと、中々行けませぬワイ」

と云ひ乍ら、折角開いて置いた北桑田の信者を小口から、第二の中村のやうに悪

口を言うてふれまはして了うた。其時湯淺夫婦も松元の教會へ病氣の爲に參拜して居たが、湯淺はどうしても松元の行方が氣にくはぬので、自分は船岡の妙靈教會へ月參りをし、妻君のみが隠れて信仰をして居つた。それから明治四十一年の二月の事であつた。會長は建勳神社を辭職して、御嶽教の假本廳が伏見の稻荷山に宏大な館を立てて設置されてあつたので、神宮官廳から頼まれて、副管長格の主事といふ役をつとめて居た。喜樂が御嶽教へは入つたのは、御祭神が國常立命であるのと、將來神の道を布教するに付いて見學の爲に、無報酬でつとめて居たのである。そこへ湯淺齋次郎氏が小西に頼まれたと云つて使に來た。其時海潮は大坂の生玉に設置されてある、御嶽教大教會へ教會長なので二三日出張して居た。其不在中に湯淺は御嶽教の本廳で泊めて貰ひ、喜樂の書いた澤山の書物を半分計り讀んで了ひ、非常に信仰を固めて居た。そこへ喜樂が歸つて來て湯淺に會ひ來意を尋ねると、

湯淺 『小西松元サンの息子の嫁に妹のお君さまを貰ひたい』

との事であつた。海潮は小西松元の爲には非常に侮辱されて、餘り面白くなかつ

たけれど、お道が大事だと思つて隠忍して居た所である。一層の事妹をやつたならば小西も反對をせず、自分の云ふことを聞くやうになるだらうと思ひ、早速穴太へ歸つて母と相談の上、僅に十五才の妹を無理にたらかして、湯淺氏の媒介で、一先づ湯淺の宅へ落着き、結婚式を擧げさしたのであつた。それから小西は改心するかと思ひの外、益々増長してどうにも斯うにもならぬやうになり、遂には各信者の小西に對する不信任が加はつて來て、一人も來ぬやうになつて了つた。さうすると小西が獨斷で綾部の大本へ、明治四十三年にやつて來て、お廣間に先生顔をして坐り込み、藥の指圖をしたり、鎮魂を始め出した。教祖さまは鎮魂や藥の指圖が大の嫌ひなり、二人の中に立つて大變に氣をもんだ。さうかうして居る内に御嶽教の機關雜誌『經世軍』といふ小さい發刊物の記者をして居た千葉埴磨が御嶽教を放り出され、食ふことが出來ぬから、麥飯でもよいから綾部に置いてくれぬか……と手紙をよこしたので、承諾の旨を答へてやると、すぐに夫婦二人で綾部へやつて來て、それから宮澤圓龍といふ法華坊主上りの神道家を呼びよせ、栃木縣の吉田村に二億萬圓の金がいけてあるから、掘り出して國家の爲に盡さう

かといひ出し、千圓許りも工面して大本から金を引出し、そして其實は半分以上自分の借金なしをしたりして、大本から小西の息子の増吉と田中善吉とが吉田へ金掘に行つた事があつた。モツと金をよこせ、キツと出ると云つて来たけれど、モウそれぎりで金を送らず田中と増吉とを綾部へ呼び返した。サアさうすると千葉が教祖さまに甘く取入り、ソロソロ會長の排斥運動に着手し、教祖の命をうけてはそこから中を訪問して、自分勝手なことをやつて居つた。

小西は綾部に居れなくなつて、再び宇津へ歸り、神様を拜んで居たが、二三人の信者が代る代る参拜して居た。増吉は千葉と宮澤にスツカリ抱込まれ、大本へ反旗を翻して兩人を吾家へ連れ歸り、園部の片山源之助や淺井はな等と謀し合はして大本乗取りの策を講じてみた。そこで湯淺がワザとに小西の味方となつて陰謀を残らず探り大本へ報告したので、彼等も策の施すべき所なく、とうとう東京へ宮澤は逃げ歸り、千葉は片山源之助と園部の新町で報公義會といふ會を拵へて、片山を大將とし、淺井はなをしまひには放り出して、勝手な熱を吹き、盛に大本に反對をつづけてみた。小西はとうとう御嶽教の教導職となつて、京都の大

本の信者の宅へ入り込み、盛に病氣直しをやつて、流行らしてゐたが、其家の妻君と妙な關係が出来、主人に見つけられ、女房は直に裏の井戸へ投身して死んで了つた。それから大變な悶着が起り、法律問題が持上らうとした。さうすると小西増吉が自分の姉と一緒にやつて来て、反對に喜樂に熱を吹き、此事件を甘く事ずみさせるためのあやまり金を喜樂の貧弱な懷から無理に出さして歸つた事がある。

それから小西は京都にも居れなくなり、再び宇津へ歸り中風の氣になつて弱つてゐたが、大正六年頃とうとう歸幽して了つた。小西の弟子に小澤惣祐といふ男があつて、これが又江州の貝津へ支部を開きに行き、その娘と妙な關係が出来て放り出され、綾部へもやつて来て役員と始終喧嘩許りしてゐたが、遂には綾部を飛出し茨木や肝川などにお廣間を建て、暫くすると其土地の役員と衝突して飛び出し、遂には龜岡の旅籠町で京都の大内といふ後家をチヨロ口まかし、又失敗して大正六年頃綾部へ歸つて来て、元の祖靈社で腹を十文字にかき切り、喉をきつて自殺して了つた。それから杉井新之助といふ男が出て来て、大本を交ぜ返し、

自分が全權を握らうとして、二代澄子に看破され、叱りつけられて、柏原の大本の支部へまはされ、そこで大本の反對運動を起し、大社教の教會を建て、今に宣傳してゐるさうである。

(大正一一・一〇・一八 舊八・二八 松村眞澄録)

第二六章 日の出〔一〇六三〕

明治三十二年の夏、上谷の修行場にて幽齋修行の最中審神者の喜樂に小松林命かむがかり神懸せられ、

「如何なる迫害や壓迫があつても綾部を去つてはならぬ。兔も角明治卅五年の正月十五日までは綾部で辛抱をせよ」

とのお諭しであつた。それで喜樂はあらゆる迫害と侮辱を隱忍して卅五年を待ちつつ、神妙に神様の道を修行して居た。愈卅五年正月十五日が來たので、

喜樂 『今後如何しませうか』

と伺つて見た所、

『明日の朝からソツと園部の方面を指して行け』

との神示が降つたので輕装を整へ、只一人澄子に其意を告げ布教傳道の途に上つた。澄子は初めての妊娠で已に臨月であつた。何時出産するかも知れない場合である。自分も大變に初めての子の出産であるから氣にかかつて仕方がない。けれども一旦神様に任じた身の上、妻の爲に神務を半時でも恩にする事は出来ぬと決心し、夫婦相談の上出立したのである。

先づ園部本町の奥村と云ふ雜貨店へ落ちつき、主人夫婦の懇篤なる世話によつて其家の別宅を無料で貸して貰ひ、且つ衣食萬端を奥村から支給され日夜宣傳に従事しつゝあつた。奥村氏は園部に於て相當の地位名望もあり財産もあつた。さうして清廉潔白の聞えの高い紳士である。其奥村氏が先頭に立つて商業の傍、熱心に宣傳したので、地方の紳士連中は先を争うて入信した。園部へ落ちついてから十二日目の夜に、綾部に残してある澄子が出産した様な夢を見たので、神様に

聞いて見ると出産をしたから一先づ歸つてやれと云ふ事であつた。そこで奥村氏に其旨を告げ留守中を頼みおき、淺井はなと云ふ婆サんに神前の御給仕を命じて只一人スタスタと檜山の坂原巳之助と云ふ熱心な信者の宅へ立寄り晝飯を供せられ一服して居ると、其處へ慌ただしく綾部から四方祐助と云ふ爺サンが尋ねて來り門口から、

祐助「海潮サンはお内に居られますか」

と尋ねてゐる。坂原巳之助は綾部の中村一派のやり方に愛想をつかし、喜樂の教のみを信従してゐたのだから、屹度喜樂は此處に居るだらうと思つて尋ねて來たのである。奥の間で祝詞を奏上して居た喜樂は此聲を聞いて靜かに表へ出て、喜樂「あゝ祐助さん、能う來て呉れた、まあ一服しなさい」

と云ふと爺サンは庭に立ちはだかつた儘、

祐助「これ海潮、何をグツグツして居るのだ。綾部は大變な事が出來て居ります

ぜ」

とゴツゴツした聲で睨めつける様に云ふ。喜樂も何か澄子の身の上になんか就て變事で

も出来たのではないかと、少しく不安の念に驅られて、

喜樂 祐助サン、澄子は機嫌よく出産しましたかな

と尋ねると、祐助は首をブリブリと振つて、

祐助 ㊦ えー、出産も糞もあるものか。自分の女房が臨月になつてゐるのに教祖様に隠れて其處ら中をうろつき廻り、悠悠閑々と何の事ぢやい。綾部には大變の事が出来ましたぞ。それだから教祖様が何處へも行くでないと仰有るのだ。教祖様の命令を背くと何時でもこの通りになりますのぢや

と息を喘ませて諒解し難い事を呶鳴りたてる。喜樂は益々不安の雲に包まれて、

喜樂 ㊦ 澄子は安産しただらうなア。そして男か女か何方が出来た、早く知らして呉れ

と云はせも果てず、祐助は又もや首を頻りに振つて、

祐助 ㊦ え、凡夫の俺がそんな事分つて堪るものか。海潮サンは天眼通が利くぢやないか、小松林に尋ねたら、それ位の事は分りさうなものぢやないか。それが分らない様な事で偉さうに神懸ぢやの、先生ぢやのとは云ふて貰ひますまい。綾部

ら

ら

ら

ら

ら

ら

は何どころの騒ぎぢやないわ。改心をせぬと、こんな事が出来ると何時も教祖さまが仰有つたのを尻に聞かして居るものだから、こんな不都合な事が出来たのぢや。初産の事とて教祖さまも大變な心配、此祐助も何れ丈心配したかしれませぬぞや。お前サンも綾部へ又ケ又ケと歸つて来る顔がありますまい。歸るのが嫌なら歸らんでも宜しい左様なら」

と云ひ乍らスタスタと坂原の家を出て行かうとする。喜樂は益す氣になつて、喜樂「これ祐助サン、吉か凶か、どちらか、それだけ聞かして呉れ」

と小さい聲で尋ねて見ると祐助は、

祐助「そんな事の分らぬ様な天眼通が何になるものかい」

とブツブツ囁き乍ら委細構はず驅け出し、

祐助「よう思案するがよい」

と捨臺詞を残して早くも綾部へ歸つて行く。喜樂は慌て坂原氏に送られ一目散に祐助の後を追ひ驅けた。さうすると祐助は三の宮のある茶店で腰をかけ、

祐助「あゝ云つておけば屹度歸つて来るに相違ない」

と高を括つて居る。

「兔に角安産した。そして女の子が出来た」と云つたら、「あゝさうか」と云つたきり喜樂は歸らぬから心配さしたら歸つて来るだらうと、綾部で役員信者相談の結果祐助が代表者になつて選まれて来たのだと云ふことが後になつて分つた。丁度自分が園部で夢を見た其日に直霊が生れたのである。其日は新三月七日舊正月二十八日であつた。祐助と三人連れで綾部の宅に歸つて見ると、盛に赤兒の泣き聲が聞えて居る。初めて自分の子の聲を聞いた時は何とも云はれぬ感じがした。然しあの聲で子は達者であるが、澄子の身體は如何だらうと案じ乍ら門口を跨げて見ると母子とも至極壯健であつた。それから教祖さまに、
「自分の女房が臨月で何時子が出来るか分らぬのに、神様の命令も聞かずに、そこから中に飛び出すのは餘り水臭いぢやないか」と
と散々叱言を云はれ、謝り入つて三十日の間、宮詣りのすむ迄綾部に蟄居して居た。さうすると園部の奥村から「澤山の信者が待つて居るから早く来て呉れ」と云ふ手紙が毎日の様に出て来るので、四月の三日再び綾部を飛び出し園部で布教

をつづけて居た。其留守中に自分が明治三十一年、穴太に居つた時から三十四年一杯かかつて執筆しておいた五百冊の書物を、四方平藏、中村竹藏の發起で立替の御用ぢやと云つて悉皆焼いて了つたのである。それから園部を根據として大坂へ教線を開き、陸軍砲兵中佐の溝口清俊と云ふ休職軍人と心を協せて大坂市の宣傳に従事して居た。此中佐の宅へ心安く遊びに来る、背のストラツとした、人品のよい少し頭の光つた男が溝口中佐に説きつけられて熱心な信者となり、追々中流以上の信者が出来て天王寺の附近に一萬坪の地面を買ひ、靈學會の本部を設置する段取とまでなつてきた。さうして其溝口の宅へ出入りして居た男と云ふのは、大坂の難波分所長の内藤正照氏であつた。内藤正照氏と溝口中佐と喜樂の三人はおほさかしちう大坂市中の稻荷下げの教會を巡歴して種々と靈術比べをやり、それを唯一の樂しみとして布教は、そつちのけに三百六十軒ばかり市中の神懸を探し廻つて靈縛をしたり、色々自分等の靈術を誇り得意になつて居た。今から思へば實に馬鹿らしい事を得意になつてしたと思ふ。然し此間に神懸に對する非常な經驗を得た事を思へば、これも矢張御神慮であつたかも知れぬ。それから北海道の銀行の頭取

をやつて居た山田文辰と云ふ男や内藤や、京都牧場の松原榮太郎等と人造精乳會社を、京都、大坂、園部に設置し、數千圓の金を醸出して一つの事業を起し宣傳の費用に當てやうと目論見、已に着手して居る所へ、京都の高松某が中村竹藏の指圖によつて會社の工場修繕の大工に雇はれ散々に喜樂の惡口をなし、それが基となつて松原榮太郎、若林某、山田文辰等が變心し出し、折角組み立てた發頭人の喜樂や内藤を放逐せむとした。中村は何かして喜樂が京坂地方で活動するのを妨害し、失敗の結果綾部へ逃げ歸り一閒へ押し込めて活動の出來ないやうにしてやらねば此儘にして置いては虎を野に放つやうなもので、大本の教をとつて了ふに違ひないと役員一同が相談の結果、かう云ふ手段をとつたのであつた。そこで喜樂は已を得ず精乳會社を脱退し、内藤正照と愛善坂の麓で神様を祀り、布教宣傳に着手して居た。難波新地の婦人科の醫者で杉村牧太郎と云ふ金光教の熱心な信者があり、又杉本恵と云ふ御嶽教の教導職や大坂大林區署に勤めて居た高屋利太郎、並びに鍼力職の池田大造らと圖り大宣傳をやつて居た。大坂の侠客の團熊や山田嘉平等も信者となつて大活動を始め、漸く曙光を認め、高屋利太郎は一

同の代表者として一度綾部へ参拜して來やうと云つて詣つて來た所、中村が一生懸命に喜樂の悪口をついて且脱線的の言葉を竝べ「洋服を着た様な連中は此處には來る事ならぬ」と高屋氏を箒で掃き出したので、高屋氏が大坂へ歸つて來て憤慨し折角組み立てた靈學會へ「ひび」が這入り、ゴタゴタして居る所へ中村竹藏の内命で三牧次三郎が尋ねて來て、此男が口を極めて喜樂を罵倒したので止むを得ず大坂を立ち綾部へ歸つて來たのは明治三十六年の十一月頃であつた。さうすると役員が寄つて集つて自分の洋服を剥ぎとり、帽も靴も服も引裂いて雪隠へ突つ込んで了ひ、

「さあ、これで四ツ足の皮を剥いでやつた。これで海潮も改心をして、おとなしくなるだらう。神に背いて致した事は何事も九分九厘でグレンと覆るとお筆に出て居りますが、これで海潮サンも氣がつくだらう」

と自分等が極力妨害しておき乍ら、神さまの業の様にすまし込んで居る。それから自分も再び離れの六疊に蟄居して又もや隠れ忍んで古典學を研究したり、筆の雫や道の大本等の執筆にとりかかり、明治三十八年の八月まで綾部に尻を据えて

時を待つ事としたのであつた。

(大正一一・一〇・一九 舊八・二九 北村隆光録)

第二十七章 仇第(一〇六四)

明治卅八年二月の事であつた。大本の四方平藏、中村竹藏其外十人の幹部は本年中に世の立替立直しが完成し、五六七の世が出現すると、脱線だらけの法螺を吹き廻り、日露戦争の最中なので、お筆先の神示が實現すると、大變なメートルをあげて逆上せあがり、中村竹藏の如きは筆先の文句の中に、道の正中をまつづくに歩けといふ語句のあるのを楯にとり、暗やみの世の中といふ文句を読み覚え、晝の眞最中に十曜の紋のついた提燈に蠟燭をとぼし、大道の正中をすました顔して、牛車が出て來うが、何が來うが、少しもよけず、左の手に提燈を持ち、右の手に扇子をすぼめて握り、肱を振つて歩くので、牛車の方からよけると、神

さまの御威勢といふものはエライものだ、誠の道の正中さへ歩いて居れば、どんな者でも此通よける……とますます圖に乗つて、往來の迷惑も構はず、筆先の文句を高らかに読み上げ乍ら、大道を闊歩するといふ逆上方であつた。或時農具を車に満載して賣りに歩き乍ら、元伊勢の方面まで宣傳に往つて居つたが、陰曆二日の月が見えたといふので、サア大變だ、三日月さまは昔から拜んだ事があるが、二日のお月さまが拜めたのは全く世の變るのが近よつた印だ、グズグズしては居れぬと、金の財布も荷物も車も、由良川へ放り込み、一生懸命に綾部へ走せ歸り、大變大變と連呼し乍ら、二階に齋つた神壇の前へ行つて、一生懸命に祈願を込め、フツと顔をあげると、そこに大きな水鉢に清水が汲んで供へてあつた。二階の窓があけてあつたので、雀が飛込み、水鉢の上に糞を一片たれたのが面白く水に浮いてるのを、フト眺めて、……ヤア愈立替が始まつた。水の中に優曇華の花が咲いてゐる……とさわぎまはるので、四方平藏始め幹部連中が、神前へ進んで之を眺め、ますます有難がつて、涙聲になり、祝詞を幾回となく奏上し、六疊の離に居つた喜樂の前へ出て来て、中村竹藏は肱を張り、さも鷹揚に、

中村「コレ會長サン、よい加減に改心をして、小松林サンに去んで貰ひ、早く坤の金神さまになつて、女房役をつとめて貰はぬと、時機が切迫致しましたぞ、昨日も昨日とて、元伊勢から歸つて來る際二日月が拜めるなり、今日は又お供への水の中に優曇華の花が咲きました、グツグツしては居られますまい、早く改心なされ」

と聲高に叱り附けるやうに云ふ。そこで喜樂は、

喜樂「二日月さまを拜めたのは別に珍し事はない、自分達は穴太に居つて、チヨコチヨコ拜んだ事がある、お前達はこんな山に包まれた狭い所に暮らしてるから、二日月さまが拜めたというて騒ぐのだらうが、そんな馬鹿な事を人に言つと氣違にしられるから、どうぞそれ丈は言はぬやうにしてくれ」

といはせも果てず、中村は口を尖らし、

中村「コラ小松林、昔から三日月といふ事はあるが、二日月といふ事があるかい、穴太で二日月をみたなんて、そんな出放題な事をいうて、水晶の靈を曇らさうとかかつてもだめだ。世の立替が近よつたといふ事を、良金神變性男子の御靈が大

出口神でぐちのかみとあらはれて、日出神ひのでのかみと龍宮りゅうぐうさまの御手傳おてつだいで立替立直たてかへたてなほしをなさる時節じせつが来たのだ。早くはや小松林こまつばやしが改心かいしんを致いたして、會長くわいちやうの肉體にくたいを去さり、園部そのべの内藤ないとうへ鎮まりて、坤ひつじまゐの金神こんじんさまの肉にくのお宮みやとならぬ事ことには、世界せかいの神佛事かみぶつじ人民じんみんが何なにほど苦むかしれぬぞよ、コラ小松林こまつばやし、それが嘘言うそと思ふおもなら、一寸二階ちよつとにかいの御神前ごしんぜんへ來きてみい、水晶やうのお水みづに優曇華うどんげの花はなが咲さいてる、それを見たら如何いかな小松林こまつばやしでも往生わうじやうせずには居をられまい」

と得意とくいになつて喋り立しゃべてるので、不思議ふしぎな事ことをいふワイ、又またロクな事ことではあらうまいと、早速さつそく二階にかいへ上あがつて見ると、雀すずめの糞ふんがパツと水みづにういて、白しろく垂たれ下さがり、丁度ちやうど優曇華うどんげの花はなのやうに見みえて居ゐる。喜樂きらくは一寸木ちよつとぎの箸はしの先さきで其それをすくうて、中村なかむらの鼻はなのそばへつきつけて、喜樂きらく「オイ之これは優曇華うどんげぢやない、雀すずめの糞ふんだ」
といつた所ところ、中村なかむらは妙めうな顔かほをしてだまり込こんで了しまうた。さうすると外ほかの役員やくゐんが約つまらぬ顔かほをして、

「どうぞ會長くわいちやうサン、こんな事ことを人ひとにいはぬやうにして下くだされ、笑わらはれますから」

と頼み込む可笑しさ。

これより先中村の女房であつた菊子といふのは、中村が毎日日日商賣もせず、脱線だらけの事をいひ歩くので、幾度となく意見をしたが、とうとう中村は怒つて、『お菊に小松林の悪靈がついた』……といひ出し、放り出して了つた。そして教祖の身内から女房を貰はうと考へてゐたが、福島久子を八木から引戻して自分の女房にしようと思つてゐたのを、喜樂に妨げられて目的を達せず、それより中村と久子とは大變に喜樂のする事成す事に一々妨害を一層猛烈に加へるやうになつて來た。

四五年たつた明治卅八年の頃には愈中村に教祖から妻帯をせよと、命令されたので、役員がよつてかかつて、いろいろ信者の娘を中村に紹介したが、如何しても首をふつて應ぜなかつた。中村は澄子の姉の龍子を女房に貰はうと、暗中飛躍を絶えずやつてゐたからである。龍子も心の中に中村の女房になり、改心をさせて、會長の云ふ事を聞かすやうにせうかと迄考へてゐた。併し中村は龍子を自分の妻となし、喜樂や澄子を退隱さして威張つてみやうという野心があつたので

ある。教祖けうそから龍子りゆうこの夫をととは中村竹藏なかむらたけざう、竹原房太郎たけはらふさたらう、木下慶太郎きのしたけいたらうの三人さんにんの内うちから選えらめとの命令めいれいが下さがつたので四方平藏しかたへいざう其他そのたの幹部連かんぶれんが、とうとう中村なかむらの妻つまにすることにきめて了しまつた。今いまでさへ喜樂きらくや澄子すみこはこれ丈壓迫だけあつぱくや妨害ぼうがいをうけてゐるのに、中村なかむらが姉あねの婿むことなつて、噪はしやぎ出しては堪たまらぬと思おもひ、教祖けうそに向むかつて、喜樂きらく「どうぞ今日けふ限り澄子すみこと離縁りえんして下ください、歸かへります」
といつた所ところ、教祖けうそも大變たいへんに當惑たうわくし、四方平藏しかたへいざうを呼よんで、教祖けうそ「どうぞ會長くわいちやうサンの、此事このことは、意見いけんに任まかしてくれ」
といはれたので、幹部かんぶの中うちでも少すこしく喜樂きらくの言いふ事ことを耳みみに入いれる木下慶太郎きのしたけいたらうを養やう子しにしたがよいと言いつたので、龍子りゆうこを別家べつけさせ木下きのしたを養やう子しに入いれる事こととした。そして八木やぎの福島久子ふくしまひさこの股肱ここうとなつて喜樂きらくの布教ふけう先さきを古物屋ふるてやに化ばけ込こんで、軒別けんべつに邪魔じやましに歩あるかしてゐた中村小松なかむらこまつといふ女をんなを中村なかむらの女房にようぼうにした。それから中村なかむらはスツカリ失望しつぱう落膽らくたんの結果けつぐわ、發狂はつきやう氣味きみになり、遂つひには自分じぶんの昔むかしからの陰謀いんぼうを、あたりかまはず自白じはくする様やうになつて來きた。

餘あまり中村なかむらは神かみさまに反對はんたいするので、神罰しんばつを受うけて糞壺くそつばへはまつて死しんで了しまふと

いふ事を明治卅七年の四月三日の夜、神さまから夢に見せられ、道の棊に書きとめておいたが、とうとう明治卅九年に其夢の如くになつて狂ひ死にをして了つたのである。

中村と八木の久子とは始終往復し、内外相應じて、會長の排斥運動を續行してゐた。久子は最近に至るまで、やはり喜樂を敵視して廿四年間不斷の反對運動を續してゐたのである。

かういふ具合で、如何しても迷信家連が會長の説く所を一つも用ひず、そんな書物や學にあるやうな教は惡の教だからと云つて、一人も聞いてくれぬので、澄子と相談の結果、再宣傳に飛出し、村上房之助が漸く目が醒めかけたので、村上を従へ、八木まで行つて見ると、角文字は一切使ふ事はならぬ、外國の行り方ぢやと、盛んに攻撃、喜樂の書いた神號迄も焼きすてさしたくせに、八木の神前には角文字で、良金神國常立尊と太く記した提燈が一對ブラ下り、其外の神具にも残らず、角文字が記してあつた。そこで喜樂は、

喜樂「福島サン、此字は外國の文字で、神さまにお氣障りにはなりませんか」

と尋ねてみると、福島はビリビリと眉毛を上げ下げし、
福島「此角文字はお前に懸つた小松林が書いたのとは違うから差支はない。信者
が眞心であげたのだから、喧しくいふな、假令外國の字でも日本人の手で書いた
のだ」

と勝手な理屈をまくし立てる。そこで喜樂は村上と二人、八木を立出で、北桑田
方面へ布教に行つた。それから二三ヶ月経つて八木へ立よつて見ると、福島は瘦
衰へ、骨と皮となり、夫婦が涙ぐんで控えて居る。様子を聞いてみると、良金
神さまの命令で、三十日の間一日に一食の修行をなし、あと三十日は生の芋をか
ぢり、あと三十日は水許りを飲み、あと十日は水一滴も飲まずに修行をした。今
日が丁度百日の上りで、福島寅之助は、これから天へ昇つて、紊れた世の中を水
晶に致すお役になつたから、今女房と別れの水杯をした所だ、何だか體がフイフ
イとして、獨りで空へあがりそになつて來たといつてゐる。喜樂はそれとはなし
に丸山教會の或教師が名古屋で屋上三丈三尺の高臺を作り、これから天上すると
いうて、二百人許りの信者は三丈三尺の高臺の下から、天明海天天明海天と祈つ

てゐた。教師はいつ迄たつても黒雲が迎ひに來ぬので、氣をいらつて宙に向つて飛上つた途端に、高臺から轉落し、大腿骨をうつて負傷をしたといふ事が其頃の新聞に出てゐたので、それを話して聞かし注意をすると、妙な顔して次の間へ入つて了ひ、力のない聲で、

福島「今日の十二時に天上をさす所であつたけれど、小松林の惡神が來たによつて、一時間仕組をのばしたぞよ。早く家内の久どの小松林を去なせよ」

と呶鳴つてゐる。喜樂は福島久子に餘り氣の毒でたまらぬので、曲津がだましてゐるのだといふ事も出來ず、大方靈が天へ上るのだらうから、肉體に氣をつけて、松の木へでも登りそうだったら止めなされ……と忠告をして歸つたものの心配でたまらぬので、八木の或茶店に休んで、福島の様子を遠くから考へて居た。もし松の木へでも上りそうになつたら止めに行かうと思つたからである。

そしてたら福島の守護神は……都合に依つて仕組を延ばした、明日の朝まで延ばした、明後日まで延ばした、と一週間程延ばした。出鱈目な託宣をしたので、福島も氣がつき、久子を八木の町へ買物にやつた不在の間に、四五年もかかつて晝

夜せつせと書いた自分のお筆先を一所によせ、石油をかけて一冊も残らず焼いて了ひ、

福島「コラおれを騙しやがった悪神奴が」

といきなり御神前をひつくりかへし、神さまの祠を残らず外へ叩き出してうたといふ面白い物語もあつた。

それから又綾部より役員が出張して、神さまを齋り直し、盛んに會長の攻撃を續行してゐた。會長は澄子と相談の上、嵯峨京都伏見の支部などへ氣をつけてやらうと浦上を伴れて、綾部を立出で、園部に一泊してそれから八木へ立寄ると、

福島寅之助が矢庭に奥から飛んで来て、

福島「ヤア四足が來よつたシートツ」

と追ひまくり、ピューピューと痰を吐きかけ、

福島「サア早う去ね去ね、汚らはしい」

と箒ではき立てる。モウ斯うなつては、何程事を解けて諭してもダメだと思ひ、匆々にここを出立して、嵯峨の信者の友川彌一郎といふ家に出張した。ここには

支部が拵へてあつて、喜樂の教を遵奉してゐた熱心な信者である。然るに友川の態度がいつとはなしに、極めて冷淡になつて居るので妻君に聞いて見ると……、今朝大本から畑中傳吉サンが出て来て、今上田の貧乏神がお前の所へ来るだらうから、敷居一つまたげさしても汚れる、キツと貧乏するか、大病になるによつて、良金神様や教祖の御命令で氣をつけに來たのだといつて、歸らはりました、そしてこれから京都や伏見の方へ知らしに行くといつて出られました……と包まず隠さず述べ立てた。そこで海潮は浦上と共に京都の三ヶ所の支部を尋ねて見たが、どこもかしこも箒で掃き出したり、敷居を跨げさしてくれぬ、仕方がないので、明治座の少し東の横町に畑中の親類で、高町といふ信者があるので、そこを訪問して見ると家内中二階へ上つて了ひ、首のゆがんだ、少し間のぬけたやうな女が一人、坐つて居る。それは畑中の妹でお鯛といふ女であつた。喜樂は、

喜樂「お鯛サン、高町サンは何處へ行つたかな」

と尋ねると、

お鯛「何處へ行つたか知りませぬ、ここ三日や十日は歸らぬといつて、他所へ行

かはりました」

と云ふ。

喜樂「そんならお藤サンは何處へ行つたか」

と聞いて見ると、

お鯛「一寸よそへ行かはりました」

といふ。

喜樂「晩には歸つて来るだらうな」

と聞いて見ると、

お鯛「イ工晩になつても歸らはりしまへん、高町サンもお藤サンも晩にも歸らは

りしまへん」

と垣をする。晩に歸ると云へば又夕方に來られては困ると、豫防線をはつて居た

のである。それから外の人の宿所を尋ねて見たけれど、何を言つても、知らぬ知

らぬの一點張で仕方がないので「女が夜さり内に居らぬ様な事では、どうで碌な

事をして居るのではなからう……」と腹立紛れに二階へワザと聞える様に言ひ放

つてそこを立ち、七條通まで下つて來ると、浦上は三牧次三郎や西村榮次郎といふ信者の家を訪問すると云うて別れ、西田が伏見方面からやつて來たのに出會し、一所に伏見や宇治の方面へ宣傳に行く事とした。

高瀬川に添うて勸進橋の傍まで下り乍ら、

西田「畑中の奴、どこからどこ迄も自分等の邪魔をしゃがる、大方伏見の方へも行つてゐるに違ない。彼奴がもしもここへやつて來やがつた位なら、此高瀬川へ放り込んでやるのだけれど」

などと西田が憤慨し乍らフト顔をあげて見ると、畑中傳吉が風呂敷包を負うて眞赤な顔をして出て來るのにベツタリ出會した。京都伏見間の電鐵がそこへ來て停車した。呶鳴る譯に行かず、

喜樂「オイ畑中又邪魔しにまはつたな」

といふと畑中は「ホイホイホイ」といつて走り出し二三丁許り行つて振り返り、ヤレまあ安心だといふ様な風をして居る。會長は大聲で……「馬鹿ツ」と二口三口呶鳴ると西田が、

西田「こんな所で大聲で唝鳴る者が馬鹿です」

と氣をつけたので、

喜樂「ホんに唝鳴る方が馬鹿だなア」

と言ひ乍ら、伏見の信者を二三尋ねて見ると、又箒で掃き出し、鬨を跨がさぬ。

「貧乏神サン、小松林サン去んで下され」

と連呼し冷遇するので這入る譯にも行かずはるばる宇治まで行つて、御室の支部

を訪問すると、ここも又畑中の注進によつて冷淡至極な態度を示して居る。

そこで西田と別れ、喜樂は只一人京都まで歸り、三牧の宅で浦上と會し、たつ

た一錢五厘より二人の中に金子がないので、徒歩で愛宕山を越え、保津へ出で、

八木へ立寄り、又もや放り出され、雨のビシヨビシヨ降る中を震ひ震ひ園部の淺

井まで歸つて、麥飯でも喰はして貰はうと思ひ、立寄つて見ると、ここも又冷淡

な態度で茶も吞まさず去んでくれと云ふ。仕方なしに又もや檜山まで歸り、坂原

へ立寄ると坂原は折ふし不在で、妻君が一人残つて居り、

「今綾部から畑中サンが出て来て、茶一杯吞ましてはならぬ、良金神さまのお氣

障りになると言ははりましたから、どうぞこれぎり、あんたにはすみませぬけれど、小松林サンが改心しやはるまでよつて下さるな」
といふ。二人は破草鞋を拾つて足につけ、坂路を上り下り、漸く須知山の峠まで出て来た。そこに蒟蒻を賣つてるので、蒟蒻を一錢五厘で三枚買ひ、宇治から二十四里の道を空腹を抱えて歸つて来たこととて何とも知れぬ甘さであつた。それから綾部へ歸り、浦上はこりごりして餅屋を始め出し、喜樂が神様を祭つてやつて非常に繁昌をし出した。さうするとソロソロ浦上が慢心し出し、神様の悪口や喜樂の行方までも非難し、頻りに反對を始めて居たが、とうとう養鶏場を開設して大損失を招き、折角儲けた金も一文も残らずなくした上、澤山の借金を拵へ、親族や其外の人々に損害をかけて綾部にも居られず位田へ逃げ歸り、細々と豆腐屋を營んで居る。

(大正一一・一〇・一九 舊八・二九 松村眞澄録)

第二十八章 金明水（一〇六五）

明治三十四年舊五月十六日、出口教祖始め、上田會長、出口澄子、四方平藏、中村竹藏、内藤半吾、野崎宗長、木下慶太郎、福林安之助、竹原房太郎、上田幸吉、杉浦萬吉ら一行十五人は、皐月の曇つた空を目當に徒歩にて出雲の大社へ神明を奉じて參拜することとなつた。此參拜が無事に濟めば、何もかも神界の因縁が判り、大望が成就するものだ、役員一同の考へであつたらしい。

先づ立原で一宿し、それから十里程歩いては泊りなどして、漸く但馬の八鹿へ着いた。さうすると道々役員連の空想的談話が始まつて來た。そこで喜樂は、喜樂「そんな事思つて居るとあてが違ふ」

と一口云つたら大變に役員の機嫌を損じ、喜樂に對して餘程冷淡な扱ひをするやうになり、「ナア二お前等がそんなことが分るものか、御筆先に出雲へいつたら因縁が分ると書いてある」……と威張りちらす。教祖は教祖で、出雲へさへいつてくれば皆の改心が出来る……とすましたものである。途中で四方春三の亡靈が

役員にうつつて、澄子と會長との間を不和ならしめやうとかかり、兩人は其亡靈の爲に非常に悩まされ、途々議論を衝突させ乍ら、日を重ねて鳥取に着いた。それから千代川を汚い舟に乗つて加露ヶ濱に出で、加露ヶ濱から舟に乗つて三保の關に着かうと計畫したのである。

恰度海が荒れて三日間船を出す事が出来ず、加露ヶ濱の旅館で一行十五人が泊り込み海上の凧ぎ渡るのを待つこととした。其時恰も海軍中將伊東祐亨氏が山陰沿海視察の爲にやつて来て同じ宿屋に泊つてみた。教祖が筆先を一枚書いて、伊東中將に宿屋の亭主の手から渡され、よく調べてくれ……といはれたが、それきりで何の返答も聞かなかつた。

喜樂は夜中頃に妙な夢を見た。それは海潮が際限もなき原野に立つてみると、東の方から大きな太陽とも月とも分らぬが、昇られてだんだんこちらへ近付き、澄子の懐へ這入られた夢を見て目がさめた。此月すでに澄子は妊娠してゐたのである。それから翌年の正月二十八日に女子が生れたので、朝野に立つてみた夢を思ひ出し、朝野と名をつけた。これは在朝在野の人々を濟度する子になるだろう

といふ考へと二つをかねて命けたのであつた。さうすると朝野が四つになつた年、自分から……わしは朝野ぢやない直日ぢやと言ひ出したので、直日と呼ぶやうになつたのである。三日目の朝、又もや磯端を傳ひに十里許り西へ進んで一泊し翌朝船を仕立てて、三保の關に渡り神社に参拜し、中の海穴道湖を汽船に乗つて平田に上陸し、徒歩にて大社の千家男爵の門前の宮龜といふ旅館に一行十五人投宿した。

二三日逗留の上神火と御前井の清水、社の砂を戴き、二個の火繩に火をつけて歸途につき、稻佐の小濱から松江丸といふ汽船に乗つて境港につき、それから徒歩にて米子に至り、一日計り歩いて又もや今度は帆船に乗り、加露ヶ濱の少し東、岩井の磯ばたにつき、行がけに泊つた駒屋の温泉場に再一泊し、又もや山坂を越えて舊六月の四日福知山まで、數百人の信者に迎へられ、漸く綾部へ歸つて來た。途中澄子は産婦に免がれがたきツワリで非常に苦み、石原から時田や其外の大男の背中に負はれて歸つて來た。

それから其火を百日間埋み火として役員二人が晝夜保存し、百日目に十五本の

蠟燭に火を點じ、天照大御神さまへ捧げることとした。又砂を本宮山や龍宮館の周圍に撒布し三四ヶ所の井戸に水を注ぎ、大島の井戸へ天の岩戸の産盥の水を一所にしてほり込み、金明水と名をつけたのである。其水を竹筒に入れ其年の舊六月八日に教祖は會長、澄子其他四十人計りの信者と共に沓島へ渡り、其水を海に投じ、此の水が世界中を廻つた時分には日本と露國との戦争が起るから、どうぞ大難を小難に祭りかへて貰ふやうに、元伊勢の御水と出雲の御水と、龍宮館の御水と一所にして龍神さまにお供へするといつて祈願をこめて歸つて來られたが、それから丁度三年目に日露戦争が起つたのである。

出雲參拜後は教祖の態度がガラリと變り、會長に對し非常に峻烈になつて來た。そして反對的の筆先も澤山出るやうになつて來た。澄子が妊娠したので、最早會長は何程嚴しく云つても歸る氣遣はないと、思はれたからであらうと思ふ。それ迄は何事も言はず何時も役員が反對しても辨護の地位に立つて居られたのである、いよいよ明治卅四年の十月頃から、會長が變性男子に敵對うといつて、彌仙山へ岩戸がくれだといつて逃げて行つたりせられたので、役員の反抗心をますます高

潮せしめ、非常に海潮、澄子は苦心をしたのであつた。それから大正五年の九月九日まで何かにつけて教祖は海潮の言行に對し、一々反抗的態度をとつてゐられたが、始めて播州の神島へ行つて神懸りになり、今迄の自分の考が間違つてゐたと仰せられ、例の御筆先まで書かれたのである。

今日迄の經路を述べ立つれば際限がなければ共只靈界物語を口述するに當り、本の大要を述べておくのも強ち無用ではないと信じ、ここに其一端を古き記憶より呼び出し、述ぶることとした。まだまだ口述したきことは澤山あれ共、紙面の都合に依つて本巻にて止めおくことにする。後日折を見て詳しく發表するかも知れぬ。

惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一〇・一九 舊八・二九 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・一〇 王仁校正)

~~~~~

靈界物語 第三八卷 舍身活躍 丑の巻  
終り